

第Ⅲ章 遺跡解説

本章では、図版に収録した木器出土遺跡の概略を述べる。原稿の執筆は、資料を提供した近畿各府県市町教育委員会や埋文関係機関に依頼したが、第Ⅱ章の「木器一覧表」との対応や表現法の統一を考慮して、編集事務局で加筆したところもある。ただし、遺跡の年代観・性格に関しては、執筆者の意見を尊重し、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期・中期・後期などの用語をそのまま残し、あえて統一していない。記述の重点を、木器が出土した遺構（河川・溝・井戸・土坑・包含層などが一般的である）に置いたため、遺跡全体の性格やそのほかの遺構・遺物に関しては、必ずしも十分な内容にはなっていない。さらに詳細を知るには、付記した参考文献を参照されたい。なお、遺跡解説の原稿は1987年11月に各担当者に執筆を依頼し、原稿が集まった段階で編集事務局が加筆・調整して、1990年11月に各担当者に校正を依頼した。したがって、本章は原則として1990年までの知見で、その後、発掘調査や遺物整理が進展して新知見が加わった遺跡も少なくないことはあらかじめ御了承いただきたい。

A 三重県

1 神部遺跡 (fig.190) じんぶ

上野市笠部字神部に所在する。1980年9月～10月に三重県教育委員会が発掘調査。当遺跡の北西約1kmのところにある北堀池遺跡と同様、木津川の左岸に形成された沖積地に立地する。調査に際し、南北約180mにおよぶ幅4mのトレンチを設定したが、調査区が遺跡範囲の東縁部に相当するためか、北端部で杭列や木器を含む堆積層、南端部で古墳時代前期の土師器が集中する一段低い堆積層を確認したのみで、明確な遺構は検出されていない。なお、出土遺物には弥生時代後期から古墳時代前期及び奈良時代の土器のほか、平安時代以降の土師器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器なども出土している。

木器はトレンチ北端部にあたる厚さ1m前後の一段低い堆積層から出土しており、槽などのほかは長い杭・板材等が大半を占めることなどから、水田畦畔及びそれに直交する水路に付随する杭・矢板の周辺に埋没したものと考えられる。なお、木器出土層の下位で弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土していることから、木器の時期を古墳時代前期とした。

〔木器番号〕13703, 18319, 19205

〔文献〕駒田利治「上野市笠部 神部遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981年

2 北堀池遺跡 (fig.191) きたほりいけ

上野市大内字北堀池・竹之下・中沢に所在する。1977年7月より1980年3月まで三重県教育委員会が発掘調査を実施した。木津川の左岸に位置し、その支流岩根川と山の川とにはさま

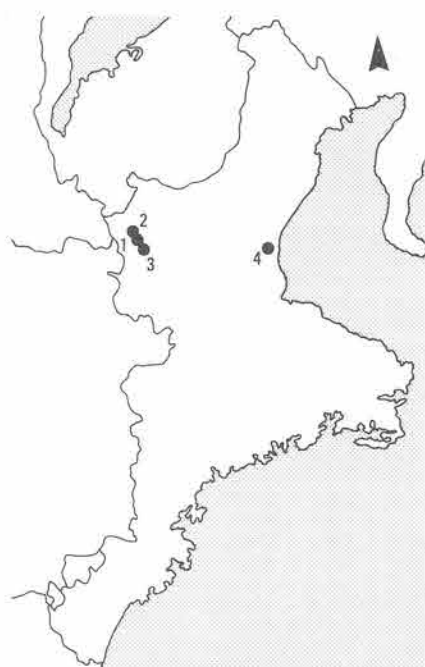


fig. 189 三重県の木器出土遺跡



fig. 190 神部遺跡木器出土地点
(1:25,000 伊勢路)



fig. 191 北堀池遺跡木器出土地点
(1:25,000 月ヶ瀬)

れた沖積地に立地する。縄文時代の前期土器片・後期の土坑、弥生時代中期・後期の土器も出土しているが、大半の遺構・遺物は古墳時代以降のものである。古墳時代の遺構には54棟に及ぶ竪穴住居や井戸・溝・水田跡などがあり、そのほか奈良時代の井戸・土坑、平安・鎌倉時代の掘立柱建物・条里溝・道路・井戸・土坑などを検出した。収録した木器は大溝・旧河道Ⅰ・旧河道Ⅱで出土している。

大溝は竪穴住居群の東、水田跡との間を南から北の木津川に向かって流れる。自然形成によると思われる流路で、幅3.5～7m、深さ約1.2mをはかる。最上層では古墳時代後期初めの須恵器が出土し、上層では加工板材・杭・丸太等による集水桙状の構築物が検出された。下層では古墳時代前期前半の土器群とともに、直柄鍬・泥除・曲柄鍬・竪杵・横槌などの農具、槽・曲物の底板・箱状品などの容器、舟形・刀子形・剣形などの祭祀具、各種建築部材など多量の加工木・自然木・種子等が出土した。

一方、居住区域である微高地の北東縁辺部は、木津川による堆積と浸食によってかなり凹凸のある河岸となっている。このようなよどみ状の河道のうち、南のものを旧河道Ⅰ、北を旧河道Ⅱとした。いずれも古墳時代前期前半を主体として弥生時代中・後期をも含む多量の土器と共に、農具・容器・建築部材・その他の加工木・自然木が出土した。

〔木器番号〕大溝；01205, 04906, 04909, 05004, 05109, 06603, 06610, 08908, 08912, 09301, 13403, 13405, 15012, 16308, 16311, 16704, 16804, 17704, 18301, 18308, 18318, 19002, 19105

旧河道Ⅰ；09117, 14507

旧河道Ⅱ；03804, 04309, 04410, 13902, 19816

〔文献〕駒田利治・山田猛・吉水康夫・谷本鋭次『北堀池遺跡発掘調査報告第1分冊』

三重県埋蔵文化財調査報告51-1, 三重県教育委員会1981年

駒田利治・山田猛・他『北堀池遺跡発掘調査報告第2分冊』三重県埋蔵文化財調査報告51-2, 三重県教育委員会1992年

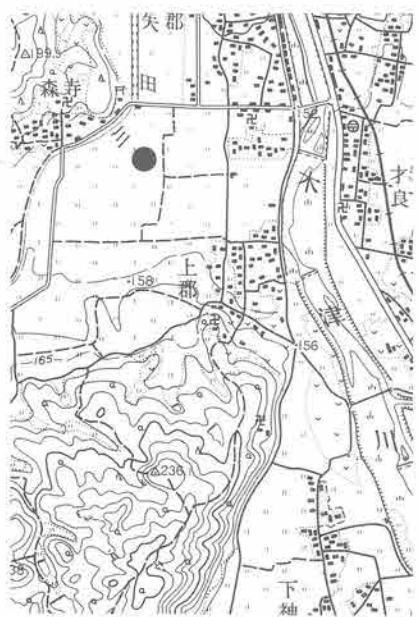


fig. 192 森寺遺跡木器出土地点
(1:25,000 伊勢路)

3 森寺遺跡 (fig.192) もりでら

上野市の南部、依那古地区の森寺字前出を中心に広がる遺跡で、弥生時代から中世に至るまでの複合遺跡である。森寺遺跡を含む上郡・下郡・森寺の圃場整備に伴い、上野市教育委員会と上野市遺跡調査会が1983年9月から1984年3月末まで、試掘調査・発掘調査を実施した。

森寺遺跡は、古山につながる山稜が南と西から迫り、それに沿って流下する矢田川と、東の低地部を北流する木津川との間の微高地上に広がる。延暦銘木簡の出土及び伊賀郡衙の想定地として知られている下郡遺跡の南西約700m、弥生時代の長頸壺が出土した才良遺跡の西約1kmに位置し、今次調査で、近接して原ヶ野遺跡・岩ヶ上遺跡が確認されている。

木器は、1956年1月に一本平鋤が出土した場所から約30m東に寄った地点の地表下1.5mから權（鋤?）が、さらに60cm下がったところから多量の木器が出土した。主な出土木器は、權（鋤?）、田下駄、箆、建築部材などで、そのほか漁撈用と考えられる竹串や多数の自然木がある。出土地は暗黒褐色の泥砂が堆積し、湧水の激しいところで、旧自然流路縁辺ないしそのよどみ部分と想定される。上層で土師器破片が出土しているのみで、共伴する遺物はないが、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての木器と考えられる。

〔木器番号〕旧自然流路上層；10103

旧自然流路下層；07414, 07507, 07508, 07702, 10836, 10839,
20004

〔文 献〕中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』上野市文化財調査報告5,
上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会 1978 年
森川桜男「三重県上野市森寺発見の木鋤」『古代学研究』14, 古代学研究会 1956
年

4 納所遺跡 (fig.193) のうそ

津市納所に所在する。1973 年 10 月～1975 年 12 月に県道バイパス建設に伴い三重県教育委員会が発掘調査。安濃川の左岸、標高 5 m 前後の現在水田地帯となっている沖積地に立地している。主な検出遺構には弥生時代前期の溝、中期の竪穴住居・方形周溝墓・土坑墓・溝、後期の溝、古墳時代以降の掘立柱建物・溝・配石遺構などがある。

収録した木器は大別して弥生時代前期、同中期、古墳時代の 3 時期にわたる。弥生時代前期の木器は B 地区から F 地区におよぶ下層で検出した幅 5 m 以上、深さ約 0.8m の自然流水路（河川）と D 地区下層東部の落ち込みや G 地区下層の落ち込みなどから出土した。前期中段階を中心とする土器群や自然木・木の葉・種子・獣骨などとともに、鋤・鋤・横槌・竪杵・斧柄・鉢・高杯・槽・杓子・匙・網杵・弓・紡織具・櫛・琴・鐸形（?）・編籠など多種大量の木器が出土している。

弥生時代中期の木器は H 地区下層の自然流水路（河川）から出土した。東西 7～8 m をはかり、北から南へ緩やかに傾斜し、弥生時代中期における遺跡東端に相当する。第Ⅲ様式前半の土器に伴い、鋤・一木鋤・斧柄や種子が出土している。

古墳時代の木器は A 地区を南北に流れる幅約 22m、深さ約 1 m の自然流水路（河川）から出土した。共伴遺物に弥生時代中期から古墳時代の土師器・須恵器が混在し、周辺からは 1 点ではあるが奈良時代後期の蓮華文軒丸瓦も出土している。さらに、重複する現代の水路による上部の攪乱などもあり、明確な時期決定はし難いが、泥除・槽・杓子・弓・紡織具・建築部材などが出土している。

〔木器番号〕B～F 地区下層河川・D 地区下層東部の落ち込み・G 地区下層の落ち込みなど

（弥生Ⅰ期中段階）；00106, 00113, 00606, 00608, 00805,
00806, 01303, 01309, 01402, 01605,
01709, 02301, 02302, 02502, 02503,
02504, 02804, 02806, 03903, 04703,
05601, 05802, 06101, 06206, 08001,
08710, 09115, 10612, 11116, 12003,
12303, 12605, 12802, 13007, 15402,
15605, 15901, 18616, 18704, 19401,
19520, 19706, 19908

H 地区下層河川（弥生Ⅲ期前半）；00101, 00104, 02901, 04004, 04411,
05805, 07202, 18905

A 地区下層河川（弥生Ⅰ～Ⅲ期）；03004, 03704, 04407

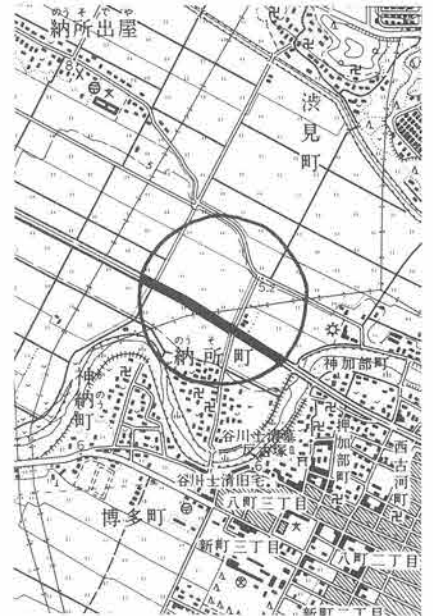


fig. 193 納所遺跡木器出土地点
(1:25,000 津西部)

A地区下層河川（古墳時代以降）；03608, 09708, 12507, 19102, 19103

出土地点不詳；01702, 08002

〔文 献〕伊藤久嗣・吉水康夫『納所遺跡範囲確認調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 27, 三重県教育委員会 1976 年

伊藤久嗣『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県埋蔵文化財調査報告 35-1, 三重県教育委員会 1980 年

伊藤久嗣・他『納所遺跡—その自然環境と自然遺物—』三重県埋蔵文化財調査報告 35-2, 三重県教育委員会 1979 年

B 滋 賀 県

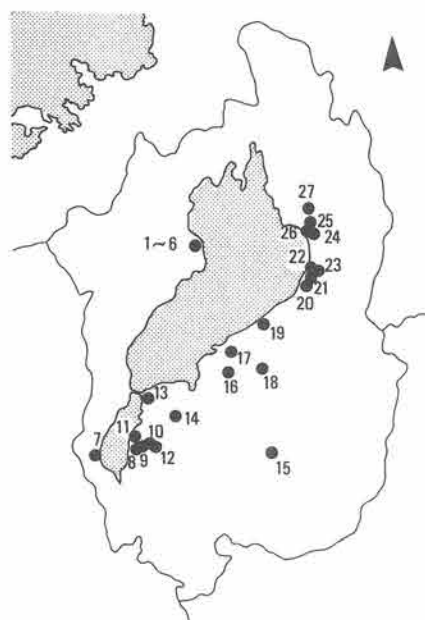


fig. 194 滋賀県の木器出土遺跡

1 森浜遺跡 (fig.195) もりはま

高島郡新旭町森から針江にかけての、通称「森浜」と呼ばれる湖岸から湖中に所在。遺跡は浜堤上に立地し、陸地側はかつて内湖であった。1977 年に新川舟溜り（第 1 次調査）、新川水路（第 2 次調査）、1978 年に新川舟溜り航路（第 3 次調査）の工事に伴って滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。

第 1 次調査では、第 2 層～第 3 層から大量の庄内式・布留式土器が出土し、時期不明の杭を多数検出した。また、この包含層に伴う溝 2-1 からは火鑽臼が出土した。なお、調査後に採集された板づくりの琴は、この包含層より出土したものである。包含層よりも下層で検出された溝 6-1 からは、少量の弥生土器（第 V 様式）と穂摘具や補修した泥除などが出土し、溝からやや離れた地点では、大型の杭や板などが並んで出土した。さらに下層では土器を伴っていないが、沼状の落ち込みの肩部から輪樑付きの田下駄が出土している。

第 2 次調査では遺構は検出されず、包含層中から庄内式・布留式土器、木器が混在した状態で大量に出土した。ただ、土器・木器とも、ある程度のまとまりをもって出土している。また、調査区の中央から、中心に直径 7 cm 程、長さ 3.7m の太い棒を背骨のように用い、直径数 cm 程の細長い棒を格子に組んだ組み物が 3 つ出土した。出土した木器には、直柄横鋏・槽づくりの琴・琴柱・竪杵・盤・火鑽臼・火鑽杵・板や棒などの部材・用途不明品などがある。

第 3 次調査では木器は出土せず、庄内式・布留式土器が包含層中より出土した。

〔木器番号〕第 1 次調査包含層；10102, 15609 第 1 次調査溝 2-1；17213

第 1 次調査溝 6-1；03809, 07824 第 1 次調査沼状落ち込み；07510

第 2 次調査包含層；01601, 03409, 05211, 07107, 07712, 08913,
09304, 09516, 10206, 10408, 13802, 15109,
15612, 15802, 15903, 16411, 16710, 17201,
17203, 17210, 17215, 17216, 18303, 18501,
18513, 19302, 19506

〔文 献〕本田修平「森浜遺跡出土の田下駄について—高島郡新旭町—」『民俗文化』
第 168 号、滋賀民俗学会 1977 年

兼康保明「古代の琴—森浜遺跡出土などの遺品をめぐって—」『月刊文化財』
169 号、文化庁文化財保護部 1977 年

兼康保明・堀内宏司・他『森浜遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1978 年

2 旭遺跡 (fig.195) あさひ

高島郡新旭町旭に所在。安曇川左岸の沖積平野北半を南北に連なって弧状に分布する針江遺跡群の北端に当たり、田井川を北限とし、南に広がっている。遺跡の一部が中世の吉武城跡と重複するため、吉武城遺跡として報告されたこともある。

1981 年・1986 年度に、国道 161 号線バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。1981 年度の調査では、古墳時代の溝や土坑が検出され、包含層中と遺構から庄内式・布留式土器が出土した。木器は、包含層(第Ⅲ層)中と自然流路と考えられる溝(SD01)から木錘・火鑽臼・部材・板などが出土した。1986 年度の調査では、1981 年度調査地の周囲を大規模に発掘し、SD01の延長をはじめ、溝や土坑を検出した。遺構からは 1981 年度と同様、庄内式・布留式の土器が混在して出土する。木器は、溝SD01から曲柄平鍬・穂摘具・田下駄、溝SD04から直柄平鍬、溝SD05から横槌、溝SD09から直柄横鍬、溝SD12から曲柄又鍬などが出土している。

〔木器番号〕溝SD01; 04701, 07416, 09314, 18909

溝SD04; 02205, 04412

溝SD05; 09012 溝SD09; 03601 溝SD12; 04713

包含層(第Ⅲ層); 18514, 20126

〔文 献〕図司高志・山口順子・他「高島郡新旭町針江遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』VI-1, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1979 年

兼康保明・宮崎幹也『針江遺跡群旭遺跡発掘調査概要』国道 161 号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和 56 年度) 1, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1982 年

大崎哲人・森正『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要—吉武城遺跡—』国道 161 号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和 61 年度) 7, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1987 年

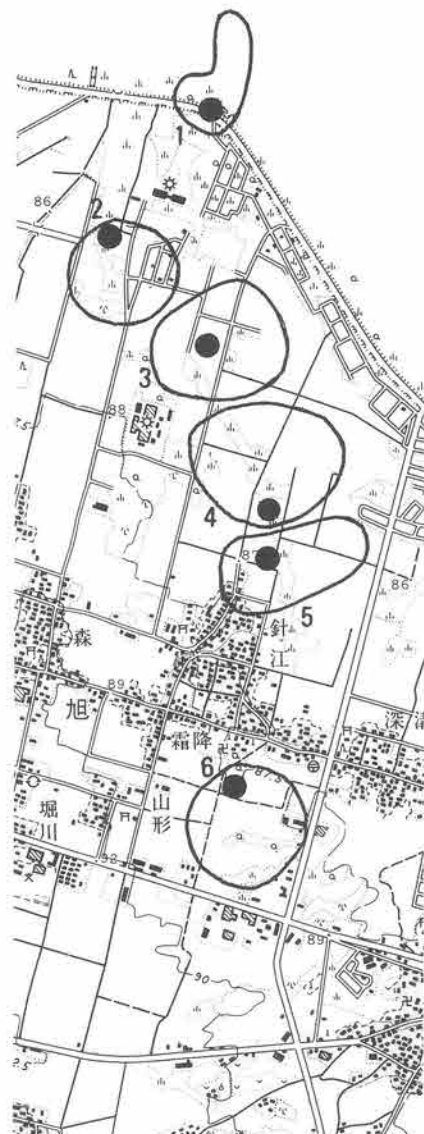


fig. 195 森浜・旭・針江川北・針江北・針江中・正伝寺南遺跡木器出土地点 (1:25,000 今津)

3 針江川北遺跡 (fig.195) はりえかわきた

高島郡新旭町針江に所在。旭遺跡の南東に接し、安曇川左岸の沖積平野の低湿地に立地する。1985 年度に、国道 161 号線バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。調査地の北側(第2区)で古墳時代前～中期の3間×5間の総柱をもつ大型の掘立柱建物1棟と、小型の掘立柱建物4棟、竪穴住居、落ち込み、近接する吉武城に関連すると考えられる安土桃山時代から江戸時代にかけての溝などを検出した。木器は落ち込みSX4の埋土中から、大量の布留式土器とともに出土しており、直柄鍬・田下駄・アカ取り・片口容器・火鑽臼・火鑽杵・櫓などがある。

調査地の南側(第1区)では、弥生時代後期(第V様式)から古墳時代前期(庄内式)の遺物包含層と、掘立柱建物・竪穴住居・柵などを検出しており、その北側には溝を隔てて木棺墓群がある。この木棺墓を覆う包含層からも、蓋や田下駄などの木器が出土している。

〔木器番号〕第1区包含層; 07501, 07505, 14905

第2区落ち込みSX4 ; 01811, 05206, 07417, 10209, 10402, 12709,
17221, 17222

〔文 献〕 清水尚『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要—針江川北遺跡—』国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和60年度），滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会1986年

4 針江北遺跡 (fig.195) はりえきた

高島郡新旭町針江に所在。針江川北遺跡の南に接し、安曇川左岸の沖積平野の低湿地に立地する。1958年，農道工事に関連して排水路を掘削した時に，弥生土器（第Ⅴ様式）と舟形木器などを新旭町教育委員会が採集した。遺物の出土状況は，スクモ層中に土器と僅少の木器がまともっていたという。1982・1984年度の国道161号バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し，弥生時代中期から庄内式期の土器を伴う竪穴住居群，溝などの遺構を検出した。その時の木器は図版に収録していないが，1982年度に検出した溝SD18から穂摘具・火鑽臼・杓子形木器・直柄平鍬の未成品など，1984年度に検出した溝SD1やSD6からも直柄平鍬・アカ取り・部材などが出土している。

〔木器番号〕 16806

〔文 献〕 兼康保明・堀内宏司・他『森浜遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会1978年

兼康保明・尾崎好則・山口順子「針江北遺跡の調査」『新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和57年度）3，滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会1983年
吉谷芳幸・森下直子「針江北遺跡の調査」『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要』国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和59年度）5，滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会1985年

5 針江中遺跡 (fig.195) はりえなか

高島郡新旭町針江に所在。安曇川左岸の沖積平野北半を南北に連なって弧状に分布する針江遺跡群のほぼ中央を占める。国道161号線バイパス工事に伴い，1982年度に滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し，土坑・溝などの遺構を検出した。木器は南調査区（A地区）の土坑SK3の下層から反柄鍬の柄と身が一緒に出土したほか，下層の弥生時代中期（第Ⅳ様式）の土器片を含む層から剣形，土坑SK8から板材などが出土している。

土坑SK3は径1.9m×1.1mの楕円形を呈し，深さ0.4m。土師器甕や底部穿孔の須恵器壺が埋土の上部から出土している。

〔木器番号〕 A地区下層 ; 16008 A地区土坑SK3 ; 05201, 05202

〔文 献〕 兼康保明・尾崎好則・山口順子「針江中遺跡の調査」『新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』国道161号線バイパス関連遺跡発掘調査概要（昭和57年度）3，滋賀県教育委員会・（財）同県文化財保護協会1983年
清水尚・ほか『針江中遺跡・針江南遺跡』一般国道161号（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ，滋賀県教育委員会・（財）同県文化財保護協会1991年

6 正伝寺南遺跡 (fig.195) しょうでんじみなみ

高島郡新旭町深溝に所在する。安曇川左岸の沖積平野北半を南北に連なって弧状に分布する針江遺跡群の南端にあたり、霜降の集落をほぼ北限として南に広がっている。1983・1984年度に、国道161号線バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。北地区では、弥生時代後期(第Ⅴ様式)から古墳時代前期の自然流路など、南地区では、古墳時代中期や飛鳥時代の土坑、平安時代中期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・柵・井戸・溝・土坑などを検出している。木器は北地区の自然流路SD1から庄内式土器などとともに出土しており、鍬・梯子・蓋・盤・部材などがある。

〔木器番号〕 02105, 10306, 14401, 14910, 19211

〔文献〕兼康保明・吉谷芳幸・山口順子「正伝寺南遺跡（北地区）の調査」『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要』国道 161 号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和 58 年度）4，滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1984 年

7 湖西線関係遺跡 (fig.196) こせいせん

大津市に所在。1974・1975年に湖西線関係遺跡発掘調査団が、大津市錦織から穴太までの約3.4kmにわたる範囲で発掘調査を実施し、縄文時代から歴史時代に至る遺構・遺物を明らかにした。3.4kmの路線予定地を南から北へⅠ～Ⅴ区の5調査区にはほぼ等分し、8地点において各種の遺構を検出。縄文時代晩期の木器はⅢC区開析谷の黄褐色砂層・第2ピート層・黄灰色砂層、ⅢD区貝塚地点における貝塚形成以前のピート層から、弥生時代中期の木器（直柄平鍬・泥除）はⅠ区の1号溝から、庄内式併行期の木器はⅢE区灰褐色微砂層から、庄内式～布留式期の木器はⅣB区灰白色粗砂層と暗青灰色泥砂層から、5世紀後半～6世紀の木器はⅢE区開析谷の黒色泥砂層から、6世紀後半の木器はⅡH区の旧河道（黒色ピート層・3黒灰色泥砂など）、ⅢC区の溝（灰白色砂層）、ⅣB区開析谷（黒褐色泥砂・暗灰色粗砂など）、ⅤA区 of 各種溝や1号竪穴住居内から、6世紀後半～7世紀前半の木器はⅤD区東半の6号溝から出土した。

〔木器番号〕 II H区 黒色シート層；01110, 01114, 01115, 07903, 09525,
10519, 10521, 14914, 16211, 16416,
16421

II H区 3 黑灰色泥砂; 16403

ⅢC区溝 灰白色砂; 01116, 03509, 09204, 13303, 19504,
19508

Ⅲ C 区谷 黄褐色砂; 00601, 10901, 10902, 10903, 11004,
11009, 12206

ⅢC区谷 第2ピート層; 12015, 12901, 12902, 19906

ⅢD区貝塚 ピート層; 00804, 10205, 10301, 11005, 11007

III E区 灰褐色微砂; 18412

ⅢE区 黑色泥砂; 02107, 09601, 09602, 09603, 13301,
17501, 18901

IVB区 灰白色粗砂; 00205, 14510, 16903

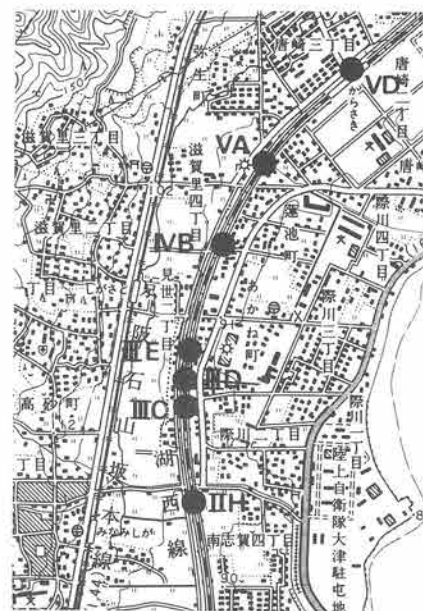


fig. 196 湖西線関係遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都東北部)



fig. 197 支那中遺跡木器出土地点
(1:25,000 草津)



fig. 198 片岡遺跡木器出土地点
(1:25,000 草津)



fig. 199 金ヶ森西遺跡木器出
(1:25,000 草津)

IVB区 暗青灰色泥砂；15205

IVB区 黒褐色泥砂；00305

IVB区 暗灰色粗砂；12011, 14301, 15104, 16210, 18908

IVB区 茶褐色泥砂・褐色粗砂互層；06511, 09001

IVB区 茶褐色泥砂・砂互層；16405, 16406, 16420, 18804, 18811

VA区 13号溝；10518, 20104

VA区 14号溝；09518, 10523, 20129

VA区 19号溝；07913, 10520

VA区 1号住居跡；10522, 15620, 19717

VD区東半 6号溝；12005, 15101, 15702, 16404

〔文 献〕田辺昭三・加藤修・江口千恵子・他『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1973 年

8 志那中遺跡 (fig.197) しななか

草津市志那中町に所在する。1977 年度県営圃場整備事業に伴って滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期・奈良～平安時代の井戸・溝・土坑・掘立柱建築物を多数検出した。木器が出土したのは、いくつかの井戸跡と沼沢地で、弥生中期末の井戸 S E 5 から出土した組合せ平鋤、鎌倉時代の井戸から出土した漆塗花卉文碗や、古墳時代中期の沼沢地から出土した鉢・丸木弓・杭などがある。

〔木器番号〕井戸 S E 5；05507

〔文 献〕大橋信弥・谷口徹「草津市志那中遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』V, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1978 年

9 片岡遺跡 (fig. 198) かたおか

草津市片岡町北島田・上島田・下島田, 下寺町皆出に所在。1975 年度の圃場整備事業に伴い, 下寺観音堂の寺域と弥生遺跡確認のため, 滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。検出した遺構には, 弥生時代後期～古墳時代前期の大溝や白鳳期と思われる溝などがある。アカ取り・容器・板材などの木器は, 弥生時代後期(第V様式)～庄内式の土器とともに, 包含層や溝から出土している。

〔木器番号〕特設 13 トレンチ 東西溝下層；10503

〔文 献〕丸山竜平・石原道洋「草津市片岡遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅲ-2, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1976 年

10 金ヶ森西遺跡 (fig. 199) かねがもりにし

守山市金ヶ森町・三宅町に所在する。野洲川左岸微高地に立地。下水道工事に先立って 1977 年度から三カ年にわたり滋賀県教育委員会が(財)滋賀県文化財保護協会の協力を得て発掘調査を実施した。調査の結果, 古墳時代前期を中心とする溝 73 条・方形周溝墓 2 基・竪穴住居 5 棟・掘立柱建物 6 棟・土坑 25 基などを検出した。各遺構から大量の布留式土器が出土したほか, 大規模な旧河道と見られる S D 34 から直柄平鋤をはじめとする 20 点余の木器が出土

している。

〔木器番号〕河川SD34；01808

〔文 献〕大橋信弥・谷口徹・他『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書—湖西中部流域下水道管理
用道路関連遺跡発掘調査報告書2—』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護
協会 1980 年

11 赤野井湾遺跡 (fig. 200) あかのいわん

守山市赤野井町の琵琶湖赤野井湾内に所在する。湖岸から湖底にかけて、縄文時代早期から平安時代に至る遺構や遺物が出土している。1985・1986年度の天神川水門工事、およびそれに続く湖岸堤建設工事に伴い、滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施。弥生時代後期の溝、古墳時代の溝や水田跡と思われる足跡層、白鳳時代の瓦群などを検出している。図版に収録した木器は、1985年度調査時のもので、弥生時代後期の溝SD2、古墳時代の溝SD3や足跡層・包含層などから出土している。なお、1986年度の発掘調査でも、弥生時代後期の溝から穂摘具・火鑽臼・盾・短甲、古墳時代の溝や包含層から鍬・泥除・鋤・竖杵・横槌・櫛網杵・櫛・容器など、多彩な木器が出土した。

〔木器番号〕 溝SD2；02315, 03802, 07825, 07826, 09806, 11806,
11807, 15005, 16206, 20012

溝SD3下層；18312 溝SD3上層；19409

足跡層(黒褐色粘質土層)；03806, 18315

包含層；02207, 07818, 09015, 09609, 10504, 11514,
16307, 16807, 18714

〔文 献〕濱修・他『赤野井湾遺跡—湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要
報告書—』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1986 年
濱修・他『赤野井湾遺跡—湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要
報告書2—』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1987 年

12 吉身中遺跡 (fig. 201) よしみなか

守山市吉身町に所在する。野洲川左岸微高地に立地し、1982年度に「中高年齢労働者福祉施設」の建設に先立って、守山市教育委員会が発掘調査を実施した。調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居1棟、古墳時代前期から後期の大溝1条および溝10条などを検出。大溝から刀形・横槌・盤などの木器が出土した。大溝には古墳時代前期から後期の遺物が混在しており、木器の所属時期を特定できなかった。

〔木器番号〕09013, 16213

〔文 献〕山崎秀二「吉身中遺跡発掘調査報告書」『守山市文化財調査報告書』第16冊, 守
山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター 1985 年

13 服部遺跡 (fig. 202) はっとり

守山市服部町に所在する。南北二流に分流した野洲川にはさまれた中洲に立地。二分流を一本化する野洲川改修工事に先立って、1974年から5ヵ年にわたり、滋賀県教育委員会・守山市教育委員会が(財)滋賀県文化財保護協会の協力を得て発掘調査を実施した。調査の結果、縄



fig. 200 赤野井湾遺跡木器出土地点
(1:25,000 草津)



fig. 201 吉身中遺跡木器出土地点
(1:25,000 草津)

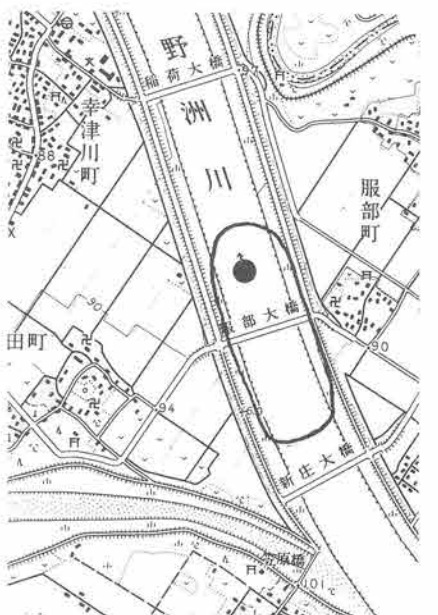


fig. 202 服部遺跡木器出土地点
(1:25,000 堅田)

文時代晩期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にかけての各時代の遺構が、何層にも重複して検出された。木器が出土したのは、弥生時代後期末の洪水で形成された数条の旧河道と、古墳時代中期末から後期初頭に築かれた古墳群の周溝内などである。

旧河道（A・Bなど）からは、古墳時代前期の集落にともなう大量の土器とともに、農工具・容器をはじめとする木器が出土している。旧河道Aは幅60m以上、深さ4m前後の大規模なもので、一部に人為的な掘削や護岸がなされ、敷石・槽・樋・杭などによる導水施設も設けている。旧河道Bも幅50m以上の大規模なものである。

方形墓17基、円形墓9基の26基以上からなる古墳群は、削平されて埋葬施設を残していないが、いずれも径（一辺長）6～20mの小規模古墳である。周溝からは、供献用の土器とともに箱・曲物などの木製容器、あるいは琴・一木平鋤・横樋・刀形・矢形・盾形など、古墳祭祀のための木器が出土している。

〔木器番号〕第1号円形墓；18108

第5号方形墓；06704, 06709, 17010

第9号方形墓；09206, 09207

第12号円形墓；11505, 11506, 18109

第17号方形墓；15615, 15616, 15617, 15618, 15701

第19号方形墓；04609, 06705, 06711, 06804, 17008

第23号円形墓；06801, 06803, 13502, 14202, 16314

第25号方形墓；04712, 06706, 06802, 07204

旧河道；03009, 03404, 03405, 03606, 04002, 04301,
04508, 04604, 04802, 05311, 14402

D地区溝；16009 不詳；12004

不詳（古墳周溝出土）；04710, 18912

〔文献〕大橋信弥・山崎秀二・他『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1979年

谷口徹「服部遺跡出土の線刻ある木製品について」『滋賀文化財だより』No.48,
（財）滋賀県文化財保護協会 1981年

大橋信弥・谷口徹『服部遺跡発掘調査報告書』V, 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1984年



fig. 203 下線子遺跡木器出土地点
(1:25,000 野洲)

14 下線子遺跡 (fig. 203) しもくるす

野洲郡野洲町大字五之里に所在する。野洲川右岸微高地に立地し、標高91.3mをはかる。1976年度県営圃場整備事業に伴って、遺構が掘削される排水路部分と一部切土部分の発掘調査を滋賀県教育委員会と（財）滋賀県文化財保護協会が実施した。調査の結果、弥生時代末から古墳時代前期の竪穴住居6棟・井戸1基・旧河道・土坑など多数の遺構を検出したほか、大量の土器と木器が出土した。出土遺物の大半は、調査区の中央を南から北に流れる旧河道より出土した。旧河道は幅9.5m、深さ55cmをはかる。旧河道中央には自然木と加工木を組合せた堰状の遺構があり、土器や大部分の木器は、ここに堆積していた。木器の大半は用途不明品であるが、竪杵・机・火鑽臼・杭などがある。

〔木器番号〕旧河道；17502, 18009, 18710

〔文 献〕谷口徹・他「野洲町下線子遺跡E・S地区」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』
IV-2, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1977 年

15 堂田遺跡 (fig. 204) どうだ

蒲生郡蒲生町市子沖・市子松井・鈴にまたがる古墳時代を中心とする集落遺跡。付近は日野川中流域にあって、遺跡密度の高い地域である。かつて縄文時代の石器が採集され、1986 年度県営圃場整備事業に伴い、滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が蒲生町教育委員会の協力を得て発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代後期から鎌倉時代前期にいたる時期の遺構や遺物を検出した。遺跡の盛期は古墳時代中期にあり、小河川が縦横に走る中に、小単位の住居群が散在する。これまでに調査された住居群では、布留式土器に須恵器が共伴して出土するものが多く、馬鍬・田下駄・曲物・槽などの木器が出土した旧流路SD1・2・4・5などもこの時期に当たる。

〔木器番号〕旧流路SD1 ; 07301, 07302

旧流路SD2 ; 07304 旧流路SD4 ; 07303

〔文 献〕宮崎幹也・岡本武憲「堂田・市子遺跡(2)―蒲生郡蒲生町市子沖・市子川原所在―」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XVI-5, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1989 年

16 新開遺跡 (fig. 205) しんがい

蒲生郡安土町常楽寺に所在。西の湖を望む湿地帯の微高地に立地する。弥生時代中期(Ⅱ様式)～庄内・布留式期の遺跡である。1983・1984 年度の圃場整備事業に伴って、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会と安土町教育委員会が発掘調査を実施した。検出した遺構には、古墳時代前期の竪穴住居・方形周溝墓・土坑・溝などがある。木器は、1984 年度の調査で、溝SD7内と包含層から出土した。

〔木器番号〕溝SD7 ; 04908 包含層 ; 18907

〔文 献〕葛野泰樹・西家淳朗「蒲生郡安土町新開遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XII-3, 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1985 年

17 大中の湖南遺跡 (fig. 206) だいなかのこみなみ

蒲生郡安土町下豊浦から神崎郡能登川町伊庭にかけての、旧大中の湖の南湖畔にある幅 100 m 前後の低平な小砂洲に立地する。1964 年に大中の湖の干拓によって発見され、1965・1966 年に滋賀県教育委員会が発掘調査を実施した。

遺跡の範囲は幅約 150m, 東西 1,600m にわたり、その範囲内に弥生時代中期(第Ⅱ様式)の住居地域と水田地域が整然と区画されていた。両地域の境には、両側を杭で護岸した巾 7 m の灌漑用の溝がめぐり、溝の中から弥生土器(第Ⅱ様式)や木器が出土した。また、水田の畦畔にも矢板や杭列を用いていた。湖辺の集落にふさわしく、貝塚や丸木舟なども発見されている。出土した木器は、各種の鍬や鋤、木偶、石斧柄、竪杵、網杵、各種の容器とその未成品など多彩である。

〔木器番号〕00301, 01307, 01310, 01507, 01608, 01904, 02309, 02805,
03304, 03305, 03706, 05604, 05901, 05905, 05907, 12702



fig. 204 堂田遺跡木器出土地点
(1:25,000 日野西部)



fig. 205 新開遺跡木器出土地点
(1:25,000 近江八幡)



fig. 206 大中の湖南遺跡木器出土地点
(1:25,000 能登川)

〔文 献〕水野正好『大中の湖南遺跡発掘調査概要』滋賀県文化財調査概要第5集，滋賀県教育委員会 1967 年

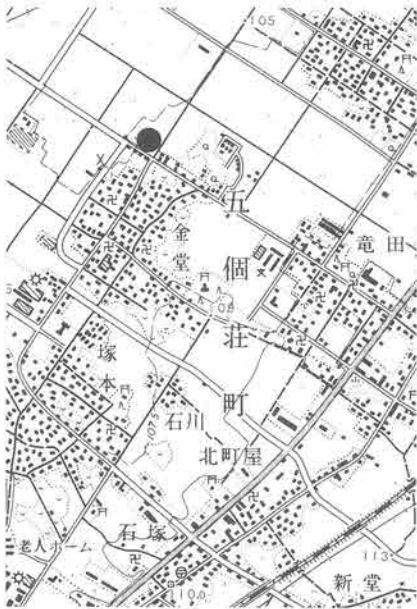


fig. 207 正源寺遺跡木器出土地点
(1:25,000 八日市)

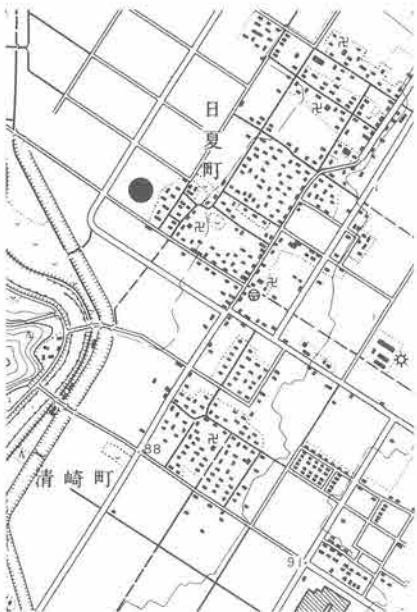


fig. 208 妙楽寺遺跡木器出土地点
(1:25,000 能登川)



fig. 209 松原内湖遺跡木器出土地点
(1:25,000 彦根東部)

18 正源寺遺跡 (fig. 207) しょうげんじ

神崎郡五個荘町大字金堂に所在。琵琶湖の東岸，湖東平野のほぼ中央部を貫流する愛知川の左岸の低位扇状地端部に立地し，標高102m前後をはかる。圃場整備事業に伴って，1982年10月から翌年1月にかけて五個荘町教育委員会が発掘調査を実施した。検出した遺構には，6世紀のものと8世紀のものがある。前者には大量の木器が出土した竪穴住居ST03をはじめとする計6棟の住居跡と，一辺7mの低墳丘の方形墳がある。後者には，2間×2間・2間×3間・3間×4間などの掘立柱建物跡20棟がある。

竪穴住居跡ST03は一辺5.3mの方形を呈し，南辺にカマドを設けている。床面は検出面から60cmと比較的深いが，北半分は一段高くベッド状になっている。出土した木器には，経巻具，布巻具，杵，椅子などの織機と，平鍬・又鍬・木錘などの農具，斧の柄などの工具，盤・槽などの容器類と，建築部材・用途不明品がある。伴出した土器は，6世紀中葉から末葉の須恵器と土師器である。これらの出土状況は，住居床面に散乱したものや住居の埋土内で浮いた状態のものがあり，出土した木器の大半は破損品であることから，廃絶した住居跡を不用品の廃棄土坑として利用した結果と見られる。

〔木器番号〕竪穴住居ST03；00507, 00508, 04707, 05210, 06003, 09427,
09504, 09613, 09614, 10837, 17901, 18720

19 妙楽寺遺跡 (fig. 208) みょうらくじ

彦根市日夏町に所在。湖岸に近い独立丘陵，荒神山の東山麓の低地に立地する。1980年度の圃場整備事業に伴って，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。検出した遺構・遺物は弥生時代後期(V様式)～庄内式期のものと，奈良時代中期～平安時代末期のものに大別でき，自然流路・溝・ピットなどを確認した。木器は，庄内式の土器をとまなう自然流水路(SD3, 8)と小溝(SD9)から出土した。

〔木器番号〕自然流水路SD3；05706, 19722 自然流水路SD8；01418
小溝SD9；16414

〔文 献〕近藤滋・北川浩「妙楽寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-1，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1980 年

20 松原内湖遺跡 (fig. 209) まつばらないこ

彦根市松原町に所在。旧松原内湖の東北岸に広がる遺跡である。滋賀県東北部流域浄化センターの建設に先立ち，1984年以降滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施している。遺跡は縄文時代早期に形成され，江戸時代後期まで断続的に継続するが，なかでも縄文時代後期から奈良時代までの期間は，ほぼ連続して遺物が出土し，出土量も他の時期を凌駕している。遺物量に比べ検出された遺構は極めて少ない。これまでの調査では，縄文時代後期のピットが2群，5基の甕棺墓を含む縄文時代晩期の土坑墓群，弥生時代後期の住居跡数棟と井戸・土坑，古墳時代の旧内湖に流入する河道，奈良時代の掘立柱建物4棟等を検出したにとどまる。木器には縄文時代後期から奈良時代後期までの各時代のものがあるが，これ

らは包含層の層位や出土地点によって区別できる。

〔木器番号〕縄文晩期包含層；15601, 15607

弥生後期包含層；02201 古墳前期包含層；12104

〔文 献〕細川修平「滋賀県松原内湖遺跡出土の篋状木製品」『考古学雑誌』第72巻第4号，
日本考古学会1987年

滋賀県埋蔵文化財センター「黒漆塗り蓋？が出土—彦根市・松原内湖遺跡—」

『滋賀埋文ニュース』第93号，1987年

滋賀県埋蔵文化財センター「彦根市・松原内湖遺跡出土着柄鍬の保存処理」『滋
賀埋文ニュース』第95号，保存処理ニュースNo.31—〔B〕1988年

21 入江内湖遺跡（西野地区）(fig. 210) いりえないこ(にし)

入江内湖は東西2km，南北2.6km，周囲8kmにおよぶ琵琶湖第2の大きさの内湖で，1944～1949年の干拓事業に際し，縄文時代早期から平安時代に至る大複合遺跡であることが判明した。西野地区（入江内湖西野遺跡）は，坂田郡米原町磯西野に所在する。旧矢倉川の形成するデルタ地帯の南側，旧入江内湖の南東岸付近に立地している。1976年度に矢倉川の改修に伴い，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し，古墳時代後期の掘立柱建物数棟のほか，耕作土を除く第1～3層の遺物包含層を確認した。木器は第3層下部の泥炭層から出土している。各包含層のいずれからも布留式の甕を伴う土器類が出土しているが，第I形式4段階以降の須恵器類を出土する上部2層とは異なり，第3層では須恵器類を伴っていない。

〔木器番号〕第3層下部；10602, 10609, 11015, 11115, 11123, 11308,
18623, 18722

〔文 献〕田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県
教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1977年

22 入江内湖遺跡（丸葭地区）(fig. 210) いりえないこ(まるよし)

丸葭地区は，旧入江内湖の北東縁辺部に位置し，坂田郡米原町入江に所在する。1984年度に米原町教育委員会が発掘調査を実施し，旧内湖の汀線もしくは水深の極めて浅かった箇所に堆積したと考えられる遺物包含層を確認した。包含層は耕土直下の褐色腐植土層で，多量の木器を含んでいた。土器類は，極めて少量であるが，須恵器類を含まない布留式並行期のものが出土している。

〔木器番号〕褐色腐植土層；03604, 04804, 09109, 09210, 09303, 09324,
09421, 09611, 10104, 10113, 11507, 13803,
17504, 18007, 18015, 18611, 18717

〔文 献〕中井均『入江内湖遺跡発掘調査報告書—米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査—』
米原町埋蔵文化財調査報告書VI，米原町教育委員会1987年

23 入江内湖遺跡（行司町地区）(fig. 210) いりえないこ(ぎょうじちょう)

坂田郡米原町大字下多良小字行司町に所在する。入江内湖遺跡は旧内湖の全域に広がる縄文時代早期から平安時代に至る大複合遺跡であるが，行司町地区は，内湖の東北縁辺部の低湿地



fig. 210 入江内湖遺跡（西野・丸葭・
行司町地区）木器出土地点
(1:25,000 彦根東部)

に立地する。1985・1986年度に米原町教育委員会が発掘調査を実施し、古墳時代前期の自然流路1条、土坑1基のほか、その上面に堆積する遺物包含層を検出した。層序は第Ⅷ層の暗灰色粘土層を基盤とし、その上の第Ⅵ・Ⅶ層が遺物包含層にあたる。木器は主として第Ⅵ層（腐植土層）から出土し、第Ⅵ層および第Ⅶ層（砂層）からは布留式土器を中心に、縄文土器、弥生土器、庄内式土器などが出土している。木器の年代は布留式土器に並行すると考えられる。木器の総量は2,839点にのぼり、工具・農具・紡織具・運搬具・漁撈具・食事具・容器・祭祀具・楽器・建築部材等の各種におよぶ。

〔木器番号〕第Ⅵ・Ⅶ層；01104, 01105, 01113, 02108, 02204, 02206, 02208, 02414, 03605, 03705, 03808, 03812, 04306, 04806, 05207, 05310, 05902, 05910, 05912, 07003, 07004, 07101, 09709, 09807, 10110, 10404, 10410, 10501, 10502, 10506, 10606, 10810, 11411, 11519, 12108, 12215, 13312, 14508, 15606, 16207, 16305, 17003, 17804, 18203, 18214, 18302, 18307, 18311, 18314, 18316, 18317, 18413, 18507, 19515, 19813, 20107

〔文 献〕中井均・岡田文男・他『入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書—滋賀県立文化産業交流会館建設に伴う発掘調査—』米原町埋蔵文化財調査報告Ⅸ，米原町教育委員会 1988年



fig. 211 鴨田遺跡木器出土地点
(1:25,000 長浜)

24 鴨田遺跡 (fig. 211) かもだ

長浜市大成亥町に所在する弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落遺跡。姉川が形成した扇状地の末端部、湧水の激しい低地に立地する。これまでに、国道8号線長浜バイパス建設工事や県営圃場整備事業などに伴い、滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施している。バイパス建設工事に伴う1971年度の調査では、人工的な溝2条、流路10条・沼沢地・地割り畔・ピットなどが検出され、低湿地状況を示すに過ぎなかったが、その東側における圃場整備事業に伴う調査では方形周溝墓が検出され、少なくとも墓域の存在が明確になっている。木器はバイパス工事に伴う調査時に出土したもの。弥生時代後期から古墳時代後期までの遺物を含む溝3からも若干量が出土しているが、大半は溝A（沼沢地）から出土した。溝Aは調査地を縦断する幅10～20m、深さ1.5mの河道状のもの。上から腐植土層・粘土層・砂層が順次堆積し、木器は最上層の腐植土層から出土している。下層の粘土層と砂層から出土する土器は、弥生時代中期から古墳時代中期を中心とし、古墳時代後期のものを若干含む。

〔木器番号〕T地区溝3；14102

溝A（沼沢地）；04006, 04705, 07705, 09319, 09711, 11002, 11901, 15105, 15111, 16310, 17206, 18305, 18411, 18414, 19206, 19723, 20101

〔文 献〕中谷雅治・田中勝弘・他「鴨田遺跡」『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会 1973年

25 川崎遺跡 (fig. 212) かわさき

長浜市川崎町に所在する弥生時代の集落跡。扇状地性の沖積平野にあって、湧水の激しい低湿地に立地している。1970年度に国道8号線長浜バイパス建設工事に伴う発掘調査を滋賀県教育委員会が実施して以来、小規模な調査が何回も行われている。1970度の調査では、弥生時代前期中段階及び新段階の土器類が木器・石器と共伴し、少量の水神平式土器を伴出する包含層も検出されている。その後の調査では、前期中段階の単純遺物を含む溝を検出し、また、前期古段階に遡る遺物も出土している。木器には、弓・斧柄・梯子・平鍬・無頸壺などがあり、獣骨、粃の炭化物なども出土している。

〔木器番号〕 00901, 01703, 01705, 02601, 03007, 11122, 12306, 12805, 20122

〔文 献〕 鹿野健・松田典夫・他「川崎遺跡・南方東遺跡」『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1971年



fig. 212 川崎遺跡木器出土地点
(1:25,000 長浜)

26 高田遺跡 (fig. 213) たかだ

長浜市高田町に所在。長浜市街の中心地であるが、琵琶湖岸から僅か1kmの低湿地に立地する。1978年度に長浜市教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が実施した発掘調査では、河川あるいは氾濫による堆積を示す砂・礫・粘土・粘質土・腐植土の互層のなかに12層におよぶ遺物包含層を検出した。各包含層には各時期の遺物が混在するが、弥生時代後期・庄内式並行期・布留式並行期・8世紀前半頃の4時期に大別できる。木器は布留式並行期と考えられる第8層から出土。脚付の盤や丸木舟・梯子などが出土しているが、いずれも鋭い刃物の傷が残っており、人為的に廃棄されたものと考えられる。

〔木器番号〕 第8層 ; 18803

〔文 献〕 宮成良佐・他『高田遺跡(長浜電報電話局敷地内所在)調査報告書』長浜市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1980年



fig. 213 高田遺跡木器出土地点
(1:25,000 長浜)

27 国友遺跡 (fig. 214) くにとも

長浜市国友町に所在。姉川左岸に形成された沖積地に立地する。1975年度に北陸自動車道建設工事に伴い、滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施。姉川の旧河道と思われる自然流路M Iのほか、数条の溝を検出した。自然流路M Iは幅6.0~18.4m、深さ1.5mで、内部の堆積土は、上から砂層・腐植土層・砂礫層の3層に大別できる。土器類をはじめとする遺物は各層から出土しているが、木器は主に腐植土層から出土した。共伴した土器には、第I形式4段階から第II形式1段階までの須恵器がある。木器には、鋤・鍬・田下駄・弓・網杵・火鑽臼・横槌・木錘・容器・梯子・縦櫛・紡織具等がある。

〔木器番号〕 自然流路M I ; 00408, 01103, 05301, 05308, 05911, 07001, 07706, 07707, 08522, 08808, 09211, 09412, 09413, 09503, 09505, 10706, 10709, 10710, 10806, 10838, 11006, 11008, 11114, 11120, 11508, 11518, 15007, 16209, 16312, 16418, 18004, 18010, 18107, 18304, 18402, 18810,

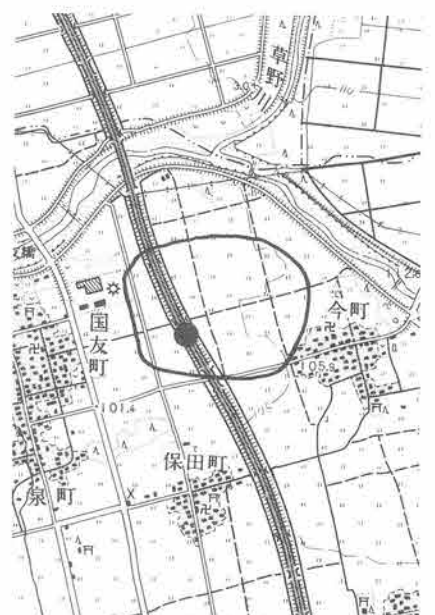


fig. 214 国友遺跡木器出土地点
(1:25,000 長浜)

19307

〔文 献〕 田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書X—長浜市国友遺跡—』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1988 年

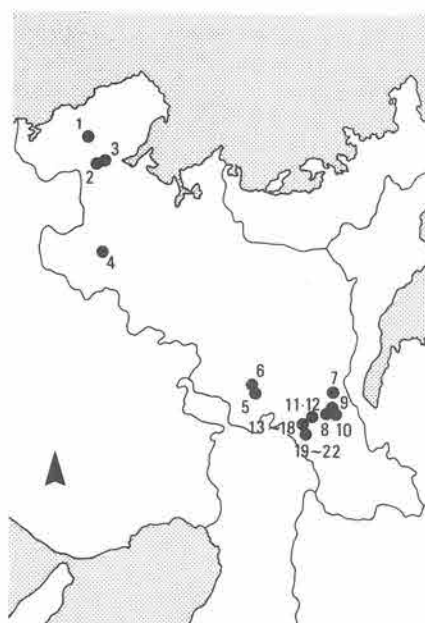


fig. 215 京都府の木器出土遺跡



fig. 216 古殿遺跡木器出土地点
(1:25,000 峰山)

C 京 都 府

1 古殿遺跡 (fig. 216) ふるどの

中郡峰山町字古殿にある京都府立峰山高等学校敷地に所在する。1977 年 4～5 月 (第 1 次調査) に京都府教育委員会が、1982 年 7～10 月 (第 2 次調査)、1986 年 8～12 月 (第 3 次調査)、および 1989 年 8～12 月 (第 4 次調査) に(財)京都府立埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。丘陵の先端部に立地する集落遺跡で、3 世紀 (弥生時代後期)～5 世紀初頭・12～13 世紀の 2 時期の遺構が重複している。3 世紀～5 世紀初頭の遺構には、竪穴住居・井戸・溝・木樋・河川・土坑などがあるが、集落構造などは不明である。

図版に収録した 3 世紀～5 世紀初頭の木器は、上記各種の遺構や包含層から出土した。4 回の調査をあわせた総数は二千数百点に達し、工具・農具・紡織具・武器・食事具・容器・祭祀具・腰掛・机・箱・火鑽臼・火鑽杵・建築部材など各種におよぶ。5 世紀初頭のは 2 次的に火を受け、表面が焼けこげているものが多く、集落廃絶の原因をうかがわせる。多量の弥生土器 (第 V 様式) と庄内・布留式の土器、扁平片刃石斧、敲石、磨石、石鑿、砥石、碧玉管玉、碧玉・水晶・石英・瑪瑙の原石や剥片、土製品などが共伴した。

〔木器番号〕 第 1 次調査溝 S D02 ; 09519, 19314

第 1 次調査井戸 S E03 ; 15201, 19408

第 1 次調査溝 S D04 ; 14305

第 1 次調査包含層 (Ⅱ層) ; 04106, 07907, 09508, 13308, 16014, 16712, 17209, 17220, 18510, 18511, 19522, 20106

第 2 次調査河 S D02 ; 06407, 07904, 09424, 09617, 10512, 11309, 11527, 12212, 12216, 13602, 15102, 17402, 17404, 17603, 17708, 18101, 18502, 19303, 20016

第 2 次調査河 S D11 ; 08810, 09710, 12214, 13901, 18603, 19517

第 2 次調査 包含層 ; 09510, 10517, 11213, 12211, 12217, 12218, 18405, 18613, 18620, 18624

第 3 次調査木器溜 S X301 ; 17101, 18403

第 3 次調査河 S D302・303 ; 17114, 17801

第 3 次調査 包含層 ; 00316, 00319, 16702, 17805, 18102, 18801

〔文 献〕 平良泰久「古殿遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1978』京都府教育委員会 1978 年

戸原和人・藤原敏晃「古殿遺跡出土の注口土器・案」『京都府埋蔵文化財情報』第 6 号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982 年

鍋田勇「峰山町古殿遺跡の第 3 次調査」『京都府埋蔵文化財情報』第 23 号, (財)

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年

鍋田勇『古殿遺跡出土の梯子状組合せ木製品』『京都府埋蔵文化財情報』第 23 号,
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年

鍋田勇・戸原和人・他『古殿遺跡』京都府遺跡調査報告書第 9 冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 年

岩松保「古殿遺跡第 4 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 37 冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990 年

2 正垣遺跡 (fig. 217) しょうがき

中郡大宮町字奥大野小字正垣ほかに所在する。1985 年・1986 年に(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが、府営圃場整備事業に伴い発掘調査を実施した。谷間に開けた小台地上に立地する。2 次にわたる調査の結果、弥生時代後期の竪穴式住居 1 基と河川、古墳時代後期の円墳 1 基, 方形竪穴式住居 7 基, 奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物 20 棟・柵・井戸・土坑などを検出した。出土遺物に施釉陶器や墨書土器・転用硯・石帯(巡方)があることから、奈良時代以降の集落遺跡は地方官衙的な性格を持つと考えられる。

収録した木器は、弥生時代後期(弥生 V 期)の土器を含む河 S D05 から出土した。幅 5 m, 深さ 60 cm をはかり、集落を画する溝の可能性もあるが、検出部分が長さ 3 m と限られているため明確ではない。伴出遺物には土器類のほかにガラス小玉などがある。

〔木器番号〕河 S D05 ; 12210, 15610, 16808, 18915

〔文 献〕竹原一彦「府営圃場整備関係遺跡昭和 60・61 年度発掘調査概要(1) 正垣遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 22 冊, (財)京都府埋蔵文化財研究センター 1987 年
竹原一彦「京都府正垣遺跡出土の弥生時代木製琴」『考古学雑誌』第 72 巻第 4 号, 日本考古学会 1987 年

3 谷内遺跡 (fig. 218) たにうち

中郡大宮町字谷内小字古苗代田に所在する。1986・1987 年に、府営圃場整備に伴い京都府教育委員会および(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。谷平野の奥にある小扇状地に立地する集落遺跡で、4 次にわたる調査によって縄文時代早期の押型文土器をはじめ、弥生時代後期末から古墳時代中期にかけての多量の土器を含む自然流路・竪穴住居群、奈良・平安時代の遺構・遺物などを検出した。

木製穂摘具は、第 1 次調査で確認した自然流路 NR01 から出土した。流路は幅約 1.5 m・深さ約 0.5 m をはかる。層位は 5 層に大別でき、穂摘具等の木器や多量の土器、稲粃等の植物遺体を含む黒褐色粘質土層はその下位にあたる。共伴する土器には、口縁端部に疑凹線を施す壺・甕類があり、丹後における土器編年から畿内の庄内式に並行する時期が比定できる。

〔木器番号〕自然流路 NR01 ; 07819

〔文 献〕藤原敏晃「谷内遺跡出土の木製穂摘具について」『京都府埋蔵文化財情報』第 22 号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986 年
藤原敏晃「府営圃場整備関係遺跡昭和 60・61 年度発掘調査概要(2) 谷内遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 22 冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年

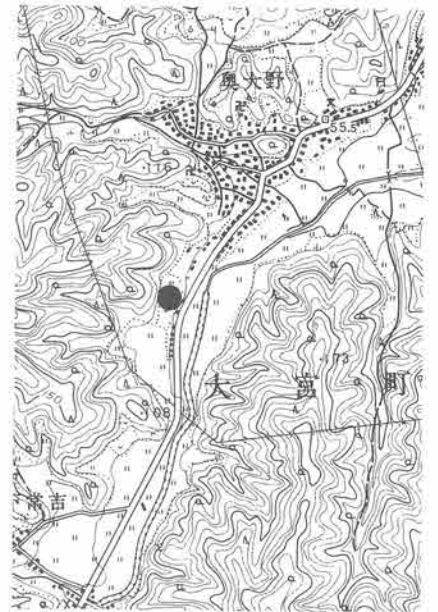


fig. 217 正垣遺跡木器出土地点
(1:25,000 四辻)

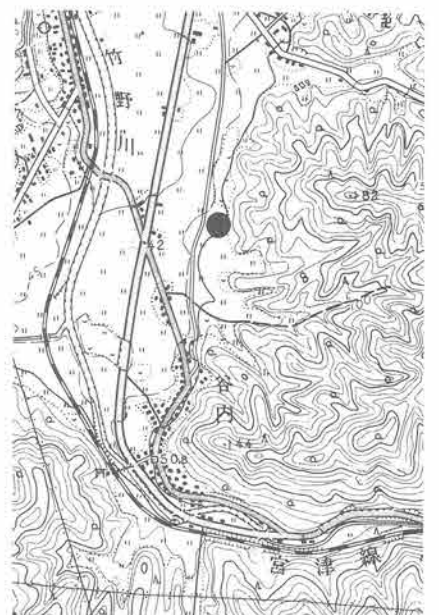


fig. 218 谷内遺跡木器出土地点
(1:25,000 四辻)



fig. 219 石本遺跡木器出土地点
(1:25,000 三岳山)

奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和61年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1987』, 京都府教育委員会 1987 年

奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和62年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1988』, 京都府教育委員会 1988 年

細川康晴「谷内遺跡第4次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第28冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 年

4 石本遺跡 (fig. 219) いしもと

福知山市牧字岩田・段に所在。福知山盆地を形成する由良川中流域の自然堤防状微高地に立地する。1984年の宮福線鉄道建設に伴って(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓・土坑群, 同後期末頃の円形竪穴住居, 古墳時代後期の大溝および方形竪穴住居16基・掘立柱建物・柵・溝などを検出した。

木器は, 6世紀後半を中心に存続した古墳時代集落の西縁をめぐる幅約3m, 深さ約1mの大溝(溝2)から出土した。溝は, 延長約40m分を確認し, 大量の須恵器・土師器のほか, 鉄器, 土製品, 石製品, 骨角製品, 馬歯・牛骨等を含む動植物遺存体など多種の遺物にともない, 総数約180点の木器が出土している。溝内には小規模な堰を設け, 集落がわの溝肩には, 土塁があったと思われる。出土した須恵器から, この溝は7世紀初頭頃に埋没したと考えられる。

〔木器番号〕A地区溝2 ; 00320, 00415, 04509, 05203, 05204, 07908, 07912, 08909, 09221, 09417, 09418, 09419, 09420, 09428, 09429, 09430, 09431, 11016, 11017, 11804, 11902, 11904, 11905, 12013, 12201, 14915, 15011, 16214, 16506, 16507, 16508, 16509, 16510, 16511, 16708, 16711, 16809, 17218, 18702, 20017, 20020

〔文献〕辻本和美「福知山市石本遺跡の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第14号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 年

竹原一彦「石本遺跡出土の木製遺物」『京都府埋蔵文化財情報』第14号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 年

辻本和美「宮福線関係遺跡昭和59年度発掘調査概要(1)石本遺跡」『京都府遺跡調査概報』第13冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985 年

辻本和美・竹原一彦・小橋拓司『石本遺跡』京都府遺跡調査報告書第8冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年

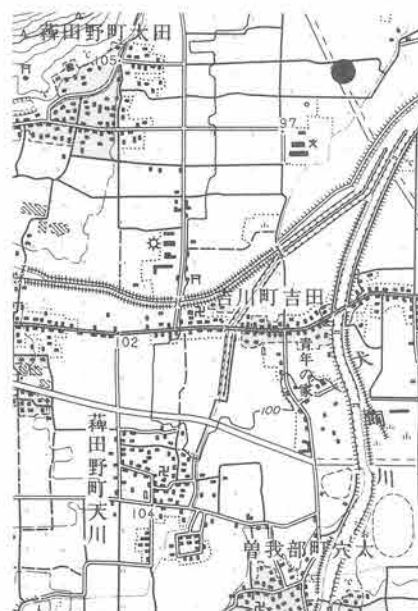


fig. 220 太田遺跡木器出土地点
(1:25,000 亀岡)

5 太田遺跡 (fig. 220) おおた

亀岡市葎田野町太田に所在する。大堰川右岸にある標高100m前後の扇状地上に立地する縄文時代後期から古墳時代にかけての複合集落遺跡。1982年に国道9号バイパス建設に伴い(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し、弥生時代前期末(弥生Ⅰ期)から中期初頭(弥生Ⅱ期)にかけて形成された50基前後の土坑(墓)群および溝・ピット群などを検出した。木器が出土した溝S D0207・S D0208は, 土坑群を取り囲んで弧状にほぼ並行して走り, 途中で3条になる。溝の規模は, S D0207が幅5~8m, 深さ約1m, S D0208は幅約

3 m, 深さ 0.5m で、各々延長約 40m 分を確認した。埋土の状態からみて、両溝とも中期初頭には埋没したものと想定される。出土した木質遺物は約 3,000 点を数えるが、製品と確認できるものは約 50 点程である。そのなかには籠状の編物断片があり、また、土坑から縦櫛が 1 点出土している。

〔木器番号〕溝 S D0207 ; 03008 溝 S D0208 ; 01106, 01410, 18903

〔文 献〕村尾政人「太田遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 7 冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983 年

水谷寿克・村尾政人・田代弘・伊辻忠治『太田遺跡』京都府遺跡調査報告書第 6 冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986 年

6 北金岐遺跡 (fig. 221) きたかなげ

亀岡市大井町字北金岐に所在する。1982～1984 年にかけて、国道 9 号バイパス建設に伴い (財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。亀岡盆地の西側にある緩やかな山麓に立地する複合集落遺跡で、検出遺構は 4 時期に大別できる。第 1 期は弥生時代後期～古墳時代前期の大溝および竪穴住居群、第 2 期は古墳時代後期の竪穴住居、第 3 期は溝で区画した奈良時代中期～平安時代の掘立柱建物群、第 4 期は平安時代後期～室町時代の掘立柱建物群で大型建物を含む。

木器は第 1 期の大溝 (B 地点 S D01) から出土した。溝は上面幅約 6～9 m, 深さ約 1.5～2 m をはかり、約 55m 分を確認。溝内に 3 枚の板材を杭・栗石・粘土で固定した堰を構築しており、田舟などはその周辺で出土した。共伴する大量の土器は弥生時代後期後半に属するが、堰近辺の埋土には一部布留式甕を含み、堰の構築時期も後者の土器群に対応すると考えている。

〔木器番号〕B 地点大溝 S D01 ; 10001, 10303

〔文 献〕石井清司・森下衛「北金岐遺跡 B 地点検出の大溝について」『京都埋蔵文化財情報』第 11 号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 年

石井清司・田代弘・中坪央暁『北金岐遺跡』京都府遺跡調査報告書第 5 冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985 年

7 岡崎遺跡 (fig. 222) おかざき

京都市左京区岡崎最勝寺町・成勝寺町・法勝寺町・円勝寺町・徳成町に所在する。1960 年・1961 年・1970 年・1971 年に奈良国立文化財研究所および円勝寺発掘調査団が発掘調査を実施し、1977 年・1978 年・1981 年以降は (財)京都市埋蔵文化財研究所が調査を継続している。白川が形成した緩扇状地上に立地する。白河街区遺跡の下層にあって、弥生時代前期から古墳時代後期に至るまで継続する遺跡である。これまで検出した遺構には、方形周溝墓・掘立柱建物・自然流路 (河川) などがある。

収録した木器は、1981 年の調査で検出した河川から出土した。河川は緩やかに彎曲して北東から南西に流れ、幅約 20m, 深さ約 2 m をはかる。屈曲部の北西岸をしがらみで護岸している。4 世紀前半～5 世紀中葉の多量の土師器、微量の須恵器とともに直柄鋤・曲柄鋤・泥除・臼・木錘・火鑽臼・四脚槽・机脚・梯子・柱材・用途不明品などの木器が出土した。

〔木器番号〕流路 ; 01812, 03805, 04005, 04502, 05002, 08405, 09411, 13705, 17113, 17204, 18025, 18604, 19406, 20002

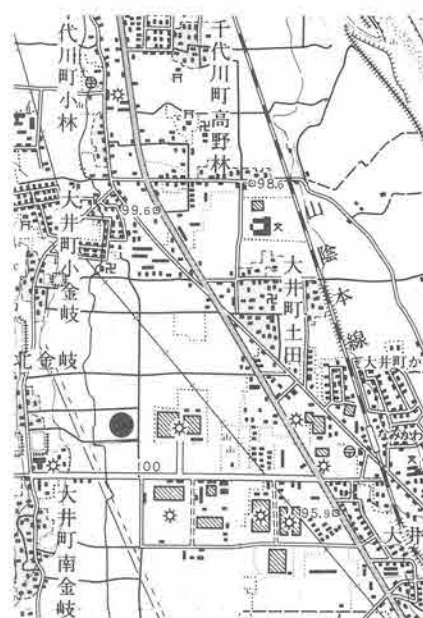


fig. 221 北金岐遺跡木器出土地点
(1:25,000 亀岡)

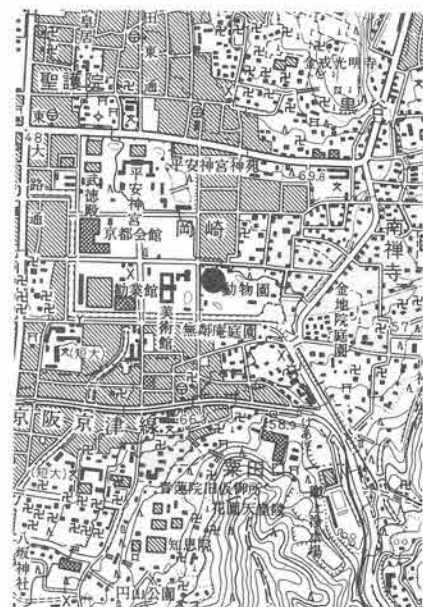


fig. 222 岡崎遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都東北部)

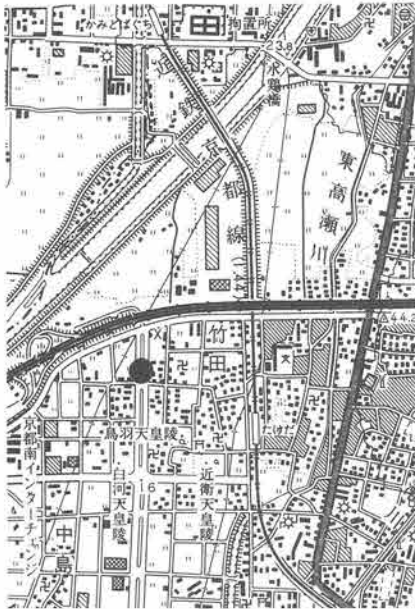


fig. 223 鳥羽遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都東南部)

- 〔文 献〕 杉山信三・他「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮・伝飛鳥板蓋宮跡』奈良国立文化財研究所学報第10冊 1961年
円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（上）」『仏教芸術』第82号, 1971年
京都市『史料 京都の歴史』第2巻, 考古, 1983年
鈴木廣司・平方幸雄「法勝寺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年
（財）京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選（二）』1986年

8 鳥羽遺跡 (fig. 223) とば

京都市伏見区竹田小屋ノ内町・内畑町・真幡木町・浄菩提院町・田中殿町・中島宮ノ後町・秋ノ山町・宮ノ前町・御所ノ内町に所在する。1963年に、京都府教育委員会が行なった鳥羽離宮南殿跡の発掘調査で下層遺構の存在が推定され、1978年以降は（財）京都市埋蔵文化財研究所が調査を継続している。旧鴨川右岸に形成された沖積地の微高地上に立地する。鳥羽離宮跡の下層にあって、縄文時代晩期から奈良時代まで継続する遺跡である。これまでに検出した遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・古墳・土坑墓・木棺墓・土坑・溝・河川など多岐にわたる。

収録した木器は、1981年の調査（鳥羽離宮跡第71次調査）で検出した弥生時代中期の溝S D3005から出土した。溝は北東から南西に斜行し、断面形はU字形を呈する。幅1.5～2.5m、深さ0.8～1.5mをはかる。弥生時代中期の壺・甕・鉢・高杯など多量の土器類、土錘、石斧などの石器と共に、直柄又鍬・鍬膝柄・杵・容器・弓・用途不明品などの木器が出土した。

〔木器番号〕 溝S D3005 ; 05302

〔文 献〕 京都市『史料 京都の歴史』第2巻, 考古, 1983年

木下保明・本弥八郎・長宗繁一「第71次調査」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年

（財）京都市埋蔵文化財研究所『増補改編 鳥羽離宮跡 1984』1984年

9 深草遺跡 (fig. 224) ふかくさ

京都市伏見区深草西浦町ほかに所在。1955年4月に古代学研究会、1960年に明治大学、1964年に竜谷大学、1966年に京都府教育委員会が発掘調査を実施し、1977年以降、周辺の下水道管理設工事などに伴って（財）京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査・立会調査を継続している。北東から南西にゆるやかに傾斜する標高25m前後の平地に立地する。弥生時代を中心とし、縄文時代から古墳時代に至る集落遺跡で、旧流路、竪穴住居などが判明している。木器の多くは旧流路から出土した。この流路は幅約5m、深さ約1m前後の蛇行する溝で、畿内第Ⅱ様式の弥生土器を中心とし、上層に少量の畿内第Ⅴ様式の弥生土器を包含する。

木器には鍬・鋤・又鍬・泥除・杵・高杯・椀・盤・槽・杓子・弓・紡織具などがある。特に農具未成品の多いことが注目される。収録した木器は、1966年に京都府教育委員会が調査した旧流路からの出土品である。

〔木器番号〕 旧流路 : 02906, 03707, 12704, 14501

〔文 献〕 杉原荘介・大塚初重「京都府深草遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1960・1961年

網干善教「深草弥生式遺跡の調査」『龍谷史壇』第54号, 龍谷大学史学会 1965

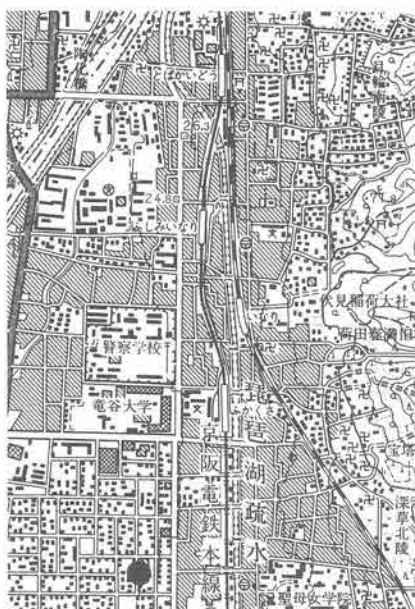


fig. 224 深草遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都東南部)

年

網干善教「深草遺跡木製鋤の一例について」『龍谷史壇』第55号，龍谷大学史学会 1965 年

京都大学考古学研究会「深草弥生遺跡調査概報」『第17トレンチ』1966 年

堤圭三郎「深草遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1967』京都府教育委員会 1967 年

宇佐晋一・小川敏夫・星野献二「深草遺跡」『古代学研究』39，古代学研究会 1964 年

10 深草坊町遺跡 (fig. 225) ふかくさぼうちょう

京都市伏見区深草瓦町に所在。1985 年 5 月～6 月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施。東山連峰の南端にあたる稲荷山の南西裾にあり，深草遺跡の東側，仁明陵の西側に位置する。縄文時代晩期末の低地堆積土，飛鳥時代の川跡，奈良時代の包含層，平安時代の初期の土器埋納土坑などを検出している。

収録した木器は，飛鳥時代の川（溝 58）から出土した。幅 2 m，深さ 1 m で，南東から北西に向けて流れる。7 世紀初頭の土師器・須恵器とともに，把手付槽・曲物・剝物桶・斎串・把手・焼けた建築部材・植物遺体などが出土した。植物遺体には人里植物が多く，すぐ近くに居住地があったことが想定できる。なお，縄文時代晩期末の堆積土から，自生しないマメ類が出土した。

〔木器番号〕川跡（溝 58）；14004, 15110, 15204, 16407, 16408, 17305

〔文 献〕梅川光隆「深草坊町遺跡」『昭和 60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 年

11 羽束師遺跡 (fig. 226) はづかし

京都市伏見区羽束師菱川町・志水町・古川町に所在する。1976 年・1979 年以降，(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を継続している。桂川右岸に形成された沖積平野の微高地上に立地する。長岡京跡の下層に存在する遺跡で，弥生時代中期～古墳時代後期の竪穴住居・溝・土坑・古道・水田などを検出している。

収録した木器は，1981 年の調査で検出した弥生時代後期の溝（J 区溝）から出土した。溝は，同時期の集落内を貫流するとみられ，断面形は V 字形を呈し，幅約 1 m，深さ 0.7～0.8 m をはかる。畿内第 V 様式併行の壺・甕などの土器類と共に，直柄平鋤・一木鋤・掘り棒などの木器が出土した。

〔木器番号〕J 区溝；02007, 07109

〔文 献〕鈴木久男・磯部勝・辻純一・吉崎伸「左京四条二坊・四坊」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983 年

12 中久世遺跡 (fig. 227) なかくぜ

京都市南区久世町・殿城町に所在。1971 年に平安博物館が調査して以来，百数件の発掘・試掘・立会調査を実施している。桂川右岸の自然堤防上に立地し，縄文時代から室町時代までの遺跡が重複している。縄文時代の流路，弥生時代の竪穴住居・土坑・方形周溝墓・溝・流路，

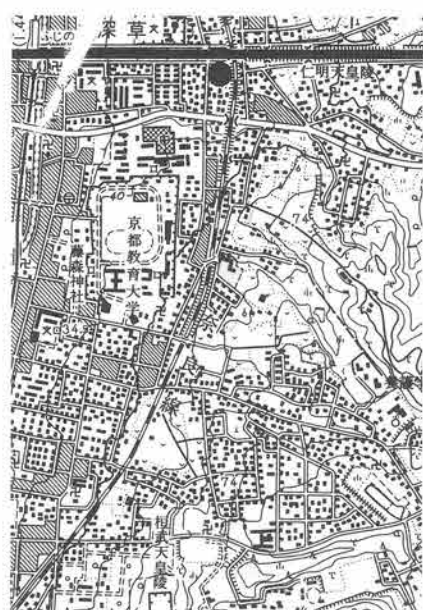


fig. 225 深草坊町遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都東南部)

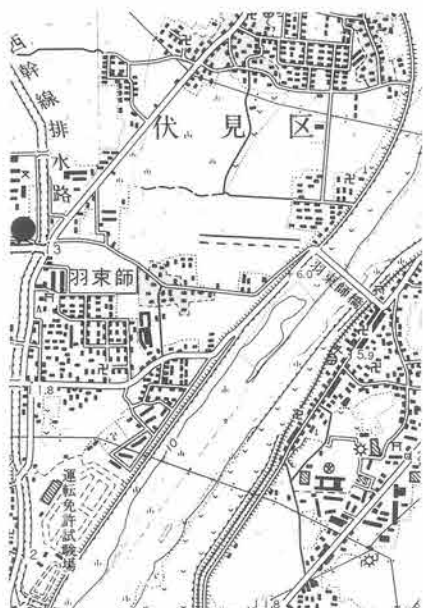


fig. 226 羽束師遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都西南部)

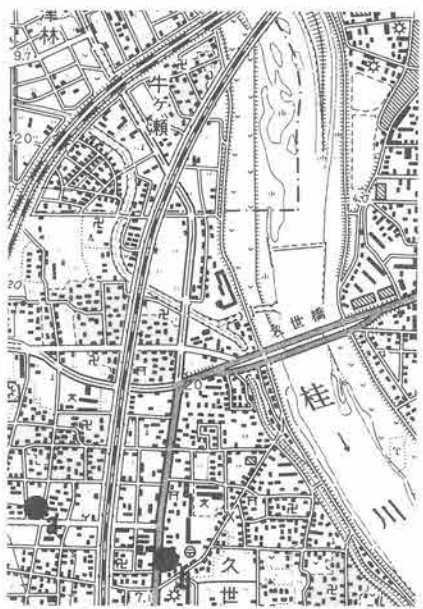


fig. 227 中久世遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都西南部)

第Ⅲ章 遺跡解説

古墳時代の土坑・溝・流路・ピット，奈良時代～平安時代の掘立柱建物・土坑・井戸・溝・流路，鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物・柱穴・土坑・井戸・溝などを検出している。

なお，今回収録した木器は，1977～1978年・1986年に発掘調査で出土したものを取りあげた。

a 中久世遺跡 (86MK-AA)

京都市南区久世中久世町に所在。1986年10月～11月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査。弥生時代中期～古墳時代初頭の溝，古墳時代後期の溝・土坑・ピットなどを検出している。中久世遺跡の北西端に位置している。

収録した木器は，弥生時代中期～古墳時代初頭の溝から出土した。この溝は上・下に大別でき，下層を溝SD1-A，上層を溝SD1-Bとした。溝SD1-Aは幅6.6m以上，深さ0.6～1m。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器とともに，泥除などの木器が出土した。溝SD1-Bは幅6.6m，深さ0.8m。この中層から畿内第Ⅴ様式の弥生土器とともに，曲柄又鋤身などの木器が出土した。

〔木器番号〕 溝SD1-A ; 04008 溝SD1-B ; 04812

〔文献〕 上村和直『中久世遺跡発掘調査概要』昭和61年度，京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所1987年

b 中久世遺跡 (77MK-NK)

京都市南区中久世殿城町に所在。1977年10月～1978年1月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査。縄文時代晩期末の流路，弥生時代の土坑・土坑墓・溝・流路，平安時代の溝，中世の水田などを検出している。

収録した木器は，弥生時代の土坑SK1，溝SD8，流路SD3・6・7から出土した。土坑SK1は長軸4.3m，短軸3.2m，深さ0.9mの楕円形を呈している。畿内第Ⅱ～第Ⅳ様式の弥生土器とともに，泥除の未成品・用途不明の木器・建築部材と思われる木器などが出土している。溝SD8は幅1.5m，深さ0.8m。この溝は北東から南西方向へ延びており，北端で土坑SK1や平安時代の溝で切られている。畿内第Ⅱ～第Ⅳ様式の弥生土器とともに，直柄又鋤・直柄平鋤身の未成品・簀などが出土している。流路は幅8m以上，深さ1.4m。北西から南東方向に延びる流路で，堆積土の状況から流路SD3・6・7と分けた。畿内第Ⅱ～第Ⅳ様式の弥生土器とともに，直柄又鋤身・泥除の未成品・曲柄平鋤身・曲柄又鋤身・組合せ又鋤身・櫓・網杵・盾・横杓子・盤・蓋・剣形・横槌形・部材・用途不明などの木器が出土した。

〔木器番号〕 溝SD-8 ; 02403, 03201, 03202, 12024

土坑SK-1 ; 04003, 04202, 19411, 19412, 19413, 19414

流路SD-3 ; 05808, 10702, 16415, 20118, 20120, 20125

流路SD-6 ; 04311, 04402, 10108, 10305

流路SD-7 ; 02313, 03904, 11526, 12506, 13804, 14909,
16212, 18602, 18902

〔文献〕 京都市『史料 京都の歴史』第2巻，考古，1983年

(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』(二)1986年

13 鶏冠井遺跡 (fig. 228) かいで

向日市鶏冠井町七反田・石橋一帯に所在。桂川の氾濫原上に立地する。1962年に東海道新幹線の建設に伴う調査で発見された。1981年12月～1982年4月に向日市教育委員会が長岡京跡左京第82次調査を実施して以降、向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが、長岡京跡左京域調査の一環として発掘調査を継続している。検出した遺構には、縄文時代晩期の窪地状の落ち込み、弥生時代前期中段階～中期の河跡、中期の竪穴住居・堰状遺構・土坑・道路状遺構・溝、長岡京期の掘立柱建物・柵列・井戸・溝・土坑、中世の畦畔・土坑などがある。

収録した木器は弥生時代前期中段階～中期の河S D 8214, S D 8221から出土した。河S D 8214は幅5.5～12m, 深さ0.6～1.1mで、流路は北から南東に向かう。堆積土は上・中・下の3層に大別でき、下層・中層は弥生I期中段階～II期, 上層は弥生III期～IV期の土器が出土している。縄文晩期の土器, 弥生I期中段階～IV期の土器・石器・銅鐸鑄型とともに斧柄・鍬・鋤・田下駄・横槌・高杯・椀・櫛・簀・用途不明品などの木器が出土している。河S D 8221は幅15m, 深さ0.8m。流路の方向は西から南東で、河S D 8214に合流する。縄文晩期の土器・弥生II期の土器・石器とともに網杵・簀・用途不明品などの木器が出土している。

〔木器番号〕河S D 8214上層; 07410, 10807, 10816

河S D 8214中層; 10106, 10814, 13220

河S D 8214下層; 00801, 04408, 09209, 19410

河S D 8221; 10703, 10815

〔文 献〕長谷川浩一・國下多美樹・松崎俊郎・他「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概報」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集, 向日市教育委員会1983年

14 鴨田遺跡 (fig. 228) かもんでん

向日市上植野町鴨田・十ヶ坪一帯に所在。小畑川が形成した緩扇状地に立地する。1979年2月に向日市教育委員会が実施した長岡京跡左京第24次調査で新たに発見され、以後、長岡京跡左京域調査の一環として発掘調査を継続している。検出した遺構には、弥生時代末～古墳時代前期の土器溜り, 古墳時代前期の方墳, 古墳時代中期～後期の自然流路・竪穴住居, 長岡京期の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などがある。

収録した木器は左京第30次調査地の包含層, 自然流路S D 3003, 左京第106次調査地の大溝S D 10670から出土した。5世紀後半～6世紀後半の自然流路S D 3003は、幅9.5m, 深さ0.8m前後をはかる。流路の方向は北から南である。最下層に多量の杭を打ち込んでいるが、西半部しか検出していないので、性格は不明である。古墳時代前期の土器, 5世紀後半～6世紀後半の土器とともに直柄鍬身・鋤柄・曲柄鍬・田下駄縦杵・横槌・木錘・盤・琴柱?・刀形・火鑽臼・箱・縦櫛・部材・杭・用途不明品などの木器が出土している。包含層からは斧柄・曲柄鍬・櫛・槽・部材・用途不明品などの木器が出土している。

5世紀後半～6世紀後半の大溝S D 10670は幅13m, 深さ1.5mをはかる。堆積土は5層に大別でき、下層の第4・5層は須恵器を含まない。弥生末～古墳時代前期の土器, 5世紀後半～6世紀後半の土器と共に曲柄鍬・横槌・糸巻・下駄・刀子形・刀形・箱側板・盤・斧柄・部

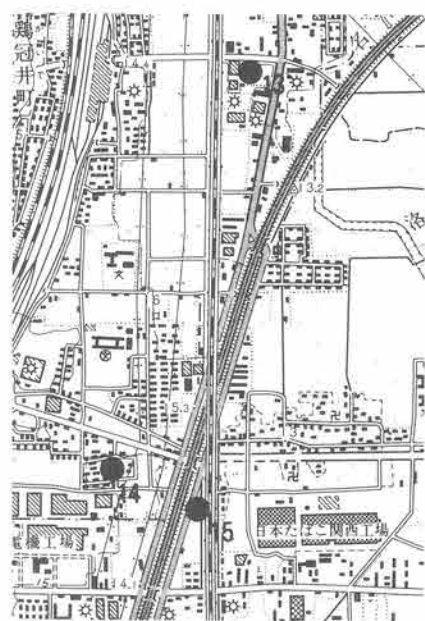


fig. 228 鶏冠井・鴨田・菱田遺跡木器
出土地点 (1:25,000 京都西南部)

材・用途不明品などの木器が出土している。

〔木器番号〕大溝S D10670 ; 04801, 09224, 09610, 11907, 16108, 16302,
18103, 18709

自然流路S D3003 ; 03401, 06510, 07604, 09220, 09312, 15614,
16306, 17214, 18201, 20123

包含層 ; 00310, 05008, 10308, 13307, 18711, 18718,
20007

〔文 献〕山中章・松崎俊郎・他『鴨田遺跡』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集, 向日市教育委員会 1987年

宮原晋一・他「長岡京跡左京第106次(7ANFTB-3地区)～左京四条二坊六町・鴨田遺跡第5次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集, 向日市教育委員会 1985年

15 菱田遺跡 (fig. 228) ひしだ

向日市上植野町菱田に所在。小畑川が形成した緩扇状地に立地する。1981年6月～7月に向日市教育委員会が実施した長岡京跡左京第75次調査で新たに発見された。検出した遺構には、古墳時代の掘立柱建物, 長岡京期の掘立柱建物・土坑がある。

収録した木器は第1グリット暗灰色粘質土(古墳時代遺物包含層)から出土した。包含層は旧小畑川の南に形成された後背湿地の一部と思われる。5世紀後半～6世紀後半の須恵器が相伴している。

なお、『向日市遺跡地図』第2版(1988)では, 当該地を弥生時代前期～古墳時代後期の集落として知られる鴨田遺跡に含めている。

〔木器番号〕06509

〔文 献〕山中章・國下多美樹・松崎俊郎「長岡京跡左京第75次(7ANFHD-2地区)～左京四条二坊十二・十三町～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集, 向日市教育委員会 1982年

16 森本遺跡 (fig. 229) もりもと



fig. 229 森本遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都西南部)

向日市森本町下森本ほかに所在。1966年の河川改修工事に際し, 弥生土器・石器・弓などが出土し, 当初, 石田川遺跡と命名されていた。1970年に京都府教育委員会が発掘調査を実施して以後, 当該地が長岡宮の北辺官衙地区にあたるため, 京都府教育委員会・向日市教育委員会などが周辺の発掘・立会調査を継続している。西から東に向かって開く標高約16mの谷部(水田跡)と, その南に広がる標高約19mの台地上(住居跡など)とに立地する。1970年の谷部の発掘調査では, 両側を矢板で護岸した幅1.0～1.8mの弥生時代中期の水路と, 杭で護岸した幅0.5～0.8mの弥生時代後期の水路とを検出した。この両水路から, 人面土器を含む多量の弥生土器・石器・木器が出土した。また, 台地上における調査では, 弥生時代の竪穴住居, 方形周溝墓などを検出している。

収録した木器には, 1970年の発掘調査で弥生中期水路から出土したもの, 1966年の採集品, 1979年の立会調査で溝S D794203から出土したものがある。収録した曲柄又鍬・弓・円板・発火具以外に, 直柄鍬・杵・椀・槽・杭・矢板などの木器が出土している。

〔木器番号〕 弥生中期水路；15009 溝S D794203；04803

出土遺構不詳；10906, 17223

〔文 献〕 浪貝毅・吉本堯俊・北山惇『森本遺跡発掘調査概報』長岡京発掘調査団 1970 年
松崎俊郎「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成－農耕具を中心として－」『長岡京
古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986 年

17 東土川西遺跡 (fig. 230) ひがしつちかわにし

向日市森本町戌亥に所在。桂川の氾濫原に立地する。1979 年 11 月～12 月に向日市教育委員会が実施した長岡京跡左京第36次調査で新たに発見された。検出した遺構には、弥生時代後期～古墳時代初期の流路群、長岡京期の掘立柱建物がある。また、縄文時代晩期の土器包含層から丸木舟が出土している。

収録した木器は、弥生時代後期の流路S D3604, S D3608から出土した。流路S D3606は幅2m, 深さ0.4mをはかる。流路の方向は北東から南西である。弥生V期の土器, ヒョウタンなどの種子類, 甲虫類の遺体とともに泥除の未成品, 竪杵, 柄穴のある部材などの木器が出土した。流路S D3608は北北東から南南西に向かって流れる。東側を流路S D3607が浸食しており, 規模は不明であるが, 幅3.5m以上をはかる。弥生V期の土器などとともに榧が出土している。

〔木器番号〕 流路S D3604；04201, 08806, 19317, 19318, 19319, 19320

流路S D3608；10304

〔文 献〕 竹原一彦「長岡京跡左京第36次 (7ANDII) 発掘調査略報」『長岡京』第18号, 長岡京跡発掘調査研究所 1980 年

松崎俊郎「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成－農耕具を中心として－」『長岡京
古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986 年

18 修理式遺跡 (fig. 231) しゅりしき

向日市寺戸町修理式・蔵町に所在。旧寺戸川の氾濫原上に立地する。1980 年 11 月～1981 年 2 月に向日市教育委員会が発掘調査を実施し, 弥生時代後期の水路, 古墳時代前期の土坑・足跡などを検出した。水路内の遺物は北岸に集中する傾向があり, その北東部に同時期の集落跡が存在するらしい。

収録した木器は、弥生時代後期の水路S D30と古墳時代前期の土坑S K32から出土した。水路S D30は幅15m, 深さ0.5mで, 北から東へ円弧状に彎曲して流れる。兩岸の3箇所から岸に直交して延びる杭列があるが, いずれも途中で止まっている。堰状の施設であろう。水路埋土の上面では古墳時代前期の足跡を検出しており, この時期には水路の機能を失っていたことがわかる。後期の弥生土器・石斧・石鏃・種子などとともに鋤の未成品・鋤・鏃・用途不明品などの木器が出土している。

土坑S K32は長軸18m, 幅3～6m, 深さ0.6～0.7mの大きなよどみ状のくぼみである。布留式土器とともに曲柄又鋤・部材が出土している。

〔木器番号〕 水路S D30；11504 土坑S K32；05101

〔文 献〕 向日市教育委員会「修理式遺跡第1次発掘調査現地説明会資料」1981 年

山中章「長岡京跡修理式第1次 (7ANBSS-1地区) 分布調査概要」『向日市埋蔵文

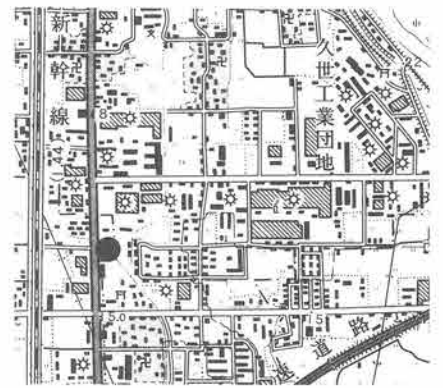


fig. 230 東土川西遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都西南部)

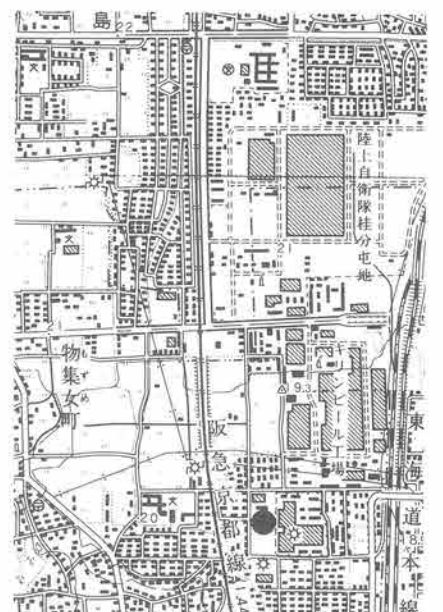


fig. 231 修理式遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都西南部)

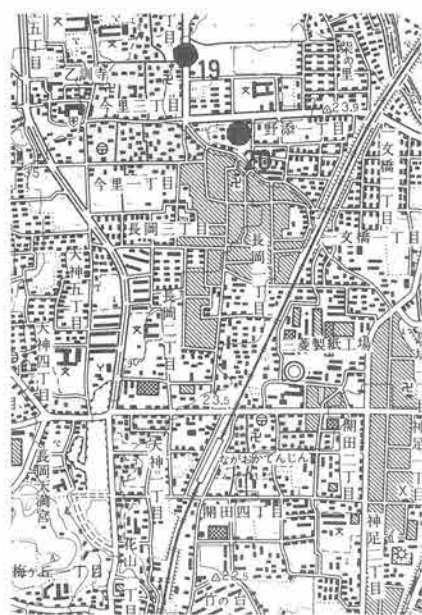


fig. 232 今里車塚・今里北ノ町遺跡木器出土地点 (1:25,000 京都西南部)

化財調査報告書』第7集, 向日市教育委員会 1981年

松崎俊郎「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成—農耕具を中心として—」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986年

向日市『向日市史』上巻 1983年

19 今里車塚古墳 (fig. 232) いまどとくるまづか

長岡京市今里4丁目に所在。1978・1979・1980・1981年に京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し、削平された古墳の存在を明らかにした。標高約28mの平地に立地し、周囲に盾形の周濠をもつ典型的な中期の前方後円墳である。墳丘全長75m, 後円部直径45mをはかり、周囲に幅約20mの濠がめぐる。外部施設として葺石・埴輪があり、さらに墳丘裾の葺石を葺く前に立てた木柱が4m間隔で並ぶ。検出した10本の柱根の一つでは、板材(盾形?)の基部を接して立てた状況を確認した。柱根には大小があり、これが交互に並ぶ。また、周濠内から埴輪片とともに笠形木器などが出土した。笠形木器にも大小があるが、小さい方は断片で全形がよくわからない。柱根・笠形・板材など、すべて樹種はコウヤマキである。

〔木器番号〕墳丘裾; 16904a 周濠底; 16904b, 16904

〔文献〕高橋美久二・他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980』第2分冊, 京都府教育委員会 1980年

石尾政信「長岡京跡右京第84次発掘調査概要(7ANITT-4地区)」『京都府遺跡調査概報』第3冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年

高橋美久二「長岡京市今里車塚古墳の笠形木製品」『山城郷土資料館報』第3号, 京都府立山城郷土資料館 1985年

高橋美久二「木製の埴輪再論」『東アジアの古代文化』56号, 1988年

20 今里北ノ町遺跡 (fig. 232) いまどときたのまち

長岡京市今里北ノ町野添に所在。坂川・大正寺川・風呂川・小畑川などの中小河川の氾濫原に立地する。1981年5月～7月に長岡京市教育委員会が実施した長岡京跡右京第75次調査で新たに発見され、1984年7月～8月, 1985年4月～5月のほか数次にわたって長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターが、長岡京跡右京域調査の一環として発掘を継続している。検出した遺構には、弥生時代中期から古墳時代前期の流路群, 奈良時代の掘立柱建物がある。流路の方向は、西→東, 北西→南東の2者に大別でき、幅は1m前後～15mのものが錯綜している。北西に位置する今里遺跡との関係が指摘されている。

収録した木器は、右京第168次調査区の青灰色礫層(弥生～古墳包含層), 右京第190次調査区の溝状落ち込みから出土した。

〔木器番号〕溝状落ち込み; 01813 青灰色礫層; 05108

〔文献〕木村泰彦「右京第168次(7ANIFD地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度, (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1985年

木村泰彦「右京第190次(7ANIFD-4地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度, (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1987年

21 下八ノ坪遺跡 (fig. 233) しもはちのつぼ

長岡京市神足下八ノ坪に所在。小畑川と桂川との間にひろがる氾濫原上に立地する。1980年6月～9月に長岡京市教育委員会が実施した長岡京跡左京第53次調査で新たに発見された。検出した遺構には、古墳時代前期の自然流路、長岡京期の掘立柱建物群・溝群・土坑、平安時代前期頃に作られた古道（久我畷）などがある。

収録した木器は、古墳時代前期の自然流路S D 5308から出土した。流路は幅3m以上、深さ0.4mで、北西から南東に向かって流れる。少量の弥生時代後期・庄内式期の土器を含む大量の布留式土器とともに泥除・曲柄又鍬・直柄鍬などの木器が出土した。

なお、『長岡京市遺跡地図』第2版（1987）では、当該地を弥生時代前期～古墳時代後期の集落として知られる雲宮遺跡に含めている。

〔木器番号〕 03609, 05110

〔文 献〕 奥村清一郎・戸原和人・他「長岡京跡左京第53次（7ANMSB地区）調査概要－左京六条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我畷－」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊，長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1985年

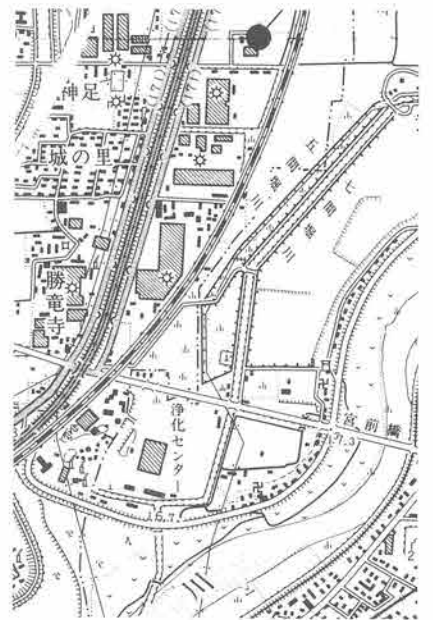


fig. 233 下八ノ坪遺跡木器出土地点
(1:25,000 京都西南部・淀)

22 裕遺跡 (fig. 234) はざま

長岡京市調子3丁目に所在。現在南を流れる小泉川の氾濫低地に立地する。1978年10月～1979年1月に長岡京市教育委員会が実施した長岡京跡右京第14次調査で新たに発見された。検出した遺構には弥生時代中期～古墳時代前期の小河川，古墳時代前期のピット，縄文時代～長岡京期の小河川がある。

収録した木器は、弥生時代中期～古墳時代前期の小河川S D 1401上層から出土した。小河川S D 1401は上下2層に大別でき、下層は幅7m、深さ0.7m、上層は幅2.5m、深さ0.6mをはかる。流路の方向は東から西である。弥生時代中期の土器片・太型蛤刃石斧の破片・古墳時代前期の土器片とともに曲柄又鍬・鋤・用途不明品などの木器が出土した。

〔木器番号〕 05105

〔文 献〕 久保哲正「長岡京跡右京第14次（7ANRUI地区）調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集，長岡京跡発掘調査研究所 1979年

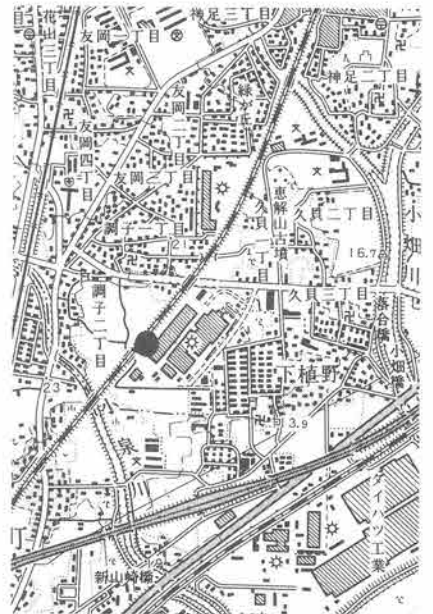


fig. 234 裕遺跡木器出土地点
(1:25,000 淀)

D 大阪府

1 安満遺跡 (fig. 236) あま

高槻市八丁畷町・高垣町ほかに所在。旧檜尾川が形成した扇状地の先端部に立地し、東西1.5km、南北0.5kmの広がりをもつ大規模な集落遺跡。標高は7～10mである。これまでに50次におよぶ発掘調査を大阪府教育委員会と高槻市教育委員会が行ない、現在も断続的に実施している。検出した遺構には弥生時代の環濠・井堰（前期），方形周溝墓群（中期），竪穴住居・井戸（後期）などがあり、ほかに古墳時代～中世にかけての掘立柱建物や井戸なども数多く発見している。

弥生時代前期の木器は、1968年に調査した環濠の一部と考えられる2本の東西溝のうちの

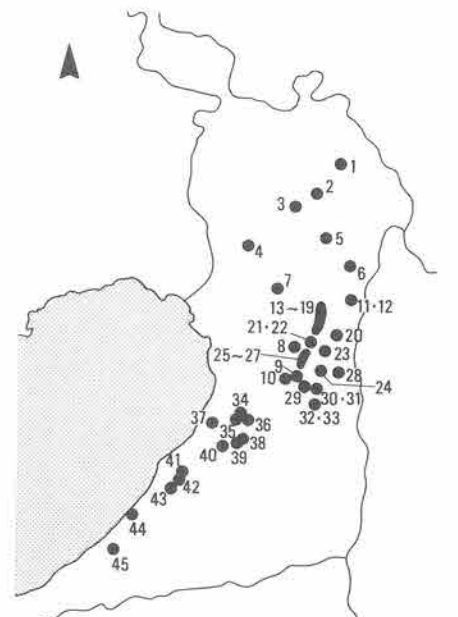


fig. 235 大阪府の木器出土遺跡



fig. 236 安満遺跡木器出土地点
(1:25,000 淀)

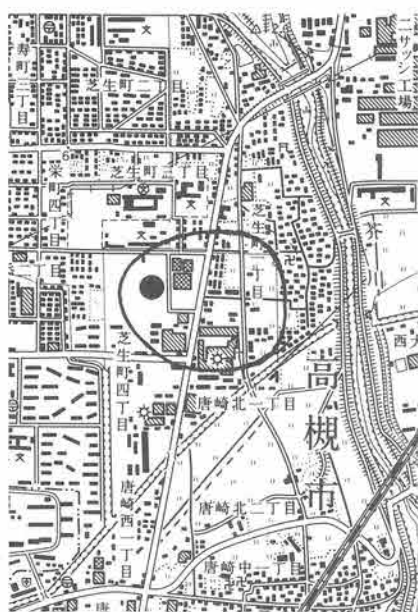


fig. 237 芝生遺跡木器出土地点
(1:25,000 吹田)

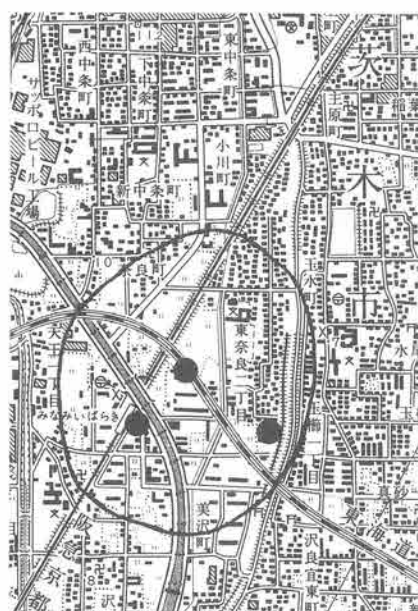


fig. 238 東奈良遺跡木器出土地点
(1:25,000 吹田)

北溝(24E地区東西溝)から出土した。この溝は幅3.5~4m、深さ1.2m前後をはかり、溝内からは木器以外に、多量の土器や石器が出土している。木器のなかには未成品がかなり混在し、なかには原材も含んでいた。おもな木器だけでも斧柄・鍬・鋤・堅杵・匙・高杯・櫛・簪・弓・剣形などが列記できる。

弥生時代中期の木器は、1966年に調査した中期前半の大溝(23-O地区大溝)から出土している。トレンチ調査のため大溝の規模は判然としない。木器には鍬・鋤・杓子などがあり、多くの第Ⅱ様式の土器が伴っていた。

〔木器番号〕23-O地区 大溝; 05401, 05402

24-E地区 東西溝; 00105, 00505, 00506, 00603, 01403, 01607,
02501, 02801, 03902, 04101, 08608, 10913,
11104, 11105, 12001, 12023, 12302, 12408,
12606, 13004, 13008, 16102

〔文 献〕田代克巳・他『高槻市安満弥生遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会 1969年
原口正三『高槻市史』第6巻, 考古編, 高槻市役所 1973年
原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第1巻, 本編Ⅰ, 高槻市役所 1977年
森田克行「1 大阪府 安満遺跡」『探訪 弥生の遺跡(畿内・東日本編)』有斐閣 1989年

2 芝生遺跡 (fig. 237) しぼう

高槻市芝生町に所在。1983年4月、1985年7月~10月に高槻市教育委員会が発掘調査を実施した。市域を南北に貫流する芥川の右岸に形成された自然堤防上に立地する。弥生時代前期~後期にいたる拠点的な集落遺跡で、標高は4~5mである。遺跡の南方約1kmに淀川がひかえている。これまでに中期の堅穴住居・土坑墓・土器棺墓・土器溜、後期の堅穴住居・大溝・井戸・土坑・沼沢地などを検出している。

木器はいずれも後期のもので、大溝と沼沢地(落ち込み)から出土している。大溝は幅4~6m、深さ1~1.2mの人工の用水路で、一部2段掘りになっている。大量の第Ⅴ様式前半の土器とともに、鋤・穂摘具・櫛未成品などが出土した。沼沢地(落ち込み)は居住区の北側および西側に広がっており、直柄鍬・穂摘具・櫛未成品・堅杵・槽・板材などが多くの土器と一緒に出土している。

〔木器番号〕大溝下層; 06501, 06502, 07803, 08206

落ち込み; 02002, 07808, 08302, 08805, 13401

〔文 献〕森田克行「59, 芝生遺跡」『昭和59, 60年度高槻市文化財年報』高槻市教育委員会 1988年

3 東奈良遺跡 (fig. 238) ひがしなら

茨木市東奈良・奈良町・若草町ほかに所在。大正川と茨木川とにはさまれた沖積平野に立地し、南北約1.4km、東西約1kmをはかる広大な集落遺跡である。1971年以降、65次にわたる調査を東奈良遺跡調査会・茨木市教育委員会・大阪府教育委員会が実施しており、なかでも1973・1974年に出土した銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型をはじめとする鋳造関係遺物は著名である。

縄文時代前期の遺物も出土しているが、集落の成立は弥生時代前期と考えられ、環濠や方形周溝墓群を検出している。その後、集落は若干の変動をみながらも古墳時代前期まで存続するが、古墳時代中期～奈良・平安時代にかけての資料は極端に少なくなり、中世には廃絶する。

木器は全般的に遺存状態がよく、これまでに柱根・木棺・丸木舟を含む 1,000 点以上を検出している。今回収録した弥生時代と古墳時代の木器は農工具・容器・武器・装身具などで、その多くは溝状遺構から出土している。このなかで溝 25・溝 25b・溝 27・溝 28 は、弥生時代前期の環濠もしくはそれにかかわるものである。また第Ⅰ大形土坑・第Ⅱ大形土坑・ⅡP-191・土坑 39 は、木器の未成品が集中的に出土した弥生時代中期の土坑で、後二者は住居に隣接していた。

〔木器番号〕	溝25 ; 04001	溝25b ; 08603
	溝27 ; 11604, 13005, 14504	溝28 ; 12016
	大形土坑-1 ; 01204	弥生Ⅰ期包含層 ; 10908
	第Ⅰ大形土坑 ; 03906, 04409, 09720	第Ⅱ大形土坑 ; 00503
	ⅡP-2 ; 06001	ⅡP-191 ; 06002
	土坑39 ; 06005	溝5 ; 03302
	井戸5 ; 02902	G-4区溝Ⅴ ; 15409
	弥生Ⅴ期溝 ; 19109	溝Ⅴ ; 17111
	溝-1 ; 09422, 15501	南北溝Ⅱ ; 13504
	沼状落ち込み ; 17602	井戸Ⅰ ; 15301
	第7号方形周溝墓木棺内 ; 12007	D棟木器溜 ; 03203
	D棟溝14 ; 08511	溝10 ; 09116
	A溝 ; 00114	C1溝 ; 04901, 05001
	溝Ⅱ ; 07820	溝Ⅱ-3 ; 05801

〔文 献〕 田代克己・奥井哲秀・他『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ』東奈良遺跡調査会 1979 年
奥井哲秀・井上直樹・他『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅱ』東奈良遺跡調査会 1981 年

4 垂水南遺跡 (fig. 239) たるみみなみ

吹田市垂水町3丁目に所在。1976年6月から30以上にわたって吹田市教育委員会が調査。神崎川右岸の標高3mの低湿地に立地する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。古墳時代中～後期の竪穴住居・掘立柱建物・溝・矢板を有する水田跡などを検出。弥生土器(中～後期)、庄内式土器、布留式土器・須恵器・埴輪・石製模造品、緑釉・灰釉陶器・和銅開珎、瓦器などが出土した。

収録した木器は古墳時代相当層から出土したものであるが、概して土器を伴出せず、詳細な時期を特定できない。収録した田下駄・剣形のほか、曲柄鍬・竪杵・容器・建築部材・矢板等が出土した。

〔木器番号〕 第3次調査C-4区木組(堰) ; 07511
第21次調査G-2区第8層 ; 07704
第2次調査C-7区1G3次面 ; 16101

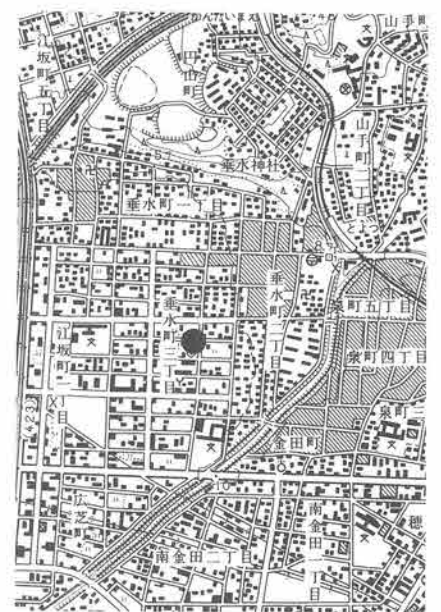


fig. 239 垂水南遺跡木器出土地点
(1:25,000 吹田)

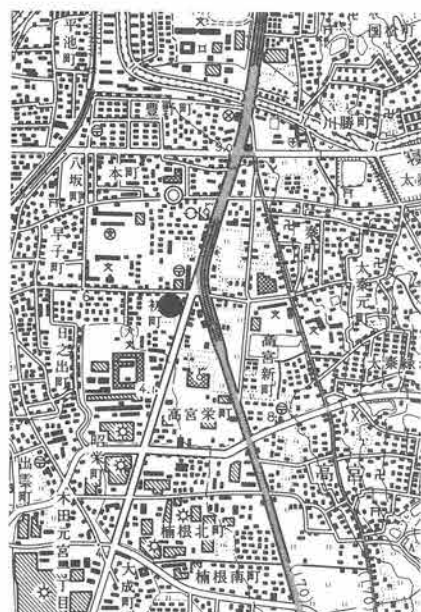


fig. 240 高宮八丁遺跡木器出土地点
(1:25,000 枚方)

〔文 献〕 藤原学「垂水南遺跡」『吹田市史』第8巻別編, 吹田市役所 1981 年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1977 年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅱ』1978 年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅲ』1979 年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅳ』1980 年
吹田市教育委員会『昭和 56 年度埋蔵文化財緊急調査概報』1981 年
吹田市教育委員会『昭和 58 年度埋蔵文化財緊急調査概報』1982 年
藤原学・他「垂水南遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第 14 会研究集
会資料 1983 年

5 高宮八丁遺跡 (fig. 240) たかみやはっちょう

寝屋川市初町に所在し、北西の本町にも広がりをもつ。1985 年 10 月～1986 年 7 月にかけて寝屋川市教育委員会が発掘調査を実施した。生駒山系の西側斜面の丘陵端部にあたり、寝屋川左岸に立地。弥生時代前期中段階～中期（畿内第Ⅲ様式）の溝や土坑・落ち込み・貯蔵穴・自然河川、中世の井戸・水路・耕作痕などを検出している。本遺跡の東側丘陵上には、本遺跡と密接な関係にある高地性集落（太秦遺跡）および太秦古墳群がある。

木器はすべて弥生時代前期中葉から期中葉の時期のもので、鋤、鋤の未成品、鋤、堅杵、弓、矢柄、石斧の柄、高杯・椀・槽等の容器類、杭、紡織具、櫓、刺突具、匙、杓子、編物（網代）、櫓、鋤、板状原材が出土している。木器は北東から南西に向けて流れる溝、及び落ち込み、自然河川内から出土しており、収録した木器は溝 105・240、および落ち込み 214・216 から出土したものである。

溝 105 は幅約 3 m、深さ 0.5 m をはかる。溝内から畿内第Ⅰ様式中段階から新段階の土器が出土している。溝 240 は断面 U 字形を呈し、幅 2～4.5 m、深さ 0.5 m をはかる。この溝底の一部は、幅 2～3 m、深さ 0.5 m、長さ約 10 m にわたって深く掘り込まれ、内部から農具、弓、石斧の柄などの木器や未成品が多量に出土した。貯蔵場的な遺構の可能性もある。木器のほかに、畿内第Ⅰ様式中段階から新段階の土器が出土している。落ち込み 214 は上層と下層に分かれる。上層は東西 1～6 m、南北 18 m、深さ 0.7 m をはかり、木器・自然木のほかに、畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の土器および石器類が出土した。下層は東西 6 m、南北 17 m、深さ 0.6 m をはかり、畿内第Ⅰ様式中段階から新段階の土器および石器類が出土した。落ち込み 216 は東西 5 m、南北 17 m、深さ 0.5 m で、畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の土器類とともに、弓・鋤をはじめとする木器が多く出土している。

〔木器番号〕 溝105 ; 00605 溝240 ; 10210
落ち込み214 ; 01611, 02412 落ち込み216 ; 01001

〔文 献〕 塩山則之『高宮八丁遺跡－寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査概要報告－』寝屋川市文化財資料 10, 寝屋川市教育委員会 1987 年
塩山則之・露口真弘『高宮八丁遺跡－木器編－』寝屋川市教育委員会 1989 年

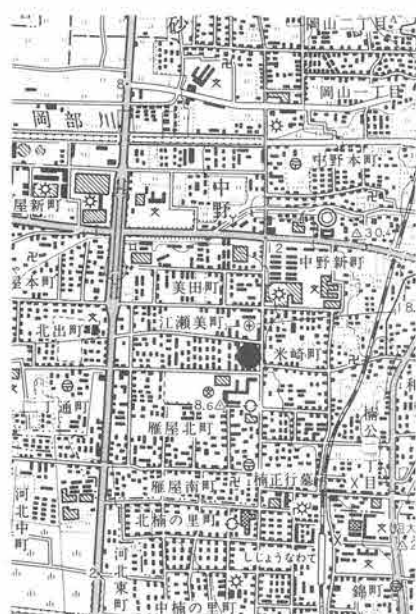


fig. 241 雁屋遺跡木器出土地点
(1:25,000 生駒山)

6 雁屋遺跡 (fig. 241) かりや

四条畷市雁屋北町・江瀬美町に所在。生駒山系の西側斜面から流出する江瀬美川の両岸に立地する。江瀬美川は古代河内瀉に注いでいた。1983 年 5 月、1985 年 10 月～1986 年 3 月に四条

堺市教育委員会が発掘調査を実施し、弥生時代前期の溝、中期の方形周溝墓・旧河川、後期の竪穴住居・周溝墓・大溝・土坑などを検出した。1985年の調査区内では、4基の方形周溝墓から21基の木棺墓と1基の土器棺墓を検出。木棺はコウヤマキ、ヒノキ、カヤを使用し、なかでもコウヤマキの木棺は厚さ10～13cmと遺存状態が良好で、木棺の組合せ方法や加工状態が非常によくわかる。

収録した木器は、1号方形周溝墓と2号方形周溝墓とが共有する溝から出土した。蓋と身が完存する四脚合子と柄を装着したままの直柄平鍬で、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器と共伴。このうち壺3点、把手付鉢1点、水差形土器1点および四脚合子には水銀朱を施していた。そのほかに壺・甕・高杯、磨製石斧などが共伴した。

〔木器番号〕01606, 14801, 14802

〔文献〕野島稔『雁屋遺跡』四条堺市教育委員会1987年

7 森小路遺跡 (fig. 242) もりしょうじ

大阪市旭区新森に所在する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡。淀川左岸の自然堤防上に立地し、標高1.4m前後をはかる。1931年の土地区画整理事業で発見されたが、1974年以降、大阪市教育委員会や(財)大阪市文化財協会が断続的に立会・発掘調査を実施し、遺跡の範囲や時期を明らかにしつつある。弥生時代の遺構には、ピット群・土坑群・溝・方形周溝墓があるが、住居跡は未確認である。いずれも中期に属するが、前期の土器も少量出土している。古墳時代では5世紀代の遺物が出土しており、わずかに飛鳥・奈良時代の土器も出土する。収録した木器は、弥生時代中期の土坑や溝から出土したものである。

〔木器番号〕7次調査 土坑SK09; 01518, 07105

MS80-15 溝状遺構; 08516 MS81-6 SX01; 08711

MS84-25 土坑SK01; 13120

〔文献〕島田貞彦・有光教一「大阪市東成区森小路発見の弥生式遺跡に就いて」『考古学雑誌』第21巻第10号、日本考古学会1931年

大阪市立博物館・(財)大阪市文化財協会『発掘された大阪—(財)大阪市文化財協会設立5周年記念—』1984年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡第7次調査」『昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1981年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡MS80-15次発掘調査概報」『昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1982年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡MS81-6次調査」『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡MS84-25次調査」『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1984年

8 加美遺跡 (fig. 243) かみ

大阪市平野区加美東1丁目～7丁目に所在する。河内平野南部を北流する旧大和川の支流である長瀬川および平野川が形成した標高3.5m前後の沖積低地に立地する。その範囲は東西900m、南北1,200mにおよび、東に接する八尾市の久宝寺遺跡とは一連の遺跡と考えられて

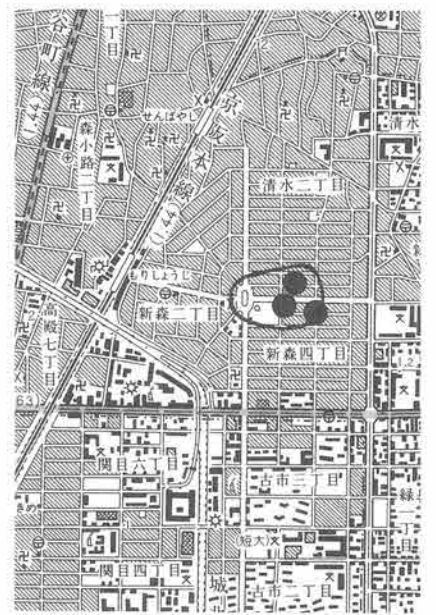


fig. 242 森小路遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東北部)

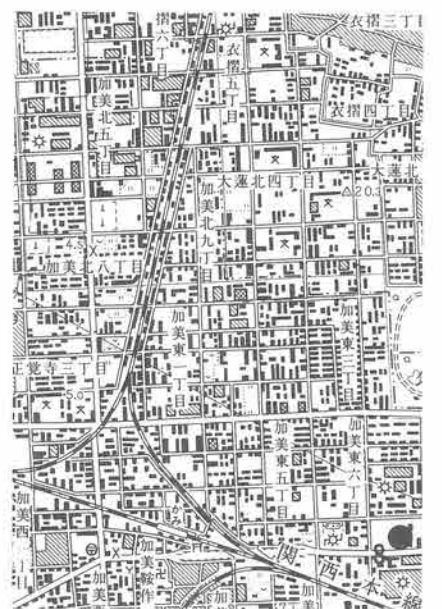


fig. 243 加美遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)

いる。1978年の加美東小学校建設工事に伴い発掘調査が実施され、1984年以降、大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会が調査を継続している。

収録した木器は、1984・1985年の調査で出土したもの。1984年に加美東6丁目で行なったKM84-1次調査では、上下2層において弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての集落跡や墳墓群を検出した。上層の弥生時代後期末～古墳時代前期の井戸・土坑・大溝では、竪杵・鋤・鍬・横槌・木錘などの生活用具をはじめ、加工木・流木などが出土した。下層で検出した弥生時代中期後半(Ⅳ基)のY1号墳丘墓は、南北に長い長方形を呈し、長さは墳頂部で南北22m、東西11m、高さは周溝の底から約3mをはかる。周溝内から壺・台付無頸壺・甕・鉢・高杯・水差し・台付水差し・器台などの弥生土器(Ⅳ期)とともに、多数の木器(建築部材・薄板・高杯・四脚合子・合子蓋・刀形・鋤・鍬・泥除・用途不明品・加工木・大小のコウヤマキのチップ)や石器(石鏃・扁平片刃石斧・石庖丁・砥石)が一括出土した。土器・木器の多くには穿孔や打ち欠きがみられるほか、木器のなかには焼けたものもある。土器や木製容器類は葬送儀礼に、鋤・鍬類は墳墓の造成に使われたものかもしれない。これらは墳墓の最終の埋葬が終わった後に投棄されたものであろう。

〔木器番号〕KM84-1 井戸; 01803, 08902, 15103

KM84-1 大溝; 06503, 09213, 17110

KM84-1 Y1号墓周溝; 03815, 13108, 14605, 14805, 16109, 19505

KM85-6 井戸SE01; 09311

〔文献〕大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『加美遺跡現地説明会資料―大阪市平野区加美東6丁目所在―』1985年

永島暉臣・田中清美「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」『月刊文化財』No.266, 文化庁文化財保護部 1985年

9 長原遺跡 (fig. 244) ながはら

大阪市平野区长吉出戸・六反・長原東・長原・長原西・川辺に所在。北部の長吉出戸付近は城山遺跡とも呼ばれる。河内台地の東縁に立地する旧石器時代から中・近世に至る複合遺跡。集落・墳墓・水田をはじめとする各種の遺構が検出されている。1973年の(財)大阪文化財センターによる試掘調査で発見され、地下鉄谷町線の延長工事や近畿自動車道建設工事に伴い、長原遺跡調査会や(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。以後、大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会が調査を継続している。収録した木器は、1976年～1978年に(財)大阪文化財センターが行なった発掘調査、および1983年～1986年に大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会が行なった発掘調査で出土した。

〔文献〕永島暉臣・他『長原遺跡発掘調査報告書』長原遺跡調査会・(財)大阪市文化財協会 1982年(改訂版)

永島暉臣・他『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(財)大阪市文化財協会 1982年

永島暉臣・他『長原遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(財)大阪市文化財協会 1983年

大阪市立博物館・(財)大阪市文化財協会『発掘された大阪―(財)大阪市文化財協会設立5周年記念―』1984年

藤沢真依・他『長原―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』(財)大阪文化財センター 1978年



fig. 244 長原遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)

辻武・他『長原（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』（財）大阪文化財センター 1985年

a 長原遺跡（財）大阪文化センター 調査

近畿自動車道の建設に伴い、（財）大阪文化財センターが1976年7月～1978年5月に発掘調査を実施。旧石器時代から近世に至る遺構や遺物を検出した。主体となるのは、古墳時代中期の古墳群とそれに続く水田跡、および平安時代中期～鎌倉時代の集落跡である。古墳群は推定径55m（東向きの前方後円墳とすれば、全長100m以上）の塚ノ本古墳を中心に分布する数十基の小型方墳群で、各種埴輪や須恵器・土師器が出土している。木器は塚ノ本古墳周濠内から、5世紀前半代の円筒埴輪などとともに出土した。

〔木器番号〕20018

〔文献〕藤沢真依・他『長原－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』（財）大阪文化財センター 1978年

b 長原遺跡 大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会 調査

収録した木器は縄文時代晩期および古墳時代後期のもの。長原遺跡における縄文時代晩期の遺構や遺物は、長吉川辺3丁目付近に集中している。木器が出土したのは、NG82-41次調査で検出した自然河道（I区河川）。幅5～6m、深さ約2mで、長原式土器・土偶・種子類などが共伴した。

古墳時代後期の木器は、長吉長原西など遺跡の西側を占める集落跡に伴うものが多い。NG84-25次調査で検出した井戸は、掘立柱建物群に伴う大規模なもの。NG86-41次調査の井戸は、長径2.9m、短径2.0m、深さ3mの楕円形の素掘りのもの。馬歯・須恵器を共伴。刀形・盤が出土したのも、ほぼ同時期の溝で、鎌柄は遺跡北部の自然流路から出土している。

〔木器番号〕NG82-41 I区河川；00602, 11014

NG84-25 井戸；19006, 19101

NG86-41 井戸；01009, 09007, 09008, 09426, 17112, 17117

NG85-16 溝SD704；13314, 16220

DD85-1 V区自然流路；07911

〔文献〕大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会『長原遺跡（NG82-41）現地説明会資料』1983年

大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査（NG84-25）現地説明会資料』1985年

田中清美・趙哲済「長原遺跡（長吉川辺3丁目地区）出土の縄文時代の遺構・遺物について」『葦火』第3号、（財）大阪市文化財協会 1986年

藤田幸夫「長原遺跡から出土した古墳時代の木製品について」『葦火』第6号、（財）大阪市文化財協会 1987年

10 瓜破遺跡 (fig. 245) うりわり

大阪市平野区瓜破に所在する旧石器時代から室町時代に至る複合遺跡。東方は長原遺跡、西北方は瓜破北遺跡に接する。羽曳野丘陵から北方に派生した河内台地の末端に立地。1940年

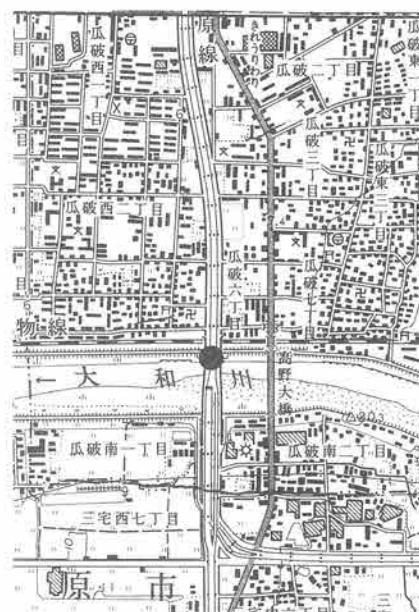


fig. 245 瓜破遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)

に山本博が現在の和川河床に散布する貨泉など弥生時代の遺物を報告。以後、今里幾次・日本考古学協会などが調査を実施し、1976年以降は大阪府教育委員会・(財)大阪市文化財協会(難波宮址顕彰会)が発掘調査を継続している。

収録した木器は、1953年に日本考古学協会が実施した現和川の右岸河床部分の発掘調査時に出土したもの。「2号竪穴」と命名された溝状遺構から、畿内第Ⅰ様式の土器や石器とともに出土している。なお、斧直柄や泥除の未成品も共伴しているらしい。

〔木器番号〕 01701, 02807

〔文 献〕 杉原荘介・神沢勇一「大阪府瓜破遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961年

永島暉臣慎・他『瓜破遺跡』(財)大阪市文化財協会 1983年

大阪市立博物館・(財)大阪市文化財協会『発掘された大阪—(財)大阪市文化財協会設立5周年記念—』1984年

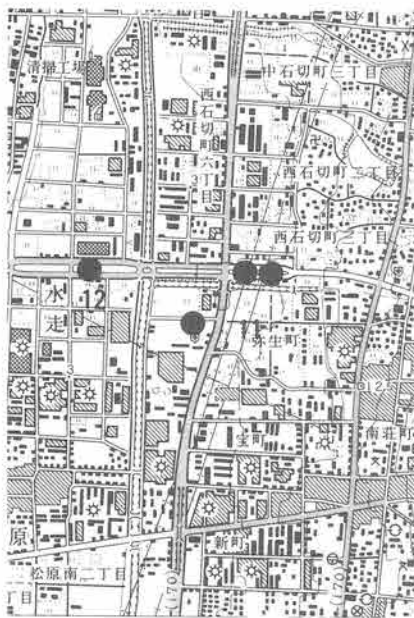


fig. 246 鬼虎川・鬼虎川(水走地区)
遺跡木器出土地点
(1:25,000 生駒山)

11 鬼虎川遺跡 (fig. 246) きとらがわ

東大阪市弥生町・西石切町5丁目に所在する弥生時代前期末～中期末(弥生Ⅰ期新段階～Ⅳ期)の集落遺跡。1975年2月から1989年3月までに、30次にわたる発掘調査を東大阪市遺跡保護調査会・国道308号線内遺跡調査会・(財)東大阪市文化財協会・大阪府教育委員会が実施している。生駒山西麓の扇状地末端から沖積平野にかけて位置し、東西約0.7km、南北約0.9kmの範囲と推定される。かつては河内潟湖の東南にひろがる湿地と山麓からのびる舌状微高地とに立地していたが、現在は水田下3～4mに埋れている。弥生Ⅰ(新)～Ⅱ期の溝・土坑や弥生Ⅱ～Ⅳ期の掘立柱建物・井戸・溝・土坑・壺棺墓などを微高地とその縁辺で、小規模な貝塚、水田に伴う杭列、南東から北西に蛇行して流れる自然流路などを微高地周辺の低地で検出している。また、建物群の北東約300mには方形周溝墓・土坑墓などから成る墓域があり、墓域と建物群とのあいだでは柵列を伴う防御用大溝を検出している。微高地とその周辺から多量の弥生土器・木器・石器が出土。鉄器(鑄鉄脱炭鋼の鑿・鏃)・骨角牙器・動植物遺体なども良好な状態で遺存する。数種類の青銅器鋳型(鐸・釧・鍬)が出土したことから、青銅器鋳造センターとしての性格も示唆される。

収録した木器は、4・5・7・12・19・29次調査で出土した。その大半は微高地縁辺に堆積した遺物包含層(基本層序の第13U a層～第15L層)と貝塚層(セタシジミを主体とする。7次調査区北部の低地に幅3～5m、東西に40m以上、層厚10～20cmで形成。一部は枝分れして微高地縁辺に凹入)、一部は微高地上の土坑・溝から出土。水田跡がひろがる低地部では、微高地から離れるにつれ木器出土数は減少する。層位別にみると第13U a層出土品が多数を占めるが、これは下面を浸蝕しながら堆積が進行したため、古い時期の遺物が混入した結果である。

7次調査第15層下面の土坑3・4は木器未成品貯蔵穴。ともに円形で直径1.5m、深さ0.8m。土坑3では鍬身・竪杵・太型蛤刃石斧柄などの未成品が、弥生Ⅰ(新)～Ⅱ期の土器と共伴。土坑4では鍬身・舟形の未成品が弥生Ⅰ(新)期の高杯形土器完形品と共伴。同じ7次調査区の溝1(幅3m、深さ0.7mで北東から南西にはしる)では鍬・横槌・高杯・シカの線刻のある用途不明品など、第15U・L層からは鍬身・柱状片刃石斧などの斧柄・高杯・儀杖・背負子などが弥生Ⅰ(新)～Ⅱ期の土器と共伴した。4次調査区の溝3(鍬身出土)も同時期のもの

の。

第14L層下面では、7次調査区の土坑5からドングリの入った弥生Ⅱ期の鉢とともに箕が出土。同じ7次調査区の溝4（鍬身）・溝6（建築材多数と櫓）、12次調査区の溝9（一木鋤・鍬身）・溝15（黒漆塗り組合せ縦杓子）、5次調査区の溝4（鍬身）などでも弥生Ⅱ期の土器との共伴を確認している。12次調査区の溝9は幅3.6m、深さ1.5m、溝15は幅3m、深さ2.1mで、ともに南東から北西にはしるV字溝。溝15は29次調査で矢が完形で出土したSD-20に続く可能性が大きい。12次調査区の溝11は19次調査区の溝16に続き、環濠の一部と推定される。幅5m・深さ1.2mの東西の大溝で、19次調査区では南肩部に柵列を伴う。大溝内から組合せ鋤・横鍬・櫓・小型臼・梯子・高杯・二脚槽・弓・箆・編み籠などが、弥生Ⅱ期の土器とともに出土した。第14L層および第14L相当層からは、弥生Ⅱ期の土器と共伴して鍬身・小型臼・田下駄・アカ取り・鋺・太型蛤刃石斧柄・高杯・合子・蓋・縦杓子・盾・弓・箆・櫓・琴などが出土した。

第14U層下面では、7次調査区の土坑10よりモミの柱目材を割取った箆の未成品多数、12次調査区の溝16（溝15と同規模で5m東側を平行する）より鍬・鋤身などが弥生Ⅲ期の土器と共伴。第14U層および第14U相当層からは、弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器とともに矢・石戈・弓・盾・鍬・曲柄鍬身・一木鋤・組合せ鋤・掘り棒・小型臼・田下駄・櫓・鋺・斧膝柄・高杯・台付碗・刀形・箆・櫓などが出土した。

第13Uc層下面では、7次調査区の溝8から紡輪を装着した紡錘、第13Uc層から小型臼・田下駄・高杯・鞘・打製石剣などが弥生Ⅱ～Ⅳ期の土器と共伴。第13Ua層では、7次調査区の土坑19から盾と三子撚りの紐が、焼けたアワ粒多数とともに出土。第13Ua層からは弥生Ⅱ～Ⅳ期の土器と共伴して、鍬・鍬膝柄・横鍬・一木鋤・組合せ鋤・竪杵・大型臼・小型臼・穂摘具・アカ取り・櫓・鋺・斧膝柄・横槌・腰掛・高杯・槽・合子・蓋・横杓子・鞘・弓・木鏃・盾・箆・網杵など多量の木器と筥が出土した。

貝塚層からは弥生Ⅰ（新）～Ⅲ期の土器や勾玉・打製石剣・磨製石剣・鉄鏃・銅鐻鑄型などと、鍬身・鋺・自在鉤・高杯・合子・蓋・縦杓子・弓・箆などの木器が共伴。木器細片も多数出土した。以上の他に、基本層序が未確立であったため、時期の細分ができない4次・5次調査包含層出土品として、弥生Ⅰ（新）～Ⅳ期の鍬・鍬身・曲柄鍬身・鍬膝柄・組合せ鋤・田下駄・櫓・竪杵・横槌・アカ取り・弓・木鏃・箆・高杯・六脚合子・蓋・網杵・戈形・剣形・刀形などがあり、また15次調査区出土の箆（弥生Ⅱ～Ⅳ期）に装着用棒卷の残る例がある。

〔木器番号〕 第15層と下面遺構；00107, 00115, 00218, 00607, 01306, 01308, 01405, 01508, 02505, 02608, 02704, 02705, 03002, 03510, 07008, 08712, 09101, 09814, 10111, 12102, 12601, 13116, 13221, 16703, 18202, 18625, 19809

第14L層と下面遺構；00701, 00707, 01302, 01417, 01419, 01509, 01604, 01906, 02702, 03507, 06106, 07002, 07411, 07602, 08006, 08007, 08101, 08507, 09804, 10201, 10403, 11502, 11601, 12602, 12703, 12713, 13212, 15604, 16217, 17302, 18705, 18708, 19519, 19601, 19612, 19806,

20008

第14 U層と下面遺構 ; 00216, 01408, 01416, 01515, 01517, 01807,
02402, 02406, 04305, 05908, 06107, 07406,
08010, 08204, 08303, 08508, 08513, 09011,
09014, 09016, 09119, 10109, 10202, 10801,
10802, 10803, 11108, 11121, 11125, 11313,
11501, 11525, 12609, 12804, 12909, 12920,
13111, 16222, 16223, 18614, 18622, 18807,
18917, 20114, 20128

第13 L層と下面遺構 ; 03905, 11516, 12314

第13U c層と下面遺構 ; 07402, 07403, 08505, 09512, 11315, 14603

第13U a層と下面遺構 ; 00214, 01206, 01514, 01908, 02409, 03602,
05305, 06102, 06401, 07801, 07802, 08003,
08004, 08008, 08013, 08102, 08103, 08104,
08105, 08106, 08205, 08301, 08304, 08305,
08402, 08702, 08703, 08705, 08706, 09216,
09704, 10707, 10708, 11314, 11703, 11704,
12409, 12817, 13112, 13121, 14503, 14706,
14803, 14807, 14809, 14906, 17707, 18520,
18612, 18715, 19501, 19502, 19503, 19609,
19611, 19615, 19617, 19719

貝塚層 ; 02408, 08009, 08011, 11523, 12411, 12706,
12711, 13203, 14502, 17314, 18515, 19810

4次・5次遺物包含層 ; 00215, 01406, 01411, 01503, 01504, 01506,
02308, 02311, 02607, 02707, 03003, 03508,
04415, 05309, 05405, 05806, 05903, 05904,
07005, 07504, 08202, 08607, 09203, 10405,
10412, 10704, 10805, 10809, 10817, 10818,
10830, 11013, 11112, 11117, 11517, 11520,
13214, 13216, 13218, 13806, 14602, 16006,
16012, 16216, 18619, 19605, 20115

〔文 献〕 下村晴文・才原金弘・那須孝悌・樽野博幸『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会 1980 年

芋本隆裕・松田順一郎・那須孝悌・樽野博幸・他『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3－遺構編－』（財）東大阪市文化財協会 1984 年

芋本隆裕・他『鬼虎川の木質遺物－第7次発掘調査報告書 第4冊－』（財）東大阪市文化財協会 1987 年

上野俊明・才原金弘・他『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1987 年

才原金弘「鬼虎川遺跡第12次調査出土の木製品樹種鑑定結果」『東大阪市文化財

協会ニュース』3-3, (財)東大阪市文化財協会 1988 年

福永信雄・他『鬼虎川遺跡第 19 次発掘調査報告』(財)東大阪市教育委員会・東大阪市教育委員会 1988 年

下村晴文・他『鬼虎川遺跡第 29・30 次発掘調査報告』(財)東大阪文化財協会・東大阪市教育委員会 1988 年

才原金弘・他『鬼虎川遺跡発掘調査概要 I 遺物編 木製品』(財)東大阪市文化財協会 1988 年

才原金弘・中村友博・他『鬼虎川遺跡第 1～3 次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 1990 年

12 鬼虎川遺跡（水走地区）(fig. 246) きとらがわ（みずはい）

東大阪市水走に所在。国道 308 号線内の調査において、縄文時代末～弥生時代初頭（長原式～弥生 I 期中段階）の貝塚と弥生 I 期中段階を主体とし新段階を混える遺物包含層を検出した。その範囲を従来の水走遺跡より区別して鬼虎川遺跡（水走地区）と呼称する。1984 年 5 月～1986 年 3 月に 27 次・28 次調査（従来水走 3 次・8 次と呼称）を(財)東大阪市文化財協会が実施。南東から北西にのびる自然の窪地の底で貝塚、その上層で弥生 I 期の包含層を検出した。これらを覆って窪地に埋積する土層には弥生 I～Ⅲ期の遺物を含み、その上部を鬼虎川 5 次・7 次調査区からのびる弥生Ⅳ期の自然流路が侵食している。各層下面および周辺の微高地において、建物・井戸などの集落遺構は今のところ検出していない。

貝塚および弥生 I 期の包含層は、浅い水辺への投棄物が堆積したものとみられる。おそらく河内潟の水域が満潮時に凹入していたのであろう。セタシジミを主体としてマガキなどの海棲貝類を混えた貝塚の構成、層厚 20cm ほどの規模、窪地への選地などは鬼虎川 7 次調査区の貝塚に類似する。貝塚の形成時期は 7 次調査区の貝塚より古く、長原式の時代にはじまり弥生 I 期中段階には終了している。ただし、長原式と弥生 I 期中段階とは時間を共有する可能性がある。

貝塚からは牙製・貝製の装身具・石錘などと共伴して太型蛤刃石斧柄、弥生 I 期の包含層から石庖丁・鑿状石斧などと共伴して鋤身・鋤身・弓・網杵・木葉文を線刻した用途不明品・魼の立簀の一部とみられる組合せ材などの木器が出土している。また、窪地を埋積する土層からは漆塗り弓が出土した。

〔木器番号〕貝塚；00703 包含層；19801, 19802

13 新家遺跡 (fig. 247) しんけ

東大阪市荒本西 2 丁目・3 丁目ほかに所在する縄文時代後・晩期から近世にかけての複合遺跡。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い、(財)大阪文化財センターが 1979 年から 1983 年にかけて、4 次にわたり発掘調査を実施した。遺跡は河内潟・河内湖の形成を考える上で重要な位置にある。すなわち、縄文時代晩期（滋賀里Ⅲ式）の包含層から淡水性のセタシジミ、縄文時代後・晩期よりも古い層から海水性のエドザクラが出土しており、海水が入り込んだ内湾から潟湖化していく様子がうかがえる。

収録した木器は、弥生前期面で検出した土坑 1・自然河川 2、弥生 I～Ⅱ期の包含層、弥生Ⅴ期の包含層、弥生末～古墳初期の包含層から出土した。弥生前期面では柱列を検出しており、

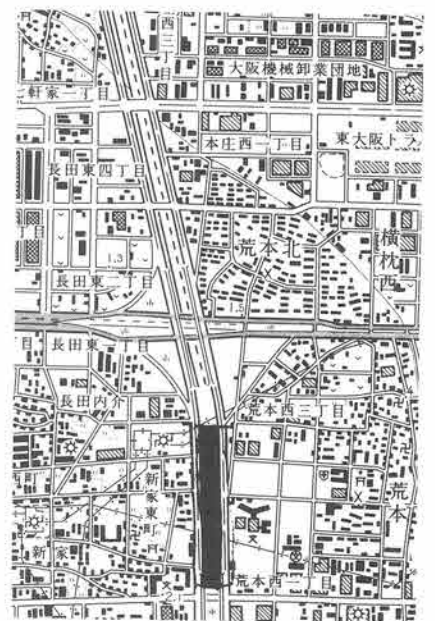


fig. 247 新家遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東北部)

何らかの構造物が推定される。木器が大量に出土した弥生Ⅴ期の包含層は、青灰色系の粘土層で、河内湖の埋積過程で堆積したものと考えられる。農具・漁撈具・武器・容器・祭祀具・建築部材など、多種の木器が出土している。弥生末～古墳時代初頭の包含層は、流水堆積により形成された砂層で、庄内式甕・酒津式甕が共伴する。農具・漁撈具・容器などの木器が出土。

〔木器番号〕 土坑1；12410 自然河川2；18916

弥生Ⅰ～Ⅱ期包含層；10513

弥生Ⅴ期包含層；04104, 08401, 08811, 09002, 12205, 13315,
13402, 13505, 14206, 15002, 15804, 16705,
16803, 17109, 17703, 18410, 18508, 18607,
18608, 18609, 18806, 18808, 19301, 19315,
19507, 19512, 19604, 19701, 19702, 19704,
19907

弥生末～古墳初期包含層；03504, 15001, 18805

〔文 献〕中西靖人・森屋美佐子・他『新家（その1）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1987年

中西靖人・村上年生・他『新家（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1984年

中西靖人・国乗和雄・他『新家（その3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1984年

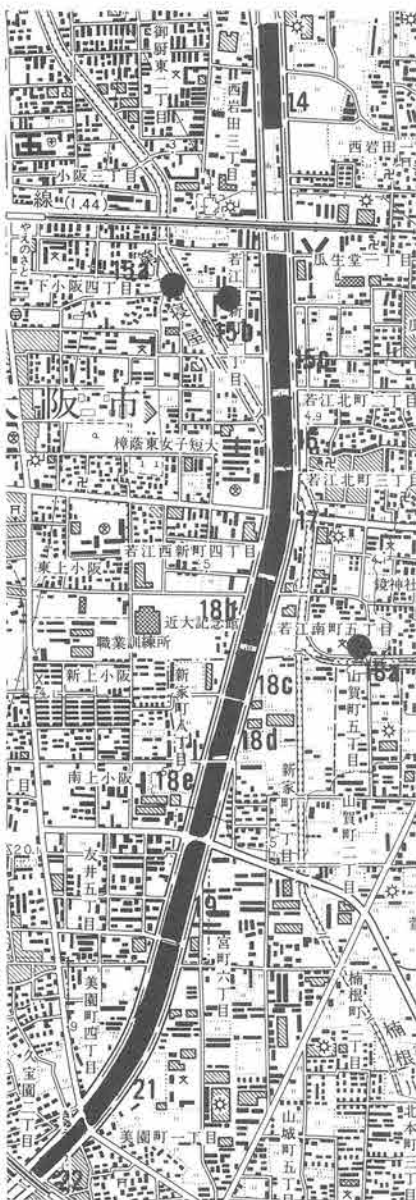


fig. 248 西岩田・瓜生堂・巨摩・若江北・
山賀・友井東・美園・佐堂遺跡
木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)

14 西岩田遺跡 (fig. 248) にいわた

東大阪市西岩田3丁目付近に所在する。1971年の中央南幹線遺跡調査会による発掘調査に際し、庄内式土器と酒津式土器とが共伴したことで学史上著名になる。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い、（財）大阪文化財センターが1979年から1981年にかけて発掘調査を実施。旧河内湖南岸の低湿地に立地し、新家遺跡に南接する。下層において縄文時代後・晩期の遺物が出土しており、縄文時代晩期（滋賀里Ⅲ式）の包含層ではセタシジミが共伴している。

図版に収録した木器が出土したのは、弥生Ⅴ期最終末の包含層と弥生末～古墳時代初頭の溝1・河川・包含層などである。弥生Ⅴ期最終末の包含層は流水堆積により形成された砂層で、畿内第Ⅴ様式の甕とともに工具・農具・漁撈具・容器・祭祀具など多量の木器が出土。庄内式土器に対応する遺構面から切り込んだ溝1は幅2.5m、深さ0.6mで、平面隅丸方形状をなす。庄内式甕・酒津式甕とともに、小型の斧柄・網杵などの木器が出土している。河川Ⅰは幅約50m、深さ2.5mで、東から西へ流れる。川床では足跡や鋤による掘削痕を検出。庄内式・布留式土器とともに曲柄鍬・櫓・部材などの木器が出土した。

〔木器番号〕 弥生Ⅴ期包含層；00203, 00204, 00208, 00304, 02101, 03801,
04303, 04505, 04903, 05111, 06302, 07910,
08812, 09805, 09811, 09813, 09903, 10203,
10207, 10208, 10406, 10407, 10507, 11701,

15503, 16805, 18001, 18503, 18606, 19304,
19308, 19313, 19513, 19514, 19714, 19804,
19909, 20011

Aトレンチ溝1 ; 10611, 12103, 16412, 19708, 20116

Bトレンチ河川I ; 10204, 18306

弥生末～古墳初期包含層 ; 09322, 16104, 18105, 18812

〔文献〕 荻田昭次・藤井直正・他『中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査』中央南幹線内遺跡調査会 1971 年

荻田昭次・北野保・田代克己・他『西岩田遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 年

村上年生・石神幸子・他『西岩田－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983 年

15 瓜生堂遺跡 (fig. 248) うりゅうどう

東大阪市瓜生堂 3 丁目および若江西新町 1 丁目・2 丁目に所在。南に隣接する巨摩遺跡を含めて、旧河内潟湖の南に立地する弥生時代の拠点集落と考えられる。1965 年 2 月から 1989 年 3 月に至るまでに、大阪府教育委員会・東大阪市教育委員会・中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会（瓜生堂遺跡調査会）・(財)大阪文化財センター・河内歴史研究グループなどが、合せて 37 次に及ぶ発掘調査を実施している。収録した木器は、大阪府教育委員会・瓜生堂遺跡調査会・(財)大阪文化財センターの調査時に出土したもの。

〔文献〕 荻田昭次編『瓜生堂遺跡資料』1966 年

荻田昭次・藤井直正・他『瓜生堂遺跡』河内市教育委員会・瓜生堂遺跡調査グループ 1966 年

田代克己・他『瓜生堂遺跡の調査』河内歴史研究グループ 1967 年

大阪府教育委員会『東大阪市瓜生堂遺跡の調査』1967 年

花園高校地歴部「瓜生堂遺跡」『河内古代遺跡の研究』1970 年

田代克己・藤井直正・他『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 年

田代克己・藤井直正・中西靖人・大西真由美・他『瓜生堂遺跡 資料編』瓜生堂遺跡調査会 1972 年

田代克己・藤井直正・中西靖人・他『瓜生堂遺跡Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会 1973 年

田代克己・井藤徹・他『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会 1981 年

堀江門也・中西靖人・他『瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980 年

堀江門也・井藤暁子・他『巨摩・瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1981 年

第Ⅲ章 遺跡解説

a 瓜生堂遺跡 大阪府教育委員会・他 調査

1966年11月～1967年1月に、楠根川（第2寝屋川）改修工事に伴い、大阪府教育委員会などが発掘調査を実施。弥生時代前期から中期の溝・柱根・木棺墓・甕棺墓・貝塚などを検出した。木器が出土したのは、C地点トレンチで検出した溝。幅2.0m、深さ0.5mで、ほぼ南北に走る。畿内第Ⅰ様式を主体とし第Ⅱ様式を若干含む土器や石器・骨角器、植物・動物遺体とともに、鍬・竪杵・琴・高杯未成品・櫛などの木器が出土した。

〔木器番号〕15404, 15904, 19402

〔文献〕大阪府教育委員会『東大阪市瓜生堂遺跡の調査』1967年

花園高校地歴部「瓜生堂遺跡」『河内古代遺跡の研究』1970年

b 瓜生堂遺跡 瓜生堂遺跡調査会 調査

1971年2月～3月に中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会が実施した試掘調査を受けて、瓜生堂遺跡調査会が1971年12月～1972年に行なった下水管渠築造地（瓜生堂遺跡の地区割では3O～P区）の調査、1978年8月～1979年3月に行なった小阪ポンプ場拡張地（同じく5C～D区）およびマンション建設予定地（同じく4I区）の調査などで木器が出土している。検出した遺構には、弥生時代中期を主体とする方形周溝墓群や掘立柱建物群などがあり、木器が出土したのは井戸・溝・ピットおよび各期の遺物包含層である。

5C区の井戸SE02・SE04・溝SD09、5D区の溝、3O区の溝SD26、3P区の溝、4I区のピットSP165・溝SD124・SD134・SD136・SD138は、弥生Ⅲ～Ⅳ期の土器を共伴。井戸SE02は径1.8m、深さ0.8m、SE04は径2.0m、深さ0.8mの素堀りの円形井戸。井戸内の炭化物・灰混り埋土から、直柄又鍬身・組合せ鍬身・アカ取り（SE02）・曲柄又鍬身（SE04）などが出土。SE04と同様の曲柄又鍬身は、近くの木器溜SP24からも3点出土している（fig. 249）。溝SD09は幅4.6m、深さ1.0mで、南から北へ流れる。直柄鍬身が出土。5D区の溝は幅3.3m、深さ0.6mで、合子蓋が出土。溝SD26は肩の一部のみを検出。直柄鍬身と蔓製品が出土。3P区の溝は幅1.3m、深さ0.15mで、北西に流れる。一木鋤が出土。ピットSP165では、組合せ鍬身が出土。溝SD124は幅0.3～1.0m、深さ0.15mで、用途不明品が出土。SD134は幅2.0m、深さ0.6mで、盾が出土。田下駄07401はこの溝上部の包含層から出土し、この溝の遺物かもしれない。溝SD136は幅1.4m、深さ0.5mで、鍬身・鍬柄・高杯・刻みのある用途不明品が出土。溝SD138の木器は収録していないが、盾・鋤などが出土している。

このほか、3P区の大型ピット1では、斧直柄が弥生Ⅱ～Ⅳ期の土器と共伴。弥生Ⅰ期新段階を主体としⅡ期を混えた包含層から一木鋤・鍬・竪杵・横杓子・三脚盤など、弥生Ⅱ～Ⅳ期の包含層から斧直柄未成品・又鍬身・横鍬・腰掛など、弥生Ⅲ～Ⅳ期の包含層から鍬・組合せ鍬身・田下駄・櫓・高杯・四脚合子などが出土している。

〔木器番号〕井戸SE02；02314, 05505, 05702, 10409 井戸SE04；04403

溝SD09；01413

5D区溝；14806

溝SD26；20124

3O区溝；01513

3P区溝；06403

ピットSP165；05503

溝SD124；19618

溝SD134；11705

溝SD136；13219, 19716

大型ピット1；01005

弥生Ⅰ期包含層；01609, 06202, 12504, 14404

弥生Ⅱ～Ⅳ期包含層；00807, 02401, 03506, 17706

弥生Ⅲ～Ⅳ期包含層；01510, 01516, 03603, 05605, 05906, 07401,
07404, 07405, 08201, 13119, 13208, 14808,
19616, 20112

〔文 献〕田代克己・藤井直正・他『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会
1971年

田代克己・藤井直正・中西靖人・大西真由美・他『瓜生堂遺跡 資料編』瓜生堂
遺跡調査会1972年

田代克己・井藤徹・他『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会1981年

c 瓜生堂遺跡 (財)大阪文化財センター 調査

近畿自動車道天理～吹田線の建設工事に伴い、(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。
道路予定地に沿って、北からA～Hのトレンチを設定した。なお、ほぼ平行して調査を進めた
巨摩遺跡は、瓜生堂遺跡の南端をも含むが、この成果は『巨摩・瓜生堂』として別途報告した。
木器は弥生時代中期を主体とする各種の遺構や包含層から出土している。

A地区の土坑3・263, 溝15, 第1・2号方形周溝墓間の溝, B地区の土坑41・43・125・270,
溝19・29・31, 第9号方形周溝墓盛土, C地区の溝78, 第11号方形周溝墓西裾の土坑2, D
地区の第21号方形周溝墓に伴う第1号土坑, 第21号方形周溝墓の周溝, E地区の溝115は,
弥生時代中期の遺構面で検出し、主に弥生Ⅲ～Ⅳ期の土器を共伴。土坑3は長径1.3m, 短径
1.2mで、竪杵が出土。土坑263は第4号方形周溝墓北裾にあり、長さ1.6m, 幅0.75m, 深さ
0.2mの隅丸方形を呈する。櫓が出土した。溝15は幅0.3m, 深さ0.2mで、横杓子が出土。第
1・2号方形周溝墓間の溝は幅3.5m, 深さ0.7m。A地区は4基の方形周溝墓があり、その周
溝から一木鋤・組合せ鋤が計6本出土している。土坑41は径1.0mの不整円形を呈し、鍬・又
鍬が出土。土坑43は長さ3m以上で、用途不明品が出土。土坑125は長さ2.1m, 幅1.5m, 深
さ0.8mで、鍬が出土。井戸かもしれない。土坑270は長さ4.5m, 幅4.0m, 深さ0.8mで鍬未
成品・竪杵が出土。溝19は幅6.0m, 深さ1.4mで、上層から又鋤が出土。溝29は幅3.0m, 深
さ0.4mで、高杯・建築部材が出土。溝31は第5号方形周溝墓の下層にあり、幅3.0m, 深さ
0.2mで、鍬が出土。溝78は幅1.9m, 深さ0.35mで、小型臼が出土。第11号方形周溝墓西裾
の土坑2は南北長2.6m, 東西幅0.7mの長楕円形を呈する。一木鋤が出土。第21号方形周溝
墓の東北周溝東端にある第1号土坑は径2.5m, 深さ0.4mで、アカ取りが出土。第22号方形
周溝墓の西南周溝(第21号方形周溝墓の東北周溝)からは、又鍬・織機・櫓・剣鞘・匙形木
器・部材などが出土。溝115は幅6.0m, 深さ1.4mのV字溝。横鍬・部材などが出土した。

弥生時代後期(V期)の木器が出土した遺構は、A区の河川7, B区の河川3・8。河川7
は中世に削平を受けているが幅10m以上。河川3は幅約12mで、背負子・腰掛脚が出土。河
川8は幅約20mで、剣把が出土。このほか、弥生Ⅰ～Ⅱ期の包含層から弓, 弥生Ⅲ～Ⅳの包
含層から鍬・竪杵・鳥形など、弥生V期の包含層から斧膝柄・鍬・アカ取り・盤・鳥形など,
弥生V期～古墳初期の包含層から鍬・横鍬・横槌・剣鞘・机脚などが出土している。

〔木器番号〕土坑3；08707 土坑263；08203 溝15；12401

第1・2号方形周溝墓間の溝；05707, 07012 土坑41；01806, 02312

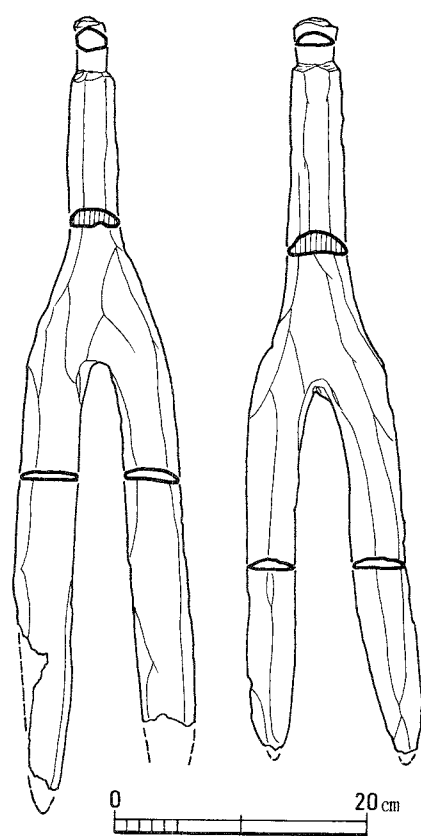


fig. 249 瓜生堂遺跡 SP24 出土
曲柄又鍬身(弥生Ⅳ期)

土坑43；20103 土坑125；01512 土坑270；08801
溝19；07006 溝29；13210 溝31；02407, 07409
9号方形周溝墓盛土内；19711 溝78；08514
第11号方形周溝墓西裾の土坑2；06506
第21号方形周溝墓の第1号土坑；10411
溝115；03403, 09716, 19608
第22号方形周溝墓の周溝；02304, 09706, 10107, 11413, 12207, 18416
河川7；19903 河川3；09812, 17808 河川8；11307
弥生Ⅰ～Ⅱ期包含層；11106
弥生Ⅲ～Ⅳ期包含層；01809, 08708, 16606
弥生Ⅴ期包含層；00318, 01810, 05314, 10401, 14506, 16501,
19305
弥生Ⅴ期～古墳初期包含層；02008
弥生末～古墳初期包含層；03406, 09121, 11410, 14403, 17401
〔文献〕堀江門也・中西靖人・他『瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文
化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980
年

16 巨摩遺跡 (fig. 248) こま

東大阪市若江西新町2丁目・3丁目に所在。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い、1978年11月～1980年12月に(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施した。瓜生堂遺跡の南に隣接する弥生時代中期から中世に至る集落遺跡。検出した主な遺跡には、弥生時代中期の建物跡・方形周溝墓6基（主体部は木棺と土器棺）・土坑・溝、弥生時代後期の河川・足跡・沼状遺構・方形周溝墓3基（主体部は木棺）・木棺墓、古墳時代前期の水田（上下2面）・河川、古墳時代中期の方墳（形象埴輪・円筒埴輪・埴輪棺が出土）、中世の掘立柱建物10棟・井戸（曲物・羽釜組）・溝などがある。収録した木器は、弥生時代中期の溝33、中期～後期の沼状遺構、後期の包含層、古墳時代前期の水田Ⅰから出土したものである。

溝33は幅1.5m、深さ1.0mで、渦文を陰刻した四脚台が出土。沼状遺構は上下の2層に分かれ、下層は弥生Ⅳ期末、上層は弥生Ⅴ期初頭に属する。下層から斧膝柄・楔・田下駄・櫓・簪・琴など、上層から斧直柄・穂摘具・竪杵・横槌・弓・横杓子・刀形・把手・部材などが出土した。弥生Ⅴ期の包含層からは竪杵・縦櫓・杓子形木器、水田面Ⅰ（庄内式土器を伴う）からは曲柄又鍬・自在鉤・腰掛脚が出土している。

〔木器番号〕溝33；12819 水田面Ⅰ；04810, 17312, 18006

沼状遺構下層；00112, 01118, 07407, 08012, 12025, 15805, 18401,
19811

沼状遺構上層；01003, 07804, 07810, 09004, 09219, 09222, 09223,
11010, 11011, 12510, 16110, 17308, 18615, 19309,
19312

弥生Ⅴ期包含層；08802, 12006, 12213

〔文献〕堀江門也・井藤暁子・他『巨摩・瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
1981年

17 若江北遺跡 (fig. 248) わかえきた

東大阪市若江西新町3丁目・4丁目に所在する弥生時代前期から近世に至る複合遺跡。巨摩遺跡に南接し、1979年6月～1982年7月に近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い、(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。その後、1982年7月～1983年4月にかけて、巨摩遺跡と合せて追加調査を行なった。検出した主な遺跡には、弥生時代前期の水田、中期の建物・井戸・土坑・溝、弥生時代後期および古墳時代前期の水田・河川・土坑などがある。

収録した木器は弥生時代中期(ⅡおよびⅣ期)の包含層、弥生Ⅳ期の溝S D 550、弥生Ⅴ期の自然河川S D 627・土坑S K 611、庄内式土器併行期の水田畦畔S C 701から出土した。溝S D 550は幅2.2m、深さ0.6mで、斧膝柄などが出土。自然河川S D 627は西あるいは北西に流れる。一木鋤・横槌・簪などが出土。土坑S K 611からは木錘、畦畔S C 701からは槽・腰掛脚などが出土している。

〔木器番号〕弥生Ⅱ期包含層；10831 弥生Ⅳ期包含層；02001

溝S D 550；00403 土坑S K 611；09306

自然河川S D 627；06507, 09003, 09105, 12022

畦畔S C 701；14103, 17907

〔文献〕中井貞男・尾上実・他『若江北―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1983年
尾上実・岸本道昭・他『巨摩・若江北(その2)―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1984年

18 山賀遺跡 (fig. 248) やまが

東大阪市若江南町4丁目・5丁目、八尾市新家町3丁目～5丁目に所在。1971年の楠根川(第2寝屋川)改修工事に際して発見され、1972年に大阪府教育委員会、1978年に東大阪市教育委員会、1979年～1985年に(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。縄文時代晩期から近現代に至る各種の遺物・遺構を検出した。主体となるのは弥生時代前期の集落・水田で、ほかに弥生時代中・後期の水田・集落・墓、古墳時代中・後期の古墳などがある。

収録した木器は、東大阪市教育委員会および(財)大阪文化財センターの調査時に出土したもの。(財)大阪文化財センター調査分に関しては、出土遺構が多岐にわたるため、報告書の分冊に従って、YMG 1(その1)～YMG 5・6(その5・6)に分けて記述する。

〔文献〕杉本二郎・他『山賀(その1)―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1983年
中西靖人・森井貞雄・他『山賀(その2)―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1983年

西口陽一・上西美佐子・他『山賀(その3)―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財セン

ター 1984 年

中西靖人・石神幸子・他『山賀（その4）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

1983 年

田中和弘・岸本道昭・他『山賀（その5・6）（河内平野における初期農耕遺跡の調査）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』

大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1986 年

a 山賀遺跡 東大阪市教育委員会 調査

東大阪市若江南町5丁目337番地において、市立若江中学校新設工事に伴い1978年10月～12月に発掘調査を実施。1,500㎡の調査地の東南部で検出した遺物包含層から、弥生Ⅰ期新段階を主体とし中段階を混えた土器とともに木器が出土した。遺構は検出しておらず、地山が高まる部分（約200㎡）にのみ遺物包含層が堆積。隣接地の調査では、この包含層を検出していないが、南東約100mの地点で同様の小規模な堆積を認めた。出土した木器には、鋤身未成品・鋤身・腕輪・縦杓子・杓子未成品・網杵・簀などがある。なお、上層で弥生末～古墳初期および古墳前期の井戸（素掘りと板杵組の円形井戸）と土坑を検出している。

〔木器番号〕02701, 10705, 10820, 12017, 12707, 15504, 20023

b 山賀遺跡（財）大阪文化財センター 調査（YMG1）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い1979年～1983年に実施した山賀遺跡の発掘は、道路予定地に沿った調査地を4地区に分け、北から各々YMG1（その1）、YMG2（その2）、YMG3（その3）、YMG4（その4）とした。その後、山賀インター建設に伴い1983年～1985年に追加調査を行なったのがYMG5・6（その5・6）である。

1979年12月～1983年1月に実施した（その1）調査区では、縄文時代晩期の河川、弥生時代前期～中期初頭の水田、弥生時代後期の河川とこれに伴う祭祀遺構や堰・橋、奈良・平安時代以降の畦畔やピット・土坑群・溝・井戸を検出した。収録した木器は、弥生Ⅰ期以前の包含層（Bトレンチ黒色粘土上面）から出土した楔と、弥生Ⅴ期に埋没した河川の上面（Bトレンチ粗砂上面）から出土した竪杵である。このほか弥生Ⅴ期の河川に伴う堰・橋に用いた部材や杭が大量に出土している。

〔木器番号〕黒色粘土上面；01122 粗砂上面；08903

〔文献〕杉本二郎・他『山賀（その1）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1983 年

c 山賀遺跡（財）大阪文化財センター 調査（YMG2）

1979年12月～1982年5月に実施した（その2）調査区では、縄文時代晩期の河川、弥生時代前期の環濠・溝・土坑・ピット群、弥生時代中期の水田・方形周溝墓、弥生時代後期の水田・溝・河川、古墳時代前期～奈良時代の掘立柱建物・古墳・土坑、中世の溝・土坑、近世～現代の水田・井戸を検出している。収録した木器は、弥生Ⅰ期の溝6・溝3、弥生Ⅱ期の第1号方形周溝墓北溝、弥生Ⅱ期の包含層、弥生Ⅴ期の溝2などから出土した。

溝6は弥生Ⅰ期中段階～新段階に属し、幅4.5m、深さ1.3mで、断面逆台形を呈する。木針・

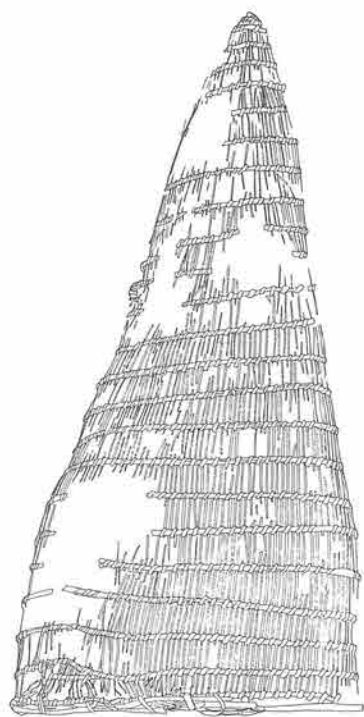


fig. 250 山賀遺跡（YMG3）釜出土状態（約8分の1）

鍬身・簀・鳥形・部材などが出土。溝3は環濠を構成する8条の南北溝のひとつで、簀が出土。北周溝から斧直柄が出土した第1号方形周溝墓は、南北7.6m、東西7.2mで、中央主体は木棺。弥生後期Ⅰ遺構面で検出した溝2は、幅1.6m、深さ0.35mのV字溝で泥除が出土した。

〔木器番号〕 溝6 ; 01108, 01407, 16604

溝3 ; 10813, 10822

溝2 ; 03816

第1号方形周溝墓北溝 ; 01002

弥生Ⅱ期包含層 ; 11522, 12807, 20121

〔文 献〕 中西靖人・森井貞雄・他『山賀（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1983年

d 山賀遺跡（財）大阪文化財センター 調査（YMG3）

1980年1月～1982年11月に実施した（その3）調査区では、縄文時代晩期の河川とその河床や浅瀬に残る足跡群、弥生Ⅰ期の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・河川、弥生Ⅱ期の方形周溝墓・木棺墓・土坑・溝・河川、弥生Ⅲ～Ⅳ期の掘立柱建物・木棺墓・壺棺墓・甕棺墓・井戸・土坑・溝、古墳時代後期～飛鳥時代の河川などを検出した。収録した木器は、縄文時代晩期の河川4、弥生Ⅰ期中段階の河川7・溝14・溝24・井戸2・井戸7・土坑11・土器群、弥生Ⅰ期新段階の溝51・溝52・溝57および包含層、弥生Ⅰ～Ⅱ期の溝42、弥生Ⅱ期の河川22および包含層、弥生Ⅲ～Ⅳ期の包含層、7世紀初頭の河川35から出土した。

河川4は幅10m以上、深さは完掘できず不明。木器（鉢・杭）と滋賀里Ⅰ式などの土器が共伴。河川7は幅約20m、深さ1.6mで、鍬未成品・弓・高杯などの木器が出土。ほかに釜（fig. 250・251）が完形で出土したが消失。溝14は掘立柱建物群内を走り、幅2.4m、深さ0.15m。縦杓子未成品が出土。溝24は幅3.2m、深さ0.4mで、朱塗りの堅杓が出土。井戸2は長径2.0m、短径1.4m、深さ1.3mの楕円形を呈し、鍬・高杯が出土。井戸7は2.2×2.4mの隅丸方形を呈し、泥除が出土。土坑11は径2.0×1.6mの不整楕円形で、鍬未成品が出土。溝51は幅2.4m、深さ0.6mで、簀が出土。溝52は幅3.0m、深さ0.6mで、鍬が出土。溝57は幅3.3m、深さ0.7mで、完形の高杯が出土。溝42は幅2.5m、深さ0.3mで、簀が出土。河川22は幅22m、深さ1.0mで、弓が出土。河川35は幅4.5m、深さ0.8mで、鋤・斎串・槽が須恵器・土師器とともに出土している。

〔木器番号〕 河川4 ; 12903, 19311

河川7 ; 03001, 11103, 11107, 13003, 13217

溝14 ; 12701

溝24 ; 08609

井戸2 ; 13009

井戸7 ; 03708

土坑11 ; 02703

土器群 ; 00704, 00709, 08521

溝51 ; 10824

溝52 ; 01414

溝57 ; 13101

溝42 ; 10832

弥生Ⅰ期包含層 ; 01501, 06103, 10804, 10829, 10833, 12021, 14911

弥生Ⅱ期包含層 ; 14709, 14904, 18802

弥生Ⅲ～Ⅳ期包含層 ; 11119

河川22 ; 10910

河川35 ; 16409

〔文 献〕 西口陽一・上西美佐子・他『山賀（その3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に

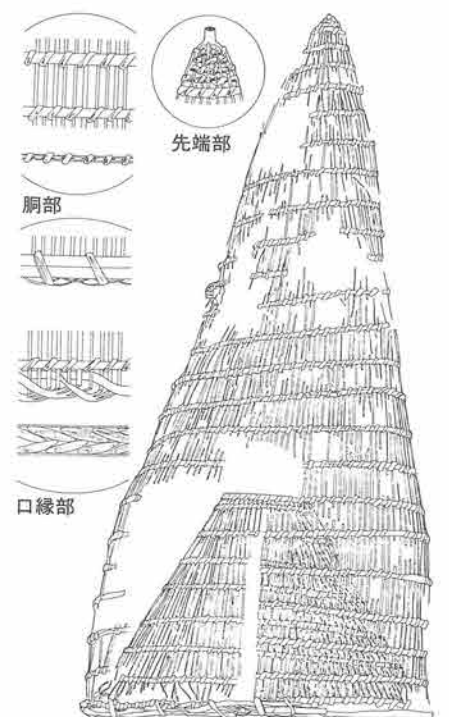


fig. 251 山賀遺跡（YMG3）釜構造
模式図（約8分の1）

第Ⅲ章 遺跡解説

伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年

e 山賀遺跡 (財)大阪文化財センター 調査 (YMG 4)

1980 年 2 月～1982 年 6 月に実施した(その 4)調査区では、縄文時代晩期の河川、弥生時代前期の溝・河川、弥生時代中期および後期の水田・河川、古墳時代後期の河川、平安時代の土坑、中世の水田、近世・近代の水田・井戸などを検出した。収録した木器が出土したのは、縄文時代晩期の河川 3、弥生Ⅱ期の水田耕土およびその上を覆う流水堆積層、弥生Ⅴ期の水田面を覆う流水堆積層である。

〔木器番号〕 河川 3 ; 19306 弥生Ⅱ期水田耕土層 ; 10828
弥生Ⅱ期流水堆積層 ; 12708 弥生Ⅴ期流水堆積層 ; 01008

〔文献〕 中西靖人・石神幸子・他『山賀(その 4)ー近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983 年

f 山賀遺跡 (財)大阪文化財センター 調査 (YMG 5・6)

1983 年 6 月～1985 年 6 月に実施した(その 5・6)調査は、(その 1)～(その 4)調査区の周囲に大小の調査区 38ヶ所を設け、従前の調査成果を再確認するとともに、遺構のひろがりなどに関する新知見をもたらした。収録した木器は、弥生Ⅰ期の溝 2、弥生Ⅰ～Ⅱ期の溝 6・道状遺構・包含層などから出土したもの。溝 2 は幅 2.0m、深さ 0.5m で、一木鋤が出土。溝 6 は幅 2 m、深さ 0.7m で、箆が出土。道状遺構は幅 4.0m、高さ 0.4m の帯状の土盛りで、箆が出土した。

〔木器番号〕 溝 2 ; 06105 溝 6 ; 10819
道状遺構 ; 10821 弥生Ⅰ～Ⅱ期包含層 ; 10826, 10827

〔文献〕 田中和弘・岸本道昭・他『山賀(その 5・6)(河内平野における初期農耕遺跡の調査)ー近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 年

19 友井東遺跡 (fig. 248) ともいひがし

東大阪市友井、八尾市新家町 7 丁目に所在。山賀遺跡の南、美園遺跡の北に位置する弥生時代から近代に至る複合遺跡。1963 年の金物団地造成工事中に発見され、1973 年に範囲確認などを目的に(財)大阪文化財センターが試掘調査を実施。さらに、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い、1979 年 6 月～1981 年 12 月に(その 1)調査、1982 年 6 月～1983 年 5 月に(その 2)調査を行なった。検出した遺構には、弥生時代前期の河川・大溝、中期初頭の水田、中期～後期の河川と小規模な溝、古墳時代の柱穴や溝、古墳時代後期の水田、奈良～平安時代の条里遺構などがある。

収録した木器は、(その 2)調査で検出した弥生時代前期の大溝および古墳時代前期の自然堆積層から出土。弥生時代前期の大溝(B トレンチ第 16 層溝)は幅 3.4m、深さ 0.6m で、一木鋤・箆などの木器が弥生Ⅰ期の壺・石器と共伴。田下駄(大足)が出土した自然堆積層(1 A トレンチ第 9 層)では、庄内～布留期初頭の土師器小片が共伴した。

〔木器番号〕第16層溝；06104 第9層；07601

〔文 献〕中井貞夫・井藤暁子・他『友井東（その1）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1984年

中西靖人・上西美佐子・他『友井東（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1983年

20 池島遺跡 (fig. 252) いけしま

東大阪市池島町，八尾市福万寺町に所在。恩智川治水緑地建設に伴い，大阪府教育委員会が1982年より発掘調査を継続している。河内平野を北流する玉櫛川が形成した自然堤防と生駒山地からの扇状地とにはさまれた低湿地に立地。周辺には条里地割が良好に遺存し，その中央部を条里地割に沿って恩智川が北流する。土地条件図によれば，調査区の南西に北西方向にのびる自然堤防が見られる。既往の調査では，洪水砂層の上につくられた弥生前期末以降の小区画水田とこれを切って流れる弥生中期の大溝，6世紀代の玉造り関係遺物，中近世の条里遺構などを検出している。

収録した木器は1983年3月に実施した試掘調査のAトレンチ，現地表下の4.5mの砂層（流路？）から出土。砂層からは弥生土器片40点が出土。後期の土器は1点も含まず，櫛描文をもつ壺体部の破片数点を含む。この砂層は上記の弥生中期の大溝につながるとされる。

〔木器番号〕05501

〔文 献〕大野薫・阪田育功『池島遺跡試掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会 1983年

21 美園遺跡 (fig. 248) みその

八尾市美園町1丁目から4丁目にかけて所在。1975年に発見され，1980年9月に（財）大阪文化財センターが試掘調査を実施。南北約600mの範囲で，弥生時代から近世に至る各期の包含層を確認。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い，1980年12月～1984年3月に本格的調査を行なった。検出した主な遺構には，弥生Ⅰ～Ⅱ期の竪穴住居・掘立柱建物・水田・土坑・溝・河川，弥生Ⅲ期の木棺墓・土坑・溝，庄内式期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・水田・土坑・溝，布留式期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土器棺墓・方形周溝墓・水田・畠，家形・壺形埴輪を伴う4世期末の古墳，5世紀の水田などがある。

収録した木器は弥生Ⅰ～Ⅱ期の土坑B S K 218・溝B S D 220，庄内期の井戸D S E 201・土坑D S K 306，古墳時代中期の落ち込みG S X 307などから出土。B S K 218は南北幅3.0m，深さ0.3m。鍬身および広葉樹の樹皮を引伸ばして楕円形に切り抜いた用途不明品が出土している。B S D 220は幅3.5m，深さ0.35mの南北溝で，弓などが出土。D S E 201は径1.4×1.2m，深さ0.8mの不整円形を呈し，斧膝柄などが出土。D S K 306は径3.9×3.2m，深さ0.8mの楕円形を呈し，鍬・曲柄鍬・木錘などが出土した。

〔木器番号〕土坑B S K 218；01404 溝B S D 220；11012

井戸D S E 201；00410 土坑D S K 306；02106, 04503, 09321

落ち込みG S X 307；16304 弥生包含層；19904

〔文 献〕渡辺昌宏・井藤暁子・他『美園－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化

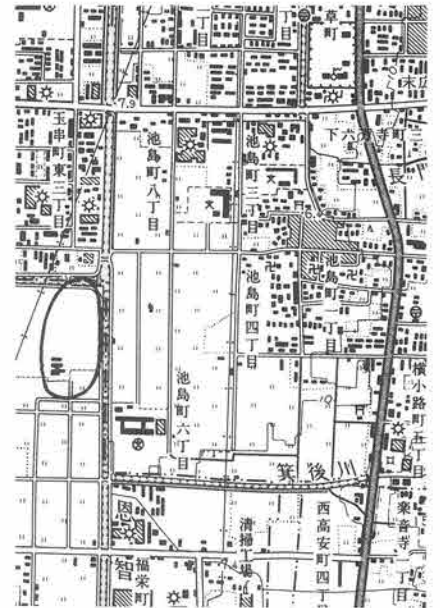


fig. 252 池島遺跡木器出土地点
(1:25,000 信貴山)

財発掘調査概要報告書ー』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1985 年

22 佐堂遺跡 (fig. 248) さどう

東大阪市金岡 4 丁目から八尾市佐堂町 3 丁目にかけて所在。近畿自動車道天理～吹田線の建設に伴い、(財)大阪文化財センターが 1981 年 3 月～1984 年 3 月に(その 1)調査区、1981 年 3 月～1983 年 5 月に(その 2)ーⅠ調査区の発掘調査を実施し、後者に関しては 1983 年 4 月～1984 年 10 月に橋脚部を(その 2)ーⅡ調査区として追加調査した。検出した主な遺構には、縄文時代晩期の河川、弥生時代中期の水田・溝、後期の河川、古墳時代前期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝・土坑、古墳時代中・後期の水田、飛鳥・奈良・平安時代の土器棺・水田・溝・河川、中世の掘立柱建物・井戸・土坑・水田・溝・河川などがある。収録した木器(横槌)は、(その 1)調査区の水田面上の古墳時代中期の包含層から出土した。

〔木器番号〕 09217

〔文 献〕三宅正浩・他『佐堂(その 1)ー近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書ー』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年
中井貞夫・阪田育功・他『佐堂(その 2)ーⅠー近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書ー』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年
中西靖人・森尾直樹・他『佐堂(その 2)ーⅡ・他ー近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書ー』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1985 年

23 東郷遺跡 (fig. 253) とうごう

八尾市光町・北本町を中心に所在。1981 年に北本町 2 丁目のビル建設に伴い八尾市教育委員会が発掘調査を実施。旧大和川流域の河内平野沖積地に立地する。弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑や方形周溝墓を検出した。南には中田遺跡・小阪合遺跡、北には萱振遺跡など同時期の集落遺跡が密集して存在する。

収録した木器は弥生時代末～古墳時代初頭の井戸 S E 03 から出土した。径 3 m、深さ 0.9 m の素堀りの井戸で、木錘はその下層から 3 個体出土している。庄内式甕や複合口縁壺が共伴。

〔木器番号〕 09318

〔文 献〕高萩千秋・高木真光・他「東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981 年度』八尾市教育委員会 1983 年

24 中田遺跡 (fig. 254) なかだ

八尾市中田・八尾木・刑部にひろがる弥生時代中期から中世に至る集落遺跡。1970 年の区画整理事業で発見され、以後、中田遺跡調査会・大阪府教育委員会などが発掘調査を実施。旧大和川水系の長瀬川と玉串川にはさまれた河内平野沖積地に立地する。検出した遺構には、弥生時代中・後期の土坑・自然流路、古墳時代初頭の堰、古墳～平安時代の建物・井戸・土坑などがある。南には弓削宮跡に推定されている東弓削遺跡がある。収録した木器は中田遺跡調査会および大阪府教育委員会の調査時に出土したもの。

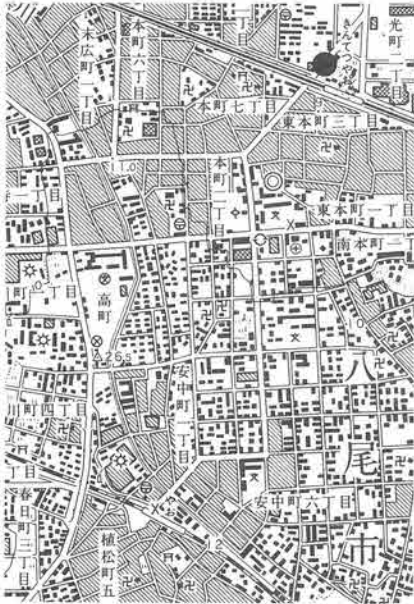


fig. 253 東郷遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)



fig. 254 中田遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)

a 中田遺跡 中田遺跡調査会 調査

八尾市中田1丁目～4丁目に所在。1972年～1973年の土地区画整理に伴い発掘調査を実施。収録した木器は古墳時代中期の2号井戸から出土。この井戸は板材を矩形に組合せて井戸枠にしており、把手付槽はその枠材の一部に転用されていた。

〔木器番号〕14003

〔文献〕吉岡哲「市内の弥生遺跡とそれ以降の遺跡(14) 中田遺跡」『八尾市史(前近代) 本文編』八尾市役所1988年
山本昭・米田敏幸「中田遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究会資料1983年

b 中田遺跡 大阪府教育委員会 調査

柏原・八尾幹線下水管渠築造に伴い、1985年7月～8月に八尾市中田1丁目から八尾木北5丁目において発掘調査を実施。収録した木鎌は、弥生時代末期から古墳時代初頭の土坑SX01から出土。SX01は長さ2.5m、幅1.5m、深さ0.45m。北東壁を杭と矢板で土留めしており、井戸のような性格も想定できる。約50個体におよぶ土器、横杓子・朱塗り盤などの木器が共伴。木鎌は最下層から3つに折れて出土した。

〔木器番号〕07914

〔文献〕福田英人『中田遺跡発掘調査概要―柏原・八尾幹線下水管渠築造工事に伴う調査―』大阪府教育委員会1986年

25 久宝寺遺跡 (fig. 255) きゅうほうじ

八尾市西久宝寺を中心として、北は東大阪市大蓮東、南は大阪市加美東から八尾市神武町におよぶ広大な地域にまたがる。西に接する大阪市域は加美遺跡として調査され、共通性の強い遺構群が明らかになっている。1935年の道路工事中に発見され、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。調査区域が長大なため南北2地区に分けて、北地区は1980年12月～1984年8月、南地区の(その1)調査区は1982年7月～1985年3月、(その2)調査区は1982年7月～1985年6月の間に調査を行ない、さらに南(その2)調査区における未調査部分を1985年7月～1986年1月に(その3)として追加調査した。検出した主な遺構には、縄文時代の河川、弥生時代前期の土坑・溝・河川、中期の掘立柱建物・方形周溝墓・土坑・溝・水田・河川、後期の建物・木棺墓・土坑・溝・水田・河川、弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居・掘立柱建物・周溝墓・壺棺墓・土坑・溝・水田・河川、飛鳥～平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・水田・河川などがある。

図版に収録した木器は、南(その2)調査区における弥生末～古墳初期の溝SD46および北地区における古墳時代前期の水田畦畔ST4001から出土した。溝SD46は溝SD45から分岐した小溝で、船材が出土。溝SD45は幅6.4m、深さ1.5mの大規模な溝で、人為的な運河と思われる。層位的対応から船材は庄内期新段階に相当する。水田畦畔ST4001からは腰掛が出土。巨摩遺跡出土の椅子形埴輪に似ている。

〔木器番号〕溝SD46; 10002, 10004 畦畔ST4001; 17803

〔文献〕赤木克視・松岡良憲・今村道雄・他『久宝寺南(その1)―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』大阪府教育委員会・(財)大



fig. 255 久宝寺遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)

阪文化財センター 1987 年

一瀬和夫・赤木克視・他『久宝寺南（その 2）－久宝寺・加美遺跡の調査－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1987 年

枡本哲・赤木克視『久宝寺南（その 3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1986 年

中西靖人・寺川史郎・金光正裕・山口誠治・他『久宝寺北（その 1～3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1987 年

26 亀井北遺跡 (fig. 256) かめいきた

大阪市平野区加美南から八尾市北亀井町にかけて所在。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い（財）大阪文化財センターが1984年3月～1986年に発掘調査を実施。北に久宝寺遺跡・加美遺跡、南に亀井遺跡が隣接し、当遺跡の範囲は南北約600mをはかる。調査は北から（その1）（その2）（その3）調査区に3分し、ほぼ併行して進めた。検出した主な遺構には、縄文時代後期の河川、弥生時代前期の土坑・ピット・溝、中期の溝・河川、後期の水田・溝・河川と土堤、古墳時代前期の建物・方形周溝墓・土器集積・土坑・溝・水田、古墳時代中・後期の水田・溝などがある。

収録した木器は、（その1）調査区における古墳時代前期の土坑 S K 8014 および包含層、（その2）調査区の弥生時代中期の溝（第 XⅦ層 S D 01）・弥生時代後期の河川（第 XⅤ層自然流路 01）・古墳時代前期の土坑 S K 10 と S K 13 および溝（第 XⅠ層溝 S K 01）、（その3）調査区の弥生時代後期の河川（自然流路 N R 3201）から出土した。土坑 S K 8014 は推定径 0.6m 以上、深さ 0.6m で、糸巻き状の用途不明品が出土。第 XⅦ層溝 S K 01 は幅 3.5m、深さ 0.3m の南北溝で、鋤未成品・竪杵が出土。第 XⅤ層自然流路 01 は推定幅約 19m で、南から北へ流れ、西に土堤を設けている。穂摘具・竪杵・高杯未成品などが出土。土坑 S K 10・S K 13 は、いずれも径 1.1m 以上の円形を呈し、部材が出土。第 XⅠ層溝 S D 01 は幅 2.0m、深さ 0.65m で、直柄横鋤が出土。自然流路 N R 3201 は幅約 20m で、南東から北西に流れる。きわめて写実的な鳥形が出土。

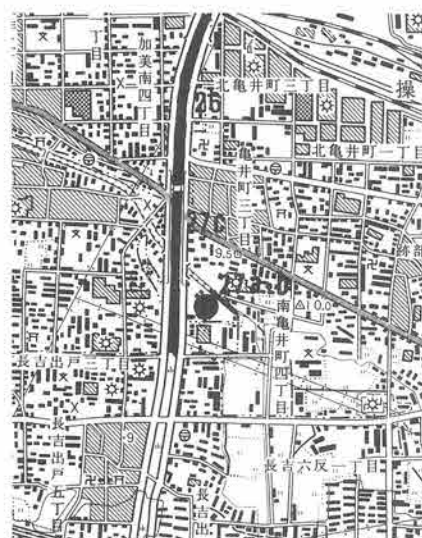


fig. 256 亀井北・亀井遺跡木器出土地点

〔木器番号〕土坑 S K 8014 ; 20127

（その 1）調査区包含層 ; 06402

第 XⅦ層溝 S D 01 ; 02604

第 XⅤ層自然流路 01 ; 07817, 15408

土坑 S K 10 ; 18721

土坑 S K 13 ; 18920

第 XⅠ層溝 S D 01 ; 03502

自然流路 N R 3201 ; 16516

〔文献〕小野久隆・服部文章・他『亀井北（その 1）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1986 年

奥和之・山上弘・他『亀井北（その 2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1986 年

大楽康宏・竹原伸次・他『亀井北（その 3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に

伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
1986年

27 亀井遺跡 (fig. 256) かめい

八尾市亀井町・南亀井町・竹淵町にかけて所在する弥生時代中・後期を中心とした集落遺跡。1968年の平野川改修工事で発見され、大阪府教育委員会などが数次の範囲確認調査を行ない、東西・南北とも500mほどの広がりをも推定。河内平野の南端、かつての「古平野川」と「古東除川」が形成した埋没自然堤防上とその後背湿地に立地する。収録した木器は(財)大阪文化財センターが行なった長吉ポンプ場築造工事・平野川河川改修工事・近畿自動車道建設工事に伴う発掘調査で出土したもの。出土した遺構が各期・各種にわたるので、以下報告書に従って3項目に分けて記述する。

〔文献〕大阪府教育委員会『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』1971年

大阪府教育委員会『亀井遺跡発掘調査概要Ⅱ』1972年

大阪府教育委員会『亀井遺跡発掘調査概要Ⅲ』1973年

(財)大阪文化財センター『近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書』1974年

a 亀井遺跡 長吉ポンプ場築造工事関連 調査 (KM-P区)

寝屋川南部流域下水道事業の一環である八尾市南亀井町3丁目における長吉ポンプ場築造工事に伴い、(財)大阪文化財センターが1977年に試掘調査、1978年5月～1980年3月に発掘調査を実施。弥生時代前期の溝、中期の柱穴・井戸・土坑・溝や甕棺・木棺・土坑墓、後期の井戸・土坑・溝・河川、古墳時代中期の古墳・堤・水田およびそれ以降に形成された沼沢地などを検出した。収録した木器は弥生時代中期の溝S D3001・S D3004・S D3023・S D3031・S D3040、井戸S E3001、土坑S K3041、弥生時代後期の溝S D3033、古墳時代中期の古墳(亀井古墳)の2号主体、堤西側の杭列と沼沢地S X4001から出土した。

弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の溝S D3001は幅3.5m、深さ0.8mの南北溝で、鍬身・弓・梯子が出土。弥生Ⅲ期古段階の溝S D3004は幅1.0m、深さ0.6mの2段掘りの東西溝で、鍬身・籠が出土。弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の溝S D3023は幅4.2m、深さ1.7mで、竪杵・弓・有孔円板・蓋・腰掛座板・梯子などが出土。弥生Ⅲ期の溝S D3031は幅2.2m、深さ0.6mで、一本鋤が出土。弥生Ⅲ～Ⅳ期の溝S D3040は幅2.0m、深さ0.6mで、一木又鋤・四脚合子が出土。弥生Ⅳ期の井戸S E3001は長径3.0m、短径2.4m、深さ1.0mの楕円形を呈し、内部長軸線上に杭を打ち込み横木をそえている。匙未成品が出土。弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の土坑S K3041は3.7×1.0m、深さ1.0mの隅丸方形を呈し、土器・炭化玄米・藁などとともに横杓子未成品が出土。溝S D3033は幅5.4m、深さ2.4mの東西溝で、鍬身・一本鋤・横槌が出土。亀井古墳は一辺7mの方墳で、2基の木棺を直葬。2号主体の棺内には刀・短甲・草摺・肩甲・頸甲・冑など、棺外には靱が副葬され、収録した縦櫛は棺上にあった。亀井古墳の南にある堤は自然木・転用材・草などで補強した大規模なもの。その西側の旧河川を掘り込んだ窪地S X4001は、後に沼沢地化して平安時代まで残る。堤を補強した杭列内の転用材として琴が、S X4001から田下駄縦杵・部材が出土している。

〔木器番号〕溝S D3001; 01708

溝S D3004; 01907

溝 S D3031 ; 07104

溝 S D3023 ; 08709, 10911, 10912, 12020, 15003

溝 S D3040 ; 07007, 14708 井戸 S E3001 ; 12308

土坑 S K3041 ; 12503 溝 S D3033 ; 06301

亀井古墳 2 号主体 ; 12009 堤西側杭列 ; 15902

沼沢地 S X4001 ; 07605, 18605

〔文 献〕 高島徹・広瀬雅信・他『亀井・城山ー寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980 年

b 亀井遺跡 平野川河川改修工事関連 調査 (KM-H 区)

前述した長吉ポンプ場の付属施設築造工事および平野川河川改修工事に伴い、(財)大阪文化財センターが 1980 年 6 月～1981 年 10 月に発掘調査を実施。弥生時代中期の柱穴・溝・土坑・井戸・方形周溝墓、後期の溝・土坑・井戸・河川、古墳時代前期・奈良時代の河川などを検出した。収録した木器は、弥生時代中期の溝 S D03・S D19・S D20・S D27, 井戸 S K21・S K22・S K25, 弥生時代後期の溝 S D02・S D06・S D12・S D14, 井戸 S K17, 河川 S D11 から出土した。

溝 S D03 は幅 2.8m, 深さ 1.5m で、緩やかにカーブしながら西北西から東南東へ流れる。東地区 (S D03E) と西地区 (S D03W) とに分けて調査を実施。弥生Ⅲ・Ⅳ期の土器が共伴するが、前者は溝掘削時の混入と考えられる。したがって、斧膝柄・直柄横鍬身・匙・槽・槍形などの木器は弥生Ⅳ期に属する。

溝 S D19 は幅 4.5m, 深さ 1.5m で、埋土はⅠ～Ⅲ層に大別できる。Ⅰ層は溝の埋没過程、Ⅱ層は溝が機能した時、Ⅲ層は溝掘削直後の堆積土で、木器はⅡ・Ⅲ層から弥生Ⅱ～Ⅲ期古段階の土器・石器・動物遺存体とともに出土。なお、KM-H 7 区ではⅢ層が弥生Ⅱ期、Ⅰ層が弥生Ⅲ期を主体としてⅡ期を含むという所見を得ているが、本図録所収の木器は一括して弥生Ⅱ～Ⅲ期古段階と表示した。斧直柄・鍬身・木錘・弓・匙・横杓子・釣瓶などがある。

溝 S D20 は KM-P 調査区における溝 S D3004 に連なる。幅 2.7m, 深さ 1.1m で、埋土はⅠ～Ⅴ層に大別できる。木器は溝が機能した時の堆積土Ⅰ・Ⅱ層から、弥生Ⅲ期の土器・石器・動物遺存体などと共伴。泥除・横杓子・槽・梯子などがある。

溝 S D27 は幅 3.5m, 深さ 1.2m で、KM-P 調査区の溝 S D3001 に連なる。埋土はⅠ～Ⅲ層に大別でき、木器は主にⅡ層から弥生Ⅲ～Ⅳ期の土器などと共に出土。竪杵・弓・蓋などがある。S K21 は径 1 m 弱, 深さ 1.4m, S K22 は推定径 1.1m, 深さ 0.7m, S K25 は径 2.4m, 深さ 1.4 m の円形素掘りの井戸。S K21・S K22 から斧膝柄が、S K25 から弥生Ⅳ期の土器とともに腰掛が出土している。

S D02 は幅 4.7m, 深さ 1.0m の南北溝で、埋土は上下 2 層に大別できる。弥生Ⅴ期の土器・石器とともに、盾・片口が出土。S D06 は幅 6.0m 以上, 深さ 1.3m で、埋土は 2 層に分かれる。一本鋤は弥生Ⅴ期初頭の土器などと一緒に上層で出土した。S D12・S D14 は一連の東西溝で、幅 3.5m, 深さ 1.5m。埋土はⅠ～Ⅳ層に大別でき、臼・木錘・織機・櫓・高杯などの木器はⅠ～Ⅲ層から弥生Ⅴ期初頭の土器と共伴。S K17 は径 1.0m, 深さ 1.3m の円形素掘りの井戸。弥生Ⅴ期末の土器とともに曲柄又鍬・鋤柄・木錘が出土。S D11 は東から西へ流れる自然河川で、

高杯・槽が弥生時代中期～後期の土器と共伴した。

〔木器番号〕溝S D03 ; 00511, 03402, 12310, 15401, 16205

溝S D19 ; 00702, 01006, 01415, 09305, 10907, 12014, 12309,
12405, 14601, 14701, 15306

溝S D20 ; 04007, 12402, 13306, 19108

溝S D27 ; 08911, 11102, 11110, 11111, 15004, 19207

井戸S K21 ; 00210 井戸S K22 ; 00207 井戸S K25 ; 17806

溝S D02 ; 11603, 12710

溝S D06 ; 06304

溝S D12 (S D14) ; 08406, 09308, 09702, 10112, 13205, 18516, 18918

井戸S K17 ; 04809, 06303, 09307

河S D11 ; 13107, 14204

〔文 献〕宮崎泰史・広瀬雅信・他『亀井遺跡－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』（財）大阪文化財センター 1982 年

宮崎泰史・他『亀井遺跡Ⅱ－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』（財）大阪文化財センター 1984 年

c 亀井遺跡 近畿自動車道建設工事関連 調査（KM－K区）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い（財）大阪文化財センターが1979年6月～1982年3月に（その1）調査区、1982年6月～1983年8月に（その2）調査区、1985年6月～1986年に（その3）調査区の発掘調査を実施。（その1）調査区は南北に縦貫するトレンチ、（その2）調査区は橋脚設定のための掘りひろげ部、（その3）調査区は掘りひろげ部の追加である。調査の結果、KM－P区・KM－H区を合せて、亀井遺跡における集落景観の変遷がほぼ明らかになった。すなわち、弥生時代前期の中頃に成立した集落は南北50mほどの範囲で、前期末には居住域の南に方形周溝墓が築かれる。中期中葉に集落は著しく拡大し、南北約150mにおよぶ。この集落はKM－P・H区における径100mを占める集落と併存した可能性が強い。中期後葉には墓域が移動・拡大し、居住域の南、城山遺跡の北部を含む南北560mに及ぶ範囲で、方形周溝墓が次々と築かれる。この集落は後期初頭まで存続し、後期中葉に一時的に復活するが、以後は生活痕跡はなく、5世紀後葉に至って古墳が築造される。

収録したKM－K区における木器は、弥生時代中期の溝S D1801・S D2301～3・S D2401・S D3011・S D3012, 土坑S K1901・S K3060, 井戸S E2401・S E2402, 弥生時代後期の溝S D2303・S D2304・S D3008, 河NR3003から出土。なお、遺構番号2000番代までは（その2）調査区、3000番代以上は（その1）調査区の遺構である。

弥生Ⅱ期の溝S D1801は幅3.2m、深さ1.0mで、把手が出土。弥生Ⅲ期の溝S D2401は幅4.4m、深さ1.3mで、杓子形木器・高杯などが出土。弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の溝S D3011は幅3.8m、深さ1.3mのV字溝で、横杓子未成品が出土。弥生Ⅲ期の溝S D3012は幅4.7m、深さ1.5mで、鍬身・竪杵・弓が出土。弥生Ⅲ期前半の土坑S K1901は東西2.5m、南北1.5m以上、深さ1.0mで、斧膝柄・横杓子が出土。弥生Ⅲ期の土坑S K3060は径4.6m、深さ1.6m。埋土は6層に分かれ、2～5層から多量の土器・動物遺存体とともに、斧膝柄・斧直柄・鍬身・組合せ鋤などが出土。弥生Ⅳ期のS E2401は径1.5m、深さ2.0m、S E2402は径2.8m、深さ2.1mの円形素掘りの井戸で、前者から刳物桶、後者から鍬身・高杯などが出土。

第三章 遺跡解説

溝S D2304は幅4.3m、深さ1.2mで、溝S D2303の北肩を切る。前者から鍬身・横槌・盾、後者から竪杵が出土。溝S D3008は幅10m前後で、上層から弥生V期後半、下層から前半の土器が出土する。木器には斧直柄・鍬・泥除・一木鋤・横槌・穂摘具・背負子などがある。河NR3003は推定幅10m以上で、漢式鍬を模した木鍬が出土した。

〔木器番号〕 溝S D1801 ; 17301 溝S D2301~3 ; 19911

溝S D2401 ; 12209, 13109, 18415, 19709

溝S D3011 ; 12502 溝S D3012 ; 01412, 08804, 10909

土坑S K1901 ; 00219, 00501, 12412

土坑S K3060 ; 00212, 00314, 00705, 01909, 02904, 04510,
05602, 05804, 12105

井戸S E2401 ; 15203 井戸S E2402 ; 13110

溝S D2303 ; 08809

溝S D2304 ; 02004, 09108, 11805

溝S D3008 ; 00416, 01007, 02003, 03811, 07822, 09104,
09218, 09809, 15302, 17001

河NR3003 ; 11503

〔文献〕 高島徹・広瀬雅信・他『亀井—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年
広瀬和雄・石神幸子・他『亀井(その2)—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986年
藤永正明・阿部幸一・他『亀井(その3)—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987年

28 恩智遺跡 (fig. 257) おんじ

八尾市恩智中町2丁目・3丁目に所在する縄文時代前期から古墳時代中期に至る集落遺跡。恩智川改修に伴い、1975年10月～1976年4月、1976年10月～1977年3月、1978年1月～6月に瓜生堂遺跡調査会が発掘調査を実施。生駒連峰に連なる高安山西麓の扇状地端部に立地する。調査地点は集落遺跡の西端部分で、現恩智川河床敷にあたる。弥生時代を中心とする溝・土坑・小穴・木棺墓などを検出している。西には中田遺跡などの集落遺跡、東の山麓には高安山古墳群が存在する。

収録した木器は主として弥生時代前～中期の溝や自然河道から出土した。溝S D02は幅2.5m、深さ0.5mで、下層から弥生I期新段階～II期、上層から弥生II～III期の土器が出土。木器は上層から鍬・鋤が出土している。弥生II期の溝S D04は幅3.5m、深さ1.4mで、鍬・鋤・小型臼などが出土。弥生I期の自然河道S D06は深さ1.5mで、田下駄・箆・容器などが出土。溝S D07は幅2m、深さ0.8mで、弥生II期を主体とするI～III期の土器とともに斧膝柄などが出土。溝S D10では弥生II～III期の土器とともに木鍬などが出土。溝S D11は幅3.0m、深さ1.3mで、弥生III期を主体とする土器とともに鍬・鋤・容器などが出土。溝S D13は幅2.8m、深さ0.9mで、南肩に沿って弥生V期の土器が整然と並ぶ。溝内から竪杵が出土。自然河道S D15は幅5.5m、深さ1.2mで、弥生II～III期の土器に部材が共伴。S D18は自然河道S D21か

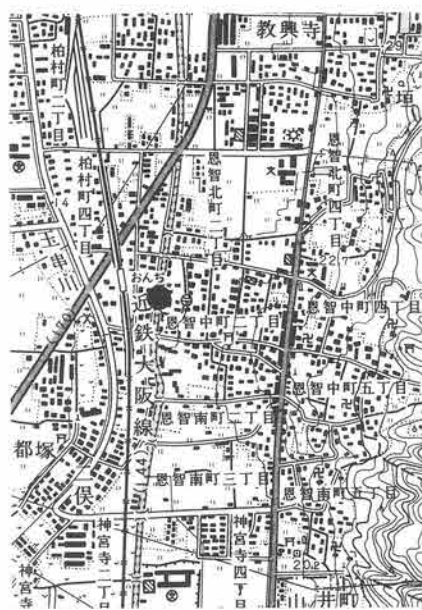


fig. 257 恩智遺跡木器出土地点
(1:25,000 信貴山)

ら分岐する幅3.5m、深さ1.2mの溝で、底から容器が出土。共伴土器は弥生Ⅰ～Ⅲ期であるが、S D21との関係から弥生Ⅱ～Ⅲ期とした。S D21は幅7.5m、深さ1.3mで、上層で古墳時代、中層で弥生Ⅳ～Ⅴ期、下層で弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器が出土。木器は中・下層から鍬・弓・戈形などが出土した。溝S D22は幅2.5m、深さ0.9mで、弥生Ⅰ～Ⅲ期の土器と木製高杯の杯部が出土した。自然河道S D24は幅20m以上、深さ2m以上で、弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器とともに、小型臼・横槌・容器などが出土。S D30は幅約7m、深さ0.5m、S D33は幅9.8m以上、深さ0.7mの自然河道で、弥生Ⅱ～Ⅲ期。鍬身・四脚合子などが出土。

〔木器番号〕溝S D02；01802

溝S D04；08510, 08520, 10701, 14903, 16007, 19509

自然河道S D06；07408, 10834, 14604, 14908, 15407, 19807

溝S D07；00102, 01004, 13310, 16107

溝S D08～S D12；00708 溝S D10；11515, 18212

溝S D11；02411, 10605, 12815, 14804

溝S D13；09005 自然河道S D15；18904

溝S D18；12910 溝S D22；13115, 19614

自然河道S D21；00110, 01409, 06201, 07102, 08509, 08518, 11124,
14907, 16003, 19603, 19808

自然河道S D24；08502, 09202, 12812, 14705, 18512, 19607, 20022

自然河道S D30；19803 自然河道S D33；01610, 14703

ピットS P04；16001, 19613

弥生Ⅱ～Ⅲ期包含層；00206, 01801, 02903, 02908, 05704, 08506, 09006,
11702, 12906, 13106, 18020, 19516

〔文献〕田代克己・毛利光用子・他『恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会 1980年

曾我恭子・成海佳子・毛利光用子『恩智遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会 1981年

29 八尾南遺跡 (fig. 258) やおみなみ

八尾市若林町1丁目付近に所在。1978年7月～1979年12月に八尾南遺跡調査会が発掘調査を実施。羽曳野丘陵の北縁辺部に立地する。縄文時代～弥生時代の水路・河川、古墳時代の集落・墓・水田、中世の条里制水路などを検出している。周辺には津堂城山古墳や長原古墳群がある。

収録した木器は、いずれも古墳時代の井戸から出土した。S E9は4世紀の井戸で、径1.2m、深さ1.4mをはかる。木器は準構造船の転用材で組んだ井戸枠に付随して出土。S E13は素掘りの井戸で、上層から布留式の小型丸底形土器片が出土している。儀杖形木製品は最下層より出土した。

〔木器番号〕井戸S E9；18517 井戸S E13；12101

〔文献〕山本昭・米田敏幸・他『八尾南遺跡－大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書－』八尾南遺跡調査会 1981年

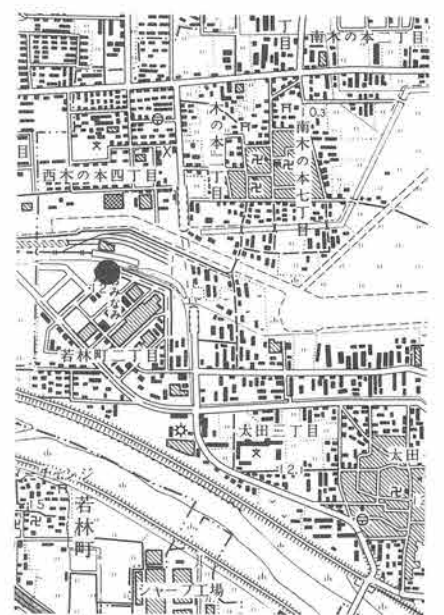


fig. 258 八尾南遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部)

30 船橋遺跡 (fig. 259) ふなはし

柏原市古町、藤井寺市北条町・船橋町付近に所在する縄文時代～室町時代の複合遺跡。江戸

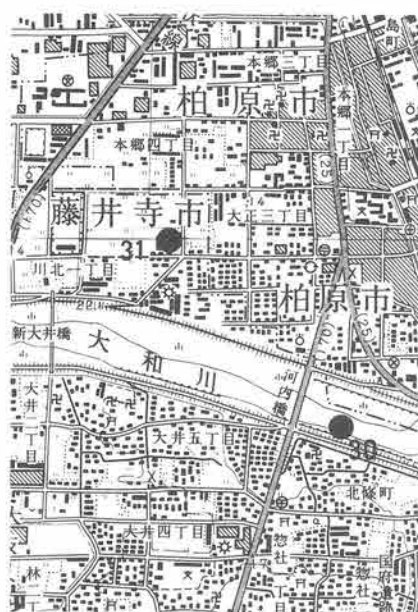


fig. 259 船橋・川北遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪東南部・古市)

時代に大和川を付け替えたため、中枢部は新大和川の河床となって流失しつつある。1940年代の後半に発見され、1956～58年に大阪府教育委員会などが河床部分を発掘調査を実施。弥生時代の墓、古墳時代の溝、飛鳥時代創建の寺院、奈良時代の柵や掘立柱建物、中世の井戸などを検出した。古墳時代～奈良時代における土器編年の基礎を構築し、後に縄文時代晩期「船橋式」の基準となったことで著名。発掘調査でも各種の木器が若干量出土しているが、図版に収録した刀装具は表採品である。

〔木器番号〕 11320

〔文 献〕 辻合喜代太郎「古代・中世の工芸」『柏原市史』第2巻 本編1, 柏原市役所 1973年

原口正三『河内府船橋遺跡出土遺物の研究』大阪府文化財調査報告書第8輯, 大阪府教育委員会 1958年

31 川北遺跡 (fig. 259) かわきた

藤井寺市川北2丁目に所在。船橋遺跡の北に隣接する。府立藤井寺養護学校建設工事に伴い、大阪府教育委員会が1980年2月～3月(第1次)、1981年7月～11月(第2次)に発掘調査を実施。弥生時代中期の土器溜、後期の方形周溝墓、古墳時代前・中期の竪穴住居・井戸・溝、後期の溝、中世の水田などを検出した。

収録した木器は第1次調査区の第1号井戸(井戸1)、第2次調査第1区の溝SD1から出土した。井戸1は径1.45m、深さ1.51mの円形素掘りの井戸で、布留式後半の土器とともに斧・膝柄・木錘・田下駄横木・剣鞘などが出土。溝SD1は幅7m、深さ0.3mの自然流路。南東から北西へ流れ、一部を杭と矢板で護岸する。古墳時代後期の土師器・須恵器とともに、田下駄が出土している。

〔木器番号〕 第1次調査区 井戸1 ; 00312, 07709, 09313, 11412

第2次調査区 自然流路SD1 ; 07502

〔文 献〕 岩崎二郎・岩瀬透『川北遺跡発掘調査概要―府立藤井寺養護学校用地内埋蔵文化財調査―』大阪府教育委員会 1981年

松村隆文・館邦典『川北遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会 1982年

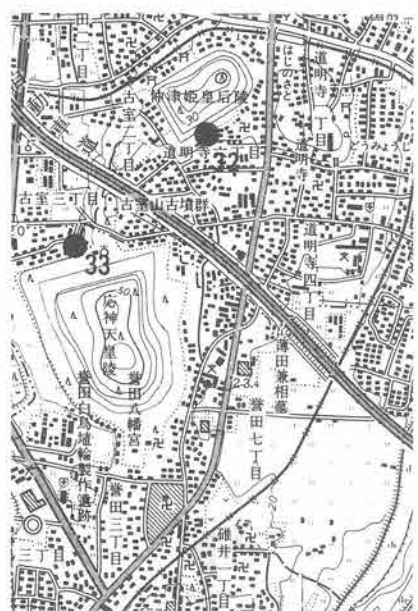


fig. 260 三つ塚古墳・応神陵古墳木器
出土地点 (1:25,000 古市)

32 三つ塚古墳 (fig. 260) みつづかこふん

藤井寺市道明寺6丁目に所在。仲津山古墳の南側、洪積段丘縁辺部に東西に並ぶ3基の方墳の総称。東から順に八島塚古墳、中山塚古墳、助太山古墳とよぶ。八島塚・中山塚古墳はともに一辺約50m、高さ約8m、助太山古墳は一辺約35mをはかる。3基の古墳は南辺が揃い、互いに周濠を共有する。1978年1月～5月に大阪府教育委員会が八島塚古墳と中山塚古墳との間で発掘調査を実施。2つの古墳に挟まれた周濠を検出した。周濠は上部幅約15m、底部幅約5.6m、深さ約1.8m。濠内には腐植土が厚く堆積しており、濠底北端部の最下層では周濠北側にある埴輪窯の灰層が堆積し、周濠掘削時期と埴輪窯操業時期とが近接していたことを示す。南寄りの濠底中央部を南北11m、東西7m以上の規模で土坑状に掘りくぼめており、大小2つの木製櫓「修羅」はテコ棒とともにこの土坑状部分から出土した。中央に頭部を北へ向けた大形「修羅」、大形「修羅」の南端に頭部を東へ向けた小形「修羅」、大形「修羅」の東側に添うようにテコ棒があった。そのほかに埴輪、土師器、須恵器が濠内から出土している。古墳の築

造時期は5世紀中葉から後半頃と考えられ、「修羅」およびテコ棒も古墳築造時に埋納されたと推定される。

〔木器番号〕 09901, 09902

〔文 献〕 高島徹「修羅の発掘」大阪府教育委員会月報第31巻第1号, 1978年

高島徹「三ツ塚出土の修羅」『高校通信 東書 日本史・世界史No.57』東京書籍 1980年

高島徹「三ツ塚古墳周濠内出土の「修羅」の発掘調査について」現地説明会パンフレット, 大阪府教育委員会 1978年(『大阪府史』第1巻古代編 1978年に再録)

33 応神陵古墳 (fig. 260) おうじんりょうこふん

羽曳野市誉田に所在する前方後円墳。誉田山古墳・誉田御廟山古墳とも言う。藤井寺市と羽曳野市にまたがる古市古墳群のなかで最大規模を誇る。三段築成で墳丘全長約420m。二重に周濠がめぐる。

図版に収録した笠形木器は応神天皇の宗廟と称する誉田八幡宮の所蔵品で、同古墳の内濠から出土したと言う。1881年の周濠浚渫時にも同種の木器が出土したことを若林勝邦が報じているが、法量からみて別個体のものである。その後、同古墳の外堤西半部を囲むように流れる大水川改修工事に伴い、1987年度から大阪府教育委員会が同古墳周辺部の発掘調査を実施している。fig. 261に転載した笠形木器は1988年度の調査時に同古墳前面(北側)外堤の外側をめぐる溝から出土したもので、1881年発見の笠形木器の法量にほぼ等しい。

〔木器番号〕 16907

〔文 献〕 若林勝邦「古墳より発見せる木片に就て」『考古学会雑誌』第11号, 1897年

土生田純之「誉田八幡宮所蔵の有孔木製品」『網干善教先生華甲記念考古学論文集』1988年

一瀬和夫「大阪府羽曳野市応神陵古墳外堤」『日本考古学年報41(1988年度版)』日本考古学協会 1990年

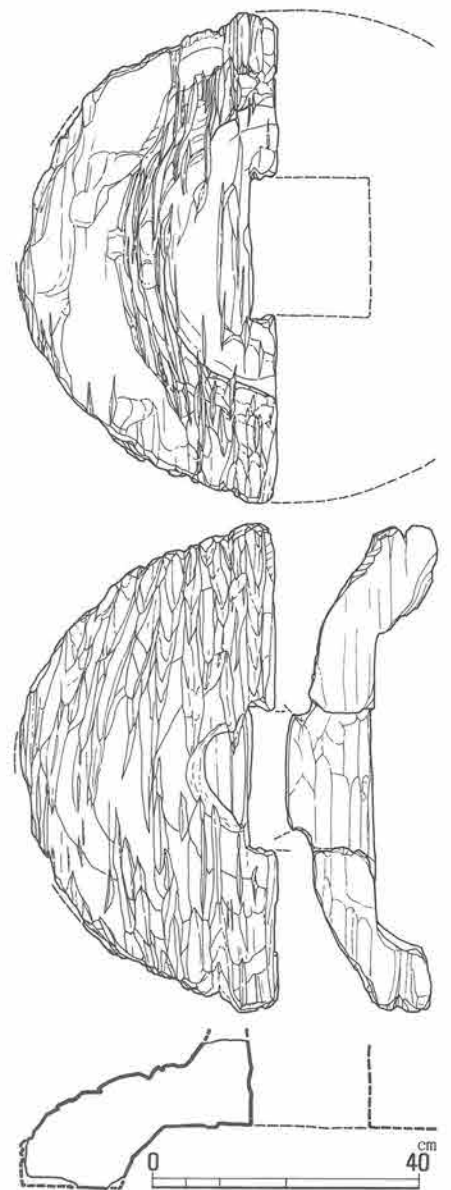


fig. 261 応神陵古墳外堤溝 SD01 出土笠形木製品(大阪府教育委員会『大水川改修にともなう発掘調査概要・IV』1989年)

34 陵南北遺跡 (fig. 262) りょうなんきた

堺市百舌鳥西之町に所在。百舌鳥古墳群中の東南部, いたすけ・御廟山の両古墳とニサンザイ古墳との間を西流する百舌鳥川(百済川)の左岸に沿う低位段丘裾部に立地する。おおよそ東西300m, 南北40mの範囲で, 標高は12m前後をはかる。1973年の団地建設を契機に, 堺市教育委員会が発掘調査を実施。初期土師器や古式須恵器を伴う土坑などを検出した。翌1974年, 東に隣接する市立小学校新設工事に伴う発掘調査では, 百済川の蛇行によって形成されたよどみ状遺構から多種多様の木器が出土。そのほか鉄精錬に関わる炉, 多量の鉄滓を含む方形土坑などの遺構を検出し, 製塩土器や漆が入った須恵器なども出土していることから, 百舌鳥古墳群造営に関わる集団の工房跡と推定できる。

よどみ状遺構から出土した木器には, 臼・竪杵・杵・刀装具・鞍・刀形・把手・建築部材などがあり, 5世紀後半代の須恵器・土師器が多数共伴している。特に, 前輪・後輪が揃って出土した馬鞍は注目すべき遺物である。なお, 当遺跡の南側を東方にのびる丘陵には5世紀後半～6世紀初頭の掘立柱建物群が想定でき, その丘陵端には6世紀前半の赤山古墳(径20mの



fig. 262 陵南北・百舌鳥陵南遺跡木器
出土地点 (1:25,000 堺)

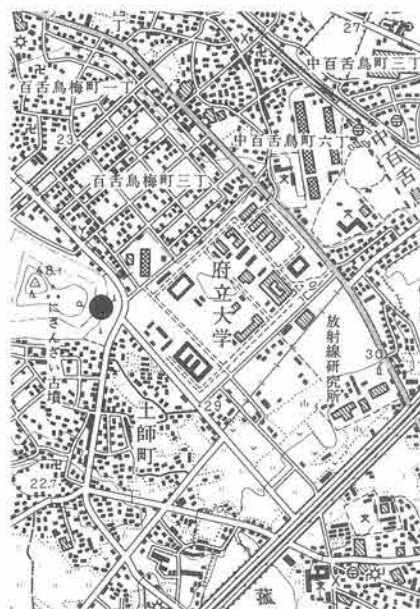


fig. 263 ニサンザイ古墳木器出土地点
(1:25,000 古市)

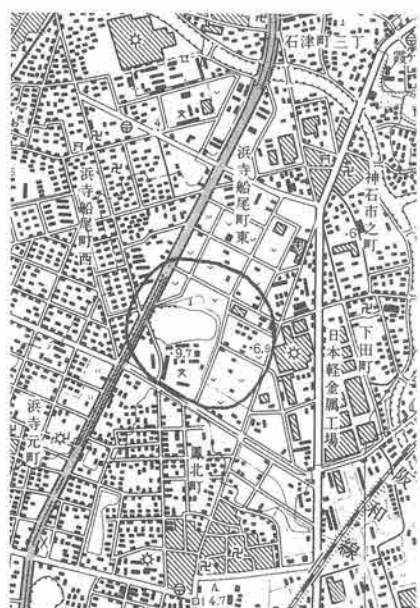


fig. 264 四ッ池遺跡木器出土地点
(1:25,000 堺)

円墳)がある。さらに谷をはさんだ南側にも6世紀前半の竪穴住居・掘立柱建物群があり、地理的・歴史的に一連の遺跡として把握できる。

〔木器番号〕 08404, 09507, 11214, 11321, 11403, 11420, 11801, 11802, 13302, 16115, 16309, 16313, 17306, 19204, 19208, 19209

〔文献〕 堺市教育委員会『陵南遺跡現地説明会要旨』1974年

森村健一・北野俊明「陵南遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料1983年

神谷正弘「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復原」『考古学雑誌』第72巻第3号, 日本考古学会1987年

35 百舌鳥陵南遺跡 (fig. 262) もずりょうなん

堺市百舌鳥陵南町に所在。1974年5月～7月, 同年7月～12月, 1975年1月の3次にわたって大阪府教育委員会が発掘調査を実施。百舌鳥古墳群の中にあつて, 泉ヶ丘丘陵から派生した舌状台地のうち, 石津川の支流である百済川と美濃川によって区分された台地上とその間の谷部に立地する。古墳時代中期の掘立柱建物・竪穴住居・土坑・溝や井堰と考えられる杭列を伴う河川状遺構を検出。旧石器, 縄文土器, 古墳時代前期の土師器, 中～後期の須恵器・土師器・埴輪, 奈良時代の須恵器・土師器・皇朝銭, 中世の瓦・陶磁器などが出土した。

収録した木器は河川状遺構から出土。古墳時代のものと考えられるが, 共伴した土器の時期にばらつきがあり, 出土層位も安定していなかったため, 詳細な時期は特定できない。

〔木器番号〕 00401, 06701

〔文献〕 中村浩『百舌鳥陵南遺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要1974-13, 大阪府教育委員会1975年

36 ニサンザイ古墳 (fig. 263)

堺市百舌鳥西之町・百舌鳥陵南町・土師町にまたがって所在する前方後円墳。墳丘全長290mで, 2重の周濠をもつ。百舌鳥古墳群のなかにあつては, 大山古墳(仁徳陵), ミサンザイ古墳(履中陵)について3番目, 日本全国でも7番目の規模を誇る。1976・1977年に堺市教育委員会が実施した内・外濠の状況および範囲確認調査に際して木器が出土。収録した木器は, 1976年に後円部前面の一重周濠部(内濠)に設定した第2トレンチから出土したもの。出土層位の状況および共伴遺物から6世紀前半代に比定され, 本古墳に所属すると考えてさしつかえない。

〔木器番号〕 16402, 16901

〔文献〕 森村健一・北野俊明『ニサンザイ古墳一重堀及び二重堀範囲確認調査概要』堺市教育委員会1987年

37 四ッ池遺跡 (fig. 264) よついいけ

堺市浜寺船尾町を中心に所在。1948年の浜寺中学校建設工事を契機とする発掘調査, 1967・1968年の大阪府教育委員会による範囲確認調査, 1969年～1971年の第2阪和国道内遺跡調査会による発掘調査, 1973年～1980年の四ッ池遺跡調査会による発掘調査などを経て, 現在は堺市教育委員会が調査を継続している。和泉山脈から北にのびる丘陵の一支脈の先端に立地し,

標高 10m 前後の丘陵端平坦部およびその周囲の標高 5 m 前後の水田地帯を含めて、遺跡の範囲は東西 500m、南北 1,000m 近くにおよぶ。縄文時代中期末から古墳時代全期を通じての遺構・遺物、およびそれ以降の断片的な遺構・遺物を検出している。とくに、和泉における数少ない縄文後・晩期の集落が弥生時代の拠点集落に発展する過程、池上遺跡とならぶ和泉北部における弥生時代の拠点集落が形成・発展・解体・再編に至る過程、百舌鳥古墳群や陶邑という古墳時代の中核となる遺跡群に隣接する集落遺跡としての動向など、四ッ池遺跡が提起する問題は多く、かつ重要である。以下、収録した木器を、第 2 阪和国道内遺跡調査会による調査分と、四ッ池遺跡調査会・堺市教育委員会による調査分とに分けて記述する。

a 四ッ池遺跡 第 2 阪和国道内遺跡調査会 調査

1969 年 4 月～1971 年 9 月に、第 2 阪和国道路線予定地の幅 40m、長さ 550m に関して発掘調査を実施。縄文時代の土坑やピット、弥生時代の溝・土坑・方形周溝墓・壺棺墓・河川、古墳時代の溝・河川などを検出した。収録した木器は、弥生時代前期の包含層、弥生時代中期の溝 S F 005 (E 溝)・S F 006 (G 溝)、古墳時代前期～中期の自然流路 S F 017 (N 溝)、古墳時代中期の L 溝南溝、年代不詳の大溝などから出土した。

弥生 I 期の包含層は F 地区試掘坑で検出したもので容器が出土。E 溝・G 溝は 2～5 m の間隔を置いて南東から北西に走る 2 条の V 字溝。E 溝は幅 2.6m、深さ 0.9m で、埋土は上下 2 層に大別でき、下層から弥生 II～IV 期の土器と用途不明品（儀杖？）・高杯などの木器、上層から IV～V 期も混えて弥生 III 期の土器が出土している。G 溝は幅 3.0m、深さ 0.9m で、埋土は上下 2 層に大別でき、下層で弥生 I 期新段階の土器が少量、上層で弥生 III 期を主体とする土器が出土。木器には容器・用途不明品がある。

N 溝は幅 7 m、深さ 1.5m の自然流路で、埋土は 10 層に分かれ、最上層から第 8 層までは弥生土器・土師器・須恵器、第 9・10 層から若干量の土師器が出土している。4 世紀後半にはじまり 5 世紀には機能を終えた溝で、東肩の傾斜面から曲柄鍬・同未成品・曲柄又鍬が 3 枚重なって出土した。L 溝は東西に走る 2 条の溝で、南を南溝、北を北溝とする。一木鋤が出土した南溝は幅 1.2m、深さ 0.4m で、溝底から須恵器杯が出土している。

なお、第 2 阪和国道内遺跡調査会が行った発掘調査で出土した遺物整理事業は(財)大阪文化財センターが引き継いでいるが、四ッ池遺跡に関しては正式報告書は未刊である。

〔木器番号〕F 地区試掘坑；14505, 15406 E 溝；12110, 13105, 14302

G 溝；12912, 13206, 18104, 19713

L 溝南溝；06204

N 溝；04611, 04708, 04805, 19721

GA57 区大溝；11602

〔文献〕第 2 阪和国道内遺跡調査会『昭和 43 年度第 2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書 1』

1969 年

第 2 阪和国道内遺跡調査会『昭和 44 年度第 2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書 2』

1970 年

石神怡・伊藤久嗣・他『池上・四ッ池 1970』第 2 阪和国道内遺跡調査会 1970 年

第 2 阪和国道内遺跡調査会『昭和 45 年度第 2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書 3』

1971 年

第 2 阪和国道内遺跡調査会『昭和 46 年度第 2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書 4』

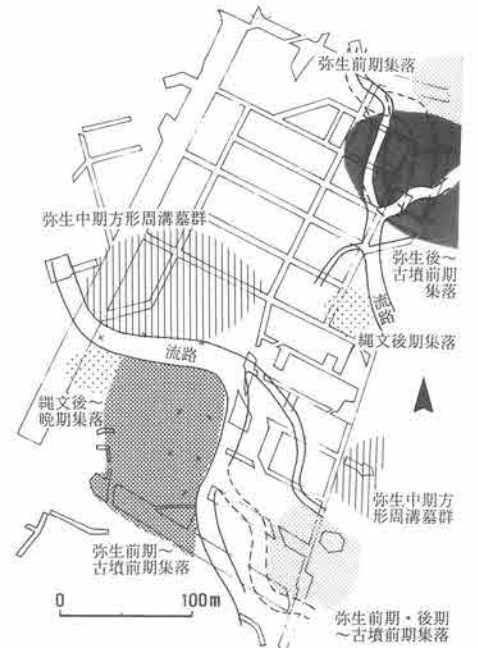


fig. 265 四ッ池遺跡概念図

1971 年

b 四ッ池遺跡 四ッ池遺跡調査会・堺市教育委員会 調査

第2 阪和国道内遺跡調査会による発掘調査終了後、国道沿いの地域整備（浜寺船尾土地区画整理）に伴い、1973 年3 月～1980 年9 月に四ッ池遺跡調査会が道路部分約5 万㎡の発掘調査を実施。その後、堺市教育委員会が主体となって街区部分の調査を継続している。

第2 阪和国道内遺跡調査会の成果も含めて、四ッ池遺跡における遺構のひろがりやfig. 265 のように概念化できる。すなわち、縄文時代の遺構群が2 ヶ所（縄文A・B 集落）、弥生時代および古墳時代の集落地域が3 ヶ所（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ集落）、弥生時代の方形周溝墓群が2 ヶ所（第Ⅰ・Ⅱ方形周溝墓群）の計7 ヶ所のまとまりがあり、その間を自然河川が流路を変えつつ貫流する。

収録した弥生時代の木器は、第Ⅰ集落が立地する三光台地の東・西・北の三方を囲むように流れる自然河川（旧三光川）から出土したものが主体をなす。そのほか、三光台地の東側低地にある弥生時代中期の方形周溝墓の周溝から、多量の木屑・枝葉と一緒に出土した組合せ鋤身・容器がある。古墳時代の木器は、三光台地の縁辺を流れる自然河川および第Ⅲ集落の中央を流れる自然河川から出土したもので、いずれも5 世紀代の土器と共伴している。

〔木器番号〕第35地区自然河川；00604, 00803, 02413, 09201

第32地区自然河川；08904 恵瑞池1 G区第1 砂層；12919

恵瑞池内自然河川；05603 第81地区方形周溝墓；05606, 14405

第31地区自然河川；06609 第83地区自然河川；14203

第86地区自然河川；09403

〔文 献〕四ッ池遺跡調査会『四ッ池遺跡－昭和49年度調査概要 その2－』1974 年

樋口吉文『四ッ池遺跡－第80 地区・第81 地区－』昭和55 年度国庫補助事業発掘調査報告，堺市教育委員会1981 年

樋口吉文「四ッ池遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14 回研究集会資料1983 年

樋口吉文・土山健史『四ッ池遺跡』堺市文化財調査報告第16 集，堺市教育委員会1984 年

樋口吉文『四ッ池遺跡発掘調査報告－YOC 第86 地区の調査－』堺市文化財調査報告第22 集，堺市教育委員会1985 年



fig. 266 平井・小阪遺跡木器出土地点
(1:25,000 堺)

38 平井遺跡 (fig. 266) ひらい

堺市平井に所在。1980 年の試掘調査で発見され、堺市教育委員会・(財)大阪文化財センターが、堺市立平井中学校・近畿自動車道と歌山線・府道松原～泉大津線などの建設工事に伴う発掘調査を実施。遺跡は丘陵部と谷部とに分かれ、丘陵部では建物群・瓦器焼成窯・粘土採掘坑など、谷部では自然河川・溝、間の傾斜地では須恵器窯を検出している。収録した木器は、1983 年度に堺市教育委員会が実施した発掘調査において、4－2 工区の南河川と呼んだ自然河川から、5～6 世紀の須恵器とともに出土したものである。

〔木器番号〕15112

〔文 献〕白神典之『平井遺跡』堺市文化財調査報告第25 集，堺市教育委員会1986 年

39 小阪遺跡 (fig. 266) こさか

堺市平井・小阪に所在。近畿自動車道和歌山線・府道松原～泉大津線の建設工事に伴い、(財)大阪文化財センターが1985年から発掘調査に着手。路線予定地に沿って1985年度に(その1)調査区、1986年度に(その2)(その3)(その4)調査区、1987年度に(その5)(その6, 6-2)(その7, 7-2)調査区と調査を進めた。泉北丘陵の北西部、石津川とその支流の陶器川とが形成した低位段丘および氾濫原に立地し、陶器古窯跡群に隣接する。検出した遺構には、縄文時代・弥生時代の河川や土坑、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝・河川、中世以降の水田などがある。

収録した木器は(その3)調査区の河川から出土。(その3)調査区は陶器川の南の低位段丘と一部氾濫原とを含み、5世紀後半を中心とする集落跡とその南西で南東から北西へ流れる河川などを検出。河川は幅20～26mで、その右岸や左岸の窪みに遺物が集中していた。木器には横鋤・木鎌・臼・木錘・浮子・梯子などがある。河川は長期間存続しているが、木器の堆積時期は5世紀後半から6世紀初めと考えられる。

〔木器番号〕07906, 08403, 09416, 10524, 18407, 19212

〔文献〕村上年生・三宮昌弘・他『小阪遺跡(その3)－調査の概要－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター1987年

40 西浦橋遺跡 (fig. 267) にしうらばし

堺市菱木に所在。西は鶴田池東遺跡、東は菱木下遺跡に接する。府道松原～泉大津線建設工事に伴い、1978年～1980年に大阪府教育委員会が、1981年～1982年に(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施した。泉北丘陵内の梅丘陵の西北端にある洪積段丘の緑辺に位置し、遺跡の西部を南から北へ流れる和田川が形成した沖積地・氾濫原とその東にある洪積段丘中位面にまたがって立地する。東部段丘面では弥生時代の溝・方形周溝墓・土坑、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・溝、奈良時代および中・近世の掘立柱建物・溝・土坑などを検出し、沖積地部分では縄文時代晩期から中・近世に至る包含層や弥生時代中期の河川、奈良時代の溝、中世の建物跡などを検出している。

収録した木器(腰掛)は、沖積地部分を検出した弥生時代中期の自然河川SDN1から出土。SDN1は幅10～15mで、蛇行地点では約20m。その蛇行地点では、流れに直交して川幅いっぱいには杭列群SX01を打ち込み、その東端から北西に向けて人工の溝SDA1がのびる。木器はSDN1およびSX01付近から、多量の植物遺体とともに出土。ほかに鋤身がある。

〔木器番号〕17601

〔文献〕石神怡・橋本高明・他「西浦橋遺跡」『府道松原大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター1984年

41 池上遺跡 (fig. 268) いけがみ

和泉市池上町、泉大津市曾根に所在する弥生時代の拠点集落遺跡。池上曾根遺跡とも呼ぶ。大阪湾南の沿岸部、海岸線から約2kmの標高10m前後の段丘上に立地する。1900年代の初めに発見され、1958年以降、和泉市教育委員会や泉大津高校地歴部が小規模な発掘・立会調査を行ってきた。第2阪和国道建設計画に伴い、1967年に大阪府教育委員会が範囲確認調査、

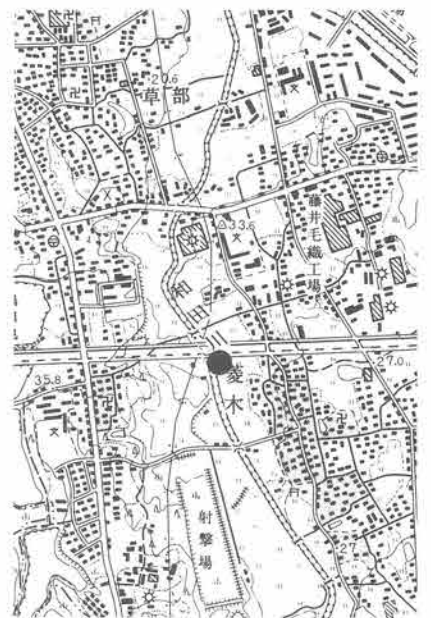


fig. 267 西浦橋遺跡木器出土地点
(1:25,000 堺)

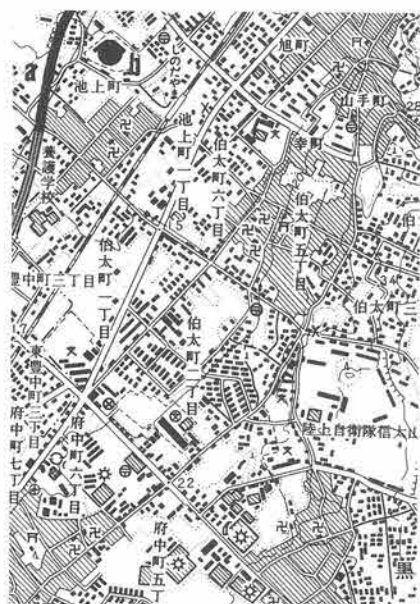


fig. 268 池上遺跡木器出土地点
(1:25,000 岸和田東部)

1969年～1971年に第2阪和国道内遺跡調査会が路線予定地幅40m、長さ600mにわたり発掘調査を実施。その後も、大阪府・和泉市・泉大津市の各教育委員会が調査を継続しており、総面積50万㎡以上と推定される遺跡全体の20分の1程度が明らかになり、1986年・1988年には約11万㎡が国指定史跡となった。収録した木器は、第2阪和国道内遺跡調査会の発掘調査、および和泉市教育委員会の発掘調査において出土したものである。

a 池上遺跡 第2阪和国道内遺跡調査会 調査

第2阪和国道内遺跡調査会が行なった発掘調査で出土した遺物の整理事業は、(財)大阪文化財センターが受託・実施している。

収録した木器は、弥生Ⅰ期の溝SF081(G溝)・SF082(GA溝)・SF083(GB溝)、弥生Ⅱ期の溝SF075(B-Ⅱ溝)・SF079(E溝)、弥生Ⅱ～Ⅲ期の溝SF077(B-Ⅲ溝)、弥生Ⅲ～Ⅳ期の溝SF074(A溝)・SF078(C溝)、弥生Ⅴ期の溝SF084(NA溝)・井戸SG118(第5号井戸)・SG119(第6号井戸)、弥生Ⅴ期～古墳時代の溝SF087(NE溝)、弥生末～古墳初期の井戸SG109(J-1号井戸)およびGS58区の弥生時代ピットから出土したものである。

SF081(G溝)は南西から北東へ流れる幅2.5m、深さ0.6mの溝で、鍬身未成品が出土。SF082(GA溝)は幅8mの東西溝で、組合せ鋤が出土。SF083(GB溝)は幅約20mで、SF082の北に並行する。斧膝柄未成品・鍬身未成品・組合せ鋤身・縦杓子・高杯などが出土。SF075(B-Ⅱ溝)は南北に走る三条の溝(B-Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ溝)のひとつで、B-Ⅰ溝(弥生Ⅰ～Ⅱ期)を再掘開したもの。幅2.5m、深さ0.9mで、各種斧柄・鍬身とその未成品・鋤・小型臼・竪杵・紡織具・攪網杵・弓・杓子・各種容器・戈形・剣形・陽物形・鳥形など多種多様な木器が出土。SF079(E溝)は幅5m、深さ1mのU字溝。埋土は上下2層に大別でき、上層は弥生Ⅲ期、下層は弥生Ⅱ期に属する。下層から鍬身・泥除が出土。SF077(B-Ⅲ溝)はSF075の東肩を切って掘開された幅3m、深さ0.6mの南北溝で、斧膝柄・組合せ鋤身・紡織具・簞などが出土。SF074(A溝)はB-Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ溝の東に並行する南北溝で、幅6.5m、深さ2.0m。斧膝柄・木針・鍬身・膝柄又鍬身・一木鋤・小型臼・簞・弓・簞・匙・高杯などが出土。SF078(C溝)はSF074の東に並行する幅3.5m、深さ0.8mの南北溝で、膝柄又鍬身・鋤柄・掘り棒・匙・容器・鳥形などが出土。SF084(NA溝)は南東から北西へ流れる幅5m、深さ0.3mの溝で、掘り棒・攪網杵が出土。SG118(第5号井戸)は径0.86m、深さ1.05m、SG119(第6号井戸)は径1.5m、深さ1.1mの円形素掘りの井戸で、一木鋤と腰当てが出土。SF087(NE溝)は幅2mで、SF084内を流れる。斧膝柄が出土。SG109(J-1号井戸)は径1.3m、深さ2.25mの円形素掘りの井戸で、庄内式土器と共に竪杵が出土した。

〔木器番号〕SF081; 02706, 02907

SF082; 05403

SF083; 00513, 03106, 05406, 12607, 13207, 20009

SF075; 00109, 00201, 00202, 00209, 00211, 00302, 00308, 00313, 00402, 00504, 00802, 00904, 01902, 02905, 03006, 03103, 03107, 03108, 03204, 03205, 03206, 03301, 04302, 04304, 05306, 05407, 05502, 05701, 05708, 05909, 08501, 08504, 08515, 08601, 08605, 09103, 09520, 09615, 09803, 10105, 10603, 10604,

10607, 11001, 11003, 12026, 12109, 12511, 12603,
12604, 12608, 12705, 12714, 12801, 12808, 12814,
12904, 12905, 12907, 12911, 12915, 12918, 13118,
13201, 13204, 13209, 13211, 14304, 14509, 14702,
14707, 15405, 16004, 16005, 16419, 16515, 16602,
16605, 17102, 18404, 18504, 18913, 20021, 20108,
20109

S F079; 02405, 03901

S F080; 01505

S F077; 00108, 06004, 09715, 10812, 20102

S F074; 00306, 01112, 02606, 03101, 03104, 03105, 04401,
06203, 07103, 08503, 10808, 11109, 12027, 12028,
12305, 13117, 18914

S F078; 04406, 04413, 05404, 07110, 12304, 12809, 12813,
16603, 16607, 19610

S F084; 07108, 10608

S G118; 07106

S G119; 09705

S F087; 00111

S G109; 08803

G S58区ピット; 04203

出土地点不明; 03102, 03408, 12816

〔文献〕第2 阪和国道内遺跡調査会『昭和43年度第2 阪和国道内遺跡調査報告書1』

1969年

第2 阪和国道内遺跡調査会『昭和44年度第2 阪和国道内遺跡調査報告書2』

1970年

石神怡・伊藤久嗣・他『池上・四ッ池1970』第2 阪和国道内遺跡調査会1970年

第2 阪和国道内遺跡調査会『昭和45年度第2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書3』

1971年

第2 阪和国道内遺跡調査会『昭和46年度第2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書4』

1971年

小野久隆・奥野都『池上遺跡』第4分冊の1・2 木器編, (財)大阪文化財セン
ター1978年

松田隆嗣「木製遺物の樹種について」『池上・四ッ池遺跡』第6分冊 自然遺物
編, (財)大阪文化財センター1980年

b 池上遺跡 和泉市教育委員会 調査

1968年2月～1969年1月に、和泉市教育委員会が和泉市池上町393-1番地の仮称池上小学校予定地内で発掘調査を実施。当該地は池上遺跡の北東端にあたり、調査前は「千草池」という溜池であった。検出した遺構には、溝・土坑・ピット・落ち込み・杭列などがある。

収録した木器は溝2・溝8・落ち込み1・落ち込み3から出土。溝2は幅約9m、深さ1.4mの東西に流れる自然河川で、溝内に堰や杭列を設けている。弥生Ⅰ期～Ⅴ期の土器が出土しているが、弥生Ⅱ期に始まり、古墳時代前期には完全に埋没していたと考えられる。最下層の暗灰色泥土から弓が出土。溝8は幅約3m、深さ0.3mの南北溝で、埋土は上下2層に大別で

第三章 遺跡解説

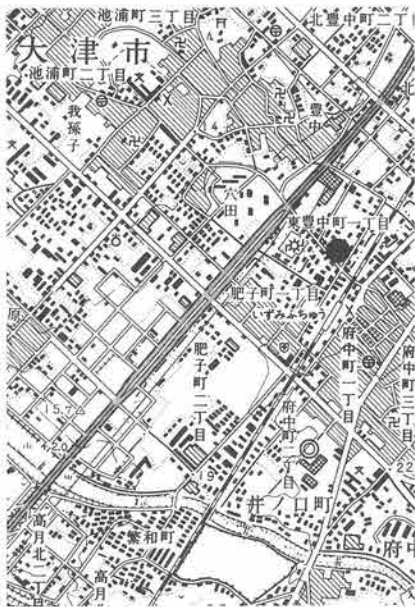


fig. 269 豊中遺跡木器出土地点
(1:25,000 岸和田東部)

きる。下層から弥生Ⅰ期，上層からⅡ～Ⅴ期の土器が出土しており，木器（又鋤・把手）は下層の暗灰色泥土から出土。落ち込み1は径約2m，深さ0.3mで，弥生Ⅰ・Ⅱ期の土器に伴い円板が出土。遺構の切り合いから，弥生Ⅱ期に限定できる。落ち込み3は長径2.75m，短径2.0m，深さ0.6mで，弥生Ⅴ期の土器とともに斧直柄・自在鉤が出土。

〔木器番号〕溝2；11118

溝8；02303, 17304

落ち込み1；14917

落ち込み3；00905, 17307

〔文 献〕灰掛薫『池上遺跡－仮称池上小学建設に伴う発掘調査概要－』仮称池上小学
予定地内遺跡調査会 1980 年

42 豊中遺跡 (fig. 269) とよなか

泉大津市豊中に所在。豊中地区・古池地区・上池地区の3地区に分かれる。かつては豊中遺跡と古池遺跡の2遺跡を区別していたが，現在は全体を豊中遺跡としている。1972年～1973年に古池の池底を大阪府教育委員会が調査し，古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・河川を検出。その後，1973年10月～12月，1974年3月，1974年11月～1975年2月，1975年4月～5月に豊中地区を，1974年10月～11月，1975年2月～3月に上池地区を，それぞれ豊中・古池遺跡調査会が調査し，古墳時代の竪穴住居・河川，中世の井戸などを検出した。

収録した木器は主として上池地区の河川跡から，多量の古墳時代の土師器・須恵器（古式須恵器を含む）とともに出土した。5世紀代と考えられる木器は，直柄横鋤・鋤・鋤・田下駄・竪杵・木錘などの農具，紡輪・糸巻などの紡織具，刀把，容器，琴柱，刀形・剣形・船形などの祭祀具，叩板，腰掛や机脚，扉板，用途不明品など多種に及ぶ。また，6世紀代と考えられる木器には下駄がある。

〔木器番号〕上池地区河川；06508, 07711, 08907, 09402, 09524, 09606,
09607, 09608, 11306, 11903, 11906, 13304,
13309, 13503, 15619, 16201, 16301, 16303,
16706, 17116, 17908, 18011, 18208, 18210,
18707, 19005, 19007

上池地区包含層；03505, 04607, 16208, 16707, 19523, 20024

〔文 献〕酒井龍一・正富博行・他『豊中・古池遺跡発掘調査概報（その3）』豊中・古池
遺跡調査会 1976 年

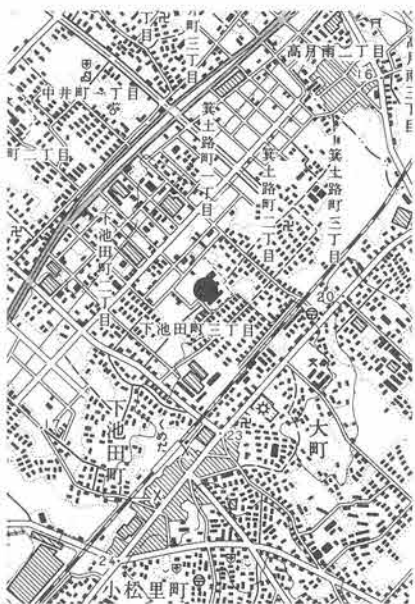


fig. 270 下池田遺跡木器出土地点
(1:25,000 岸和田東部)

43 下池田遺跡 (fig. 270) しもいけだ

岸和田市下池田町に所在。1976年10月～1977年5月に岸和田遺跡調査会が発掘調査を実施。標高17m前後の低・中位段丘上に立地する。弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居・井戸・溝・自然流路を検出。中心となる時期は弥生時代中期から後期である。収録した木器は自然流路から弥生時代中・後期の土器に伴って出土した。

〔木器番号〕01903

〔文 献〕近藤利由「下池田遺跡」『木製農具について』埋蔵文化研究会第14回研究集会資料 1983 年

44 脇浜遺跡 (fig. 271) わきはま

貝塚市脇浜に所在。1985年6月～1986年3月に(財)大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を実施。海岸線に近い近木川右岸の中位段丘上から段丘下の低位部にかけて立地する。古墳時代の掘立柱建物群・土器溜り、中世の性格不明のピット群などを検出。古墳時代前～後期の須恵器・土師器・製塩土器・蛸壺形土器・土鍾、中世の瓦器・青磁・土釜、近世の瓦・陶磁器などが出土した。収録した木器(舵?)は古墳時代の自然流路の中州付近から古墳時代前期の土器とともに出土。

〔木器番号〕 09904

〔文 献〕 藤田憲司・黒田慶一・他『脇浜遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第6輯, (財)大阪府埋蔵文化財協会 1986年



fig. 271 脇浜遺跡木器出土地点
(1:25,000 岸和田西部)

45 三軒屋遺跡 (fig. 272) さんげんや

泉佐野市長滝に所在。1970年の府道工事で発見され、翌年に三軒家遺跡調査グループが発掘調査を実施。以後、継続的に調査を行なっている。樫井川右岸の標高20m前後の中位段丘上に立地し、東西約1,250m、南北約800mの範囲を占めると考えられる。縄文時代から中世に至る複合遺跡で、現在までに縄文晩期から弥生時代・古墳時代の竪穴住居、弥生時代中期の土器棺墓をはじめとする多くの土坑・溝などを検出している。

木器が出土したのは、1979年度の泉佐野市教育委員会による発掘調査で、弥生時代前期の鍬・組合せ鋤身・一木鋤未成品、古墳時代前期の曲柄又鍬・一木鋤が地点を異にする溝から出土。収録した組合せ鋤身は弥生Ⅰ期新段階の土器と共伴した。

〔木器番号〕 06006

〔文 献〕 山本彰『三軒屋遺跡—昭和54年度の調査—』泉佐野市教育委員会 1980年



fig. 272 三軒屋遺跡木器出土地点
(1:25,000 樽井)

E 兵 庫 県

1 広井遺跡 (fig. 274) ひろい

城崎郡日高町広井字八幡田に所在する。1978年9月から1979年3月にかけて日高町教育委員会が発掘調査を実施。円山川の支流である田口川と阿瀬川とが合流する付近で、これら2つの河川が形成した北西向きの小さな谷のほぼ中央部に立地する。標高は100m弱。谷地形の内部で、ほぼ東西に伸びる旧河道を検出した。旧河道内から古墳時代前期の土器とともに、少量の木器が出土。製品となるものはごくわずかで、多くは自然木である。

〔木器番号〕 17903

2 筒江片引遺跡 (fig. 275) つつえかたびき

朝来郡和田山町筒江に所在。1979年4月から7月にかけて兵庫県教育委員会が発掘調査を実施。円山川の形成した狭い谷合平野に面する山の西裾に立地する。標高は約95m。調査地点は支流である黒川のために谷地形になっており、その谷(旧流路)内より弥生時代前期から中世にかけての土器とともに木器が出土している。木器は無頸壺など弥生時代前期のものも含む

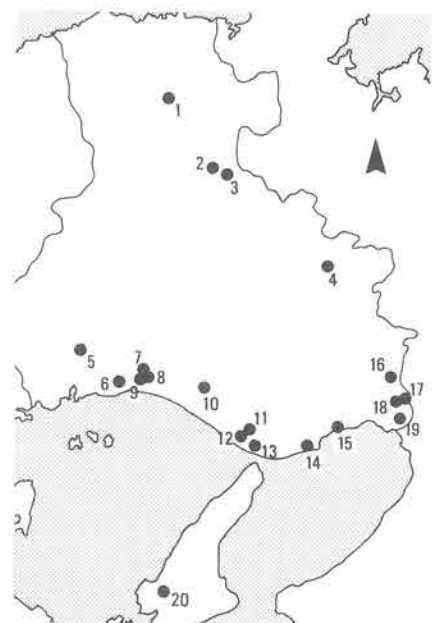


fig. 273 兵庫県の木器出土遺跡



fig. 274 広井遺跡木器出土地点
(1:25,000 栃本)

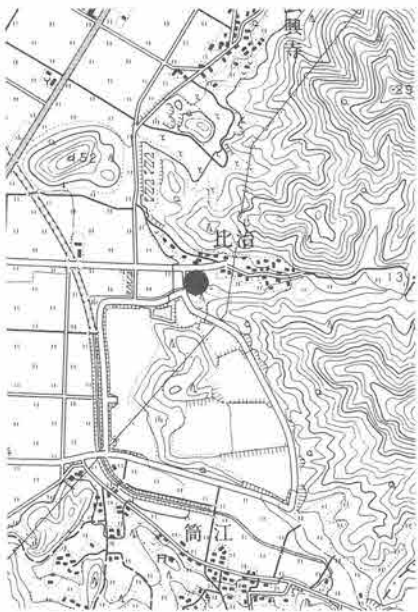


fig. 275 筒江片引遺跡木器出土地点
(1:25,000 但馬竹田)



fig. 276 宮浦遺跡木器出土地点
(1:25,000 矢名瀬)

が、多くは古墳時代前期に属する。東側につづく山頂には、古墳時代前期・中期の古墳群（筒江中山古墳群）がある。

〔木器番号〕 D地区旧流路；12806

A地区旧流路；03407, 04811, 07708, 09302, 10510, 10511,
10515, 13807, 14205, 14919, 15013, 16801,
17217, 17904, 17905, 19712, 19902

〔文 献〕 渡辺昇「片引遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究会資料
1983年

3 宮浦遺跡 (fig. 276) みやうら

朝来郡山東町栗鹿字宮浦に所在。1977年6月から7月にかけて山東町教育委員会が発掘調査を実施した。円山川の支流である柴川と栗鹿川とが形成した北西向きの狭い谷の中央部に立地する。扇状地の下方にあたり、標高は約130m。調査区内は谷地形のため顕著な遺構がなく、東西方向に伸びるかなり広い旧河道の一部を検出した。その埋土の腐植土層から、古墳時代前期の土器とともに少数の木器が出土した。多くは自然木で、製品はごくわずかである。

〔木器番号〕 05104

4 葭池北遺跡 (fig. 277) よしいけきた

多紀郡篠山町黒岡字八の坪・九の坪に所在。1977年11月から12月にかけて篠山町教育委員会が発掘調査を実施。篠山川の支流である黒岡川と藤岡川とにはさまれ、両河川が形成した広い谷部に立地する。篠山盆地の中央にある篠山城のすぐ北にあたる。標高は約210m。谷地形のため覆流水が多く湿潤で、顕著な遺構はなく、東から西に流れる大溝（旧河道）を検出したにとどまる。この大溝内から古墳時代前期の土器とともに多くの木器が出土した。

〔木器番号〕 15608

〔文 献〕 篠山町教育委員会『古代 祖先のあゆみ』1980年

5 小犬丸遺跡 (fig. 278) こいぬまる

竜野市揖西町小犬丸に所在。1982年10月から1986年3月にかけて、兵庫県教育委員会が継続的に発掘調査を実施。南東に開いた東西に細長い谷あいの東端にあたり、南向きの扇状地上に立地する。標高は40～45m。推定古代山陽道のルート上にあり、「布施驛…」の木簡・「驛」銘墨書土器・播磨国府系瓦などの遺物、掘立柱建物・礎石立瓦葺建物・築地塀や古代山陽道と考えられる幅7mほどの道路状遺構などを検出しており、古代布施駅家跡と確定した。木器は南東部谷地形の湿地から、弥生時代後期～平安時代前期の多量の土器とともに出土。木器の多くは奈良時代～平安時代のもので、収録した鳥形に関しても、駅家に関連する遺物と評価する説がある。

〔木器番号〕 16601

〔文 献〕 森内秀造・別府洋二・他『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第47冊、兵庫県教育委員会1987年

兵庫県教育委員会「よみがえる古代山陽道と布施駅家—小犬丸遺跡（竜野市揖西町小犬丸）—」『ひょうごの遺跡』10号、1986年

山下史朗・山上雅弘『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告書第66冊，兵庫県教育委員会1989年

高橋美久二「駅家の門」『京都府埋蔵文化財論集 第1集—創立五周年記念誌—』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1987年

6 丁・柳ヶ瀬遺跡 (fig. 279) よろ・やながせ

姫路市勝原区丁に所在する。1979年10月から1981年1月にかけて，兵庫県教育委員会が継続的に発掘調査を実施した。大津茂川の形成した扇状地に立地し，標高は約5mをはかる。周囲には明確な条里制地割がみられる。調査区を南から北に2本の自然流路が流れ，その間の微高地上に弥生時代前期から平安時代の遺構がある。古墳時代前期の竪穴住居2棟のほかはほとんどが溝状遺構で，遺跡の南辺部分にあたると考えられる。自然流路からは縄文時代中期から晩期にかけての土器も含め，遺存状態の非常に良い各時代の土器が大量に出土した。木器も多く出土しており，弥生時代前期の彩文高杯（鉢?）・槽・鍬・弓，古墳時代前期の鍬・鋤・紡織具，奈良時代の人形などがある。

〔木器番号〕自然流路S X10；01502, 01602, 11101, 13001, 15010, 16701

自然流路S X03；03703, 06405, 09506, 18506

自然流路S X04；02203 赤褐色砂礫層；09502

〔文献〕岡崎正雄・深井明比古・他『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第30冊，兵庫県教育委員会1985年

7 八反長遺跡 (fig. 280) はったんちょう

姫路市岡田字八反長に所在。1982年4月～10月に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した。標高約8mの沖積平野にある弥生時代前期から平安時代前半にかけての複合遺跡である。微高地を横切るように掘削された幅約2mの弥生時代前期の溝からは，遺存状態の良い土器とともに丸木舟状木器が出土した。弥生時代前期～平安時代前期の自然流路からも，田下駄・部材をはじめとして古墳時代末に属する多量の木器が出土している。そのほか，弥生時代後期の方形周溝墓と土坑墓，平安時代の掘立柱建物などの遺構を検出した。

〔木器番号〕南地区H-1下層溝；07503, 07509, 07703

北地区H-2上層溝；17906, 18207

〔文献〕平田博幸「八反長遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会1985年

8 播磨・長越遺跡 (fig. 281) はりま・ながこし

姫路市飯田字長越に所在する。1971年9月から1976年1月にかけて，兵庫県教育委員会が数次にわたる発掘調査を実施した。姫路城の南西にある手柄山の南，標高約5.0mの沖積平野部を流れる舟場川右岸の微高地上に立地する。集落遺跡の南端部分を調査しており，弥生時代終末から古墳時代前半にかけての竪穴住居20棟弱と，橋状構造物・井堰を伴った自然流路（大溝）を検出した。木器はこの自然流路から出土したもので，多くは井堰に絡まっていた。時期的にも竪穴住居群に伴うものである。また，自然流路の肩部からは，青銅製の鏡・鍬，滑石製の双孔円板・有孔円板・剣形品・勾玉などの祭祀関連遺物が出土している。

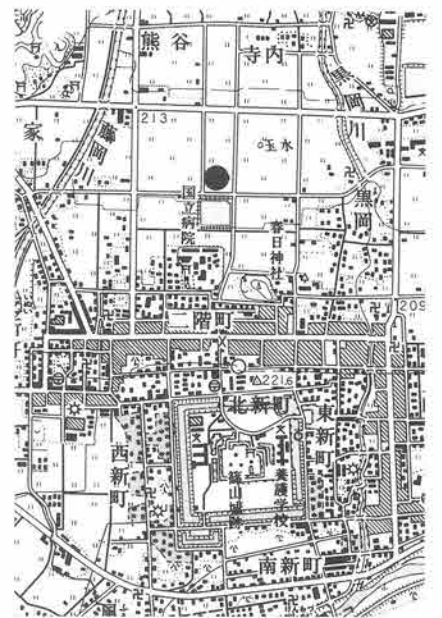


fig. 277 葭池北遺跡木器出土地点
(1:25,000 篠山)



fig. 278 小犬丸遺跡木器出土地点
(1:25,000 二木)



fig. 279 丁・柳ヶ瀬遺跡木器出土地点
(1:25,000 網干)



fig. 280 八反長遺跡木器出土地点
(1:25,000 姫路南部)

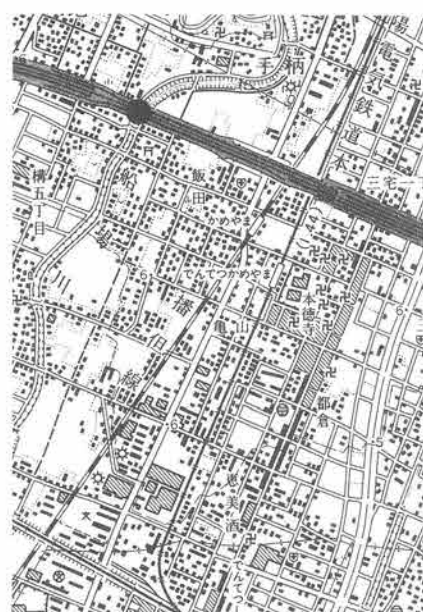


fig. 281 播磨・長越遺跡木器出土地点
(1:25,000 姫路南部)



fig. 282 播磨・権現遺跡木器出土地点
(1:25,000 姫路南部)

〔木器番号〕大溝；00311, 01111, 02306, 03501, 04601, 04706, 07710, 08910, 09107, 09401, 09612, 09616, 09618, 11409, 11416, 12208, 13701, 13805, 14902, 16114, 16503, 17702, 17902, 17909, 17910, 18013, 18018, 18509, 19910, 20111

包含層；04702, 10003

〔文 献〕松下勝・渡辺昇・岡崎正雄・他『播磨・長越遺跡』兵庫県文化財調査報告書第12冊，兵庫県教育委員会 1978年

9 播磨・権現遺跡 (fig. 282) はりま・ごんげん

姫路市飾磨区構字権現に所在。1971年8月から9月にかけて，兵庫県教育委員会が発掘調査を行なった。舟場川の右岸，市川が形成した標高約3mの沖積平野内の谷地形部に立地する。南北に走る幅約5mの旧流路一条を検出。その中から弥生時代後期の土器とともに鍬・鋤・田下駄など若干の木器が出土している。

〔木器番号〕07412

〔文 献〕山本三郎・松下勝・他『播磨・権現遺跡－兵庫県姫路市権現遺跡調査概報－』兵庫県文化財調査報告書第6冊，兵庫県教育委員会 1972年

10 東神吉遺跡 (fig. 283) ひがしかんき

加古川市東神吉町字砂部・土江・荒木・西井ノ口にまたがって所在する。1967年1月から8月にかけて，兵庫県教育委員会と加古川市教育委員会が発掘調査を行なった。加古川の右岸にあり，扇状地状地の微高地上に立地する。標高約5mをはかり，周囲には条里制地割の痕跡が若干ある。検出した遺構は弥生時代前期と後期の土坑と溝のみで，その多くは弥生時代前期に属する。木器は調査区南端の谷部低湿地より鍬が6点出土している。いずれも未成品で，その製作工程を追うことができる。

〔木器番号〕南端低湿地；02602, 02802, 03005

〔文 献〕石野博信・松下勝『兵庫県加古川市東神吉遺跡第2次発掘調査略報』兵庫県教育委員会・加古川市教育委員会 1968年

11 玉津田中遺跡 (fig. 284) たまつたなか

神戸市西区玉津町田中に所在する。1982年から現在（1990年）に至るまで，兵庫県教育委員会が発掘調査を継続している。条里制地割が明確に遺存する明石川の右岸，標高約19mの段丘上とその下の沖積地に立地する弥生時代～古墳時代・中世の複合遺跡である。住居・水田・墓がセットで確認されており，弥生時代における明石川中流域の拠点集落である。住居群は弥生時代の全時期と古墳時代前・中期のものを確認しており，周溝墓は弥生時代前・中期に築かれている。いずれも微高地上に立地するが，弥生時代前期には住居群と墓域が別の微高地上に立地し，弥生時代中期になると同じ微高地上に立地するようになる。水田は微高地間の窪地を利用し，弥生時代前・中期，古墳時代前・中期の各時期のものがある。出土木器は質・量とも卓越し，その遺存状態もきわめて良好である。その多くは弥生時代中期に属し，主として住居群東側の旧河道から出土している。なかには未成品も多く含まれているので，生産工房も遺

跡の中にあったと思われる。

〔木器番号〕 竹添区旧河道；00317, 02404, 04405, 07806, 07811, 07813, 07816, 07828, 07829, 09707, 09717, 10823, 10825, 12313, 16002, 16016, 16502, 17303, 17309, 19606, 19805, 19815, 20019, 20105

竹添1トレンチ7区土坑1；05506 竹添1トレンチ6区土坑1；05807

竹添1トレンチ2区土坑2；11521 竹添1トレンチ7区溝3；12403, 16011

竹添1トレンチ弥生Ⅲ期包含層；12204, 12315, 16010, 16013

C6-1トレンチ水路Ⅰ；00103, 03813, 07821, 19404

KMトレンチ水路Ⅲ；07807

〔文献〕山本三郎・山本雅和・岸本一宏・他『玉津田中遺跡調査概報Ⅰ－昭和57・58年度確認調査概報－』兵庫県教育委員会1984年

深井明比古「掘り出された弥生の“むら”－神戸市玉津田中遺跡－」『季刊考古学』第19号, 1987年

兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡現地説明会資料1』1986年

兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡現地説明会資料2』1986年

12 吉田南遺跡 (fig. 285) よしだみなみ

神戸市西区玉津町に所在。吉田・片山遺跡調査団が1976年から1980年まで11次にわたって発掘調査を実施した。明石平野の西方を限る吉田・片山丘陵と明石川との間にひらけた沖積平野部に立地する。弥生時代から奈良・平安時代, 中世におよぶ複合遺跡で, 弥生・古墳時代の竪穴住居100棟以上, 真南北を基軸に整然と並んだ奈良時代後半から平安時代初期にいたる掘立柱建物34棟以上を検出した。遺跡の北東部で東南方向に流れる幅約40mの河川(旧河道)から, 多量の土器とともに木器が出土。とくに河川を横断する木橋付近での木器が多い。共伴した土器などから8世紀後半～9世紀のものと考えられる(『木器集成図録 近畿古代篇』参照)。河川の西方にある溝11や溝1からも多くの木器が出土した。

本書に収録した木器は溝1から出土した。溝1は幅2～3m, 深さ約1mで, 埋土は4層に大別できる。弥生時代後期に開削され, 須恵器出現前後には埋没したと考えられる。他の溝と複雑に重複し, 切り合いがなかったのは北部のわずか35mほどである。木器の多くは古墳時代前期の土器類とともに粘土層から出土しており, 斧膝柄・掛矢・紡輪・円板などがある。また, 径10cm程の杭を1m前後の間隔で打ち込んでおり, 同期に護岸を行なったとみられる。

〔木器番号〕溝SD1；00413, 01202, 09523, 14913, 14916

〔文献〕吉田片山遺跡調査団『吉田南遺跡現地説明会資料』1～4, 神戸市教育委員会1977～1980年

13 新方遺跡 (東方地点) (fig. 286) しんぼう (とうほうちてん)

神戸市西区玉津町新方に所在。1984年8月～10月, 同年11月～12月, 1985年8月～10月にわたる3次の発掘調査を神戸市教育委員会が実施。明石平野の下流域, 明石川と伊川とにはさまれた沖積地上に立地する。東西1.5km, 南北約1kmの範囲を占める弥生時代から鎌倉時代に至る複合遺跡で, 1970年の発見以降, 弥生時代の円形周溝墓や竪穴住居, 古墳時代の玉造

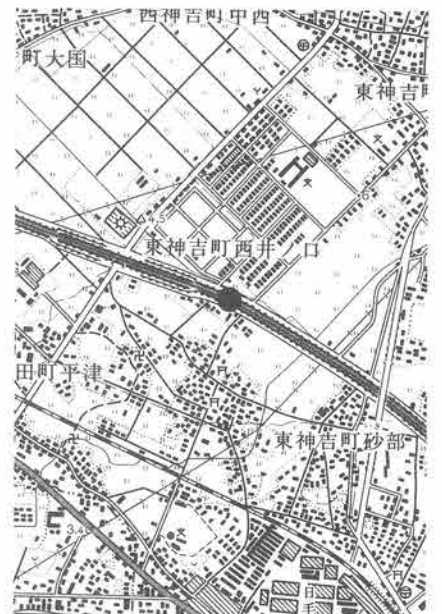


fig. 283 東神吉遺跡木器出土地点
(1:25,000 加古川)

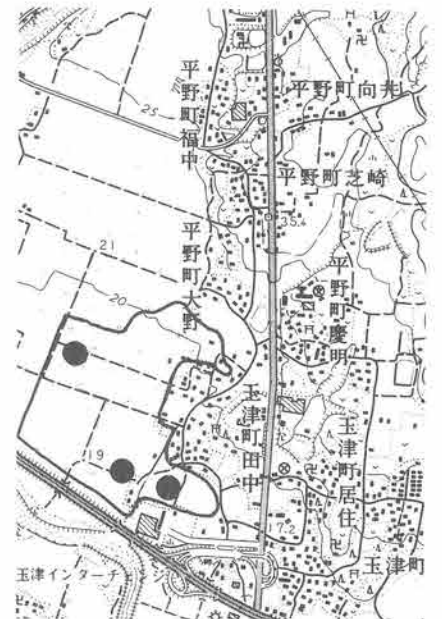


fig. 284 玉津田中遺跡木器出土地点
(1:25,000 東二見)

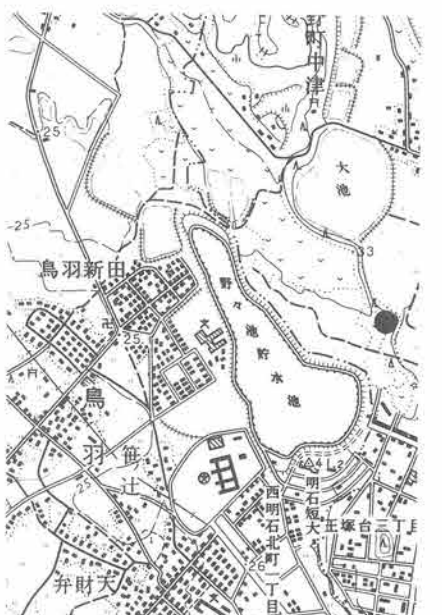


fig. 285 吉田南遺跡木器出土地点
(1:25,000 東二見)



fig. 286 新方遺跡（東方地点）木器出土地点（1:25,000 明石）



fig. 287 戎町遺跡木器出土地点（1:25,000 神戸南部）



fig. 288 北青木遺跡木器出土地点（1:25,000 西宮）

工房、鎌倉時代の掘立柱建物などの遺構を検出している。吉田南遺跡は明石川をはさんだ対岸にある。多数の木製品が出土した東方地点は新方遺跡の南端にあり、弥生時代中期の河道を検出した。河道は幅5～8.5m、深さ1.4mで北から南へ流れ、調査区の南端で二方向に分流する。収録した木器は、弥生土器・石器・碧玉原石・自然遺物とともにすべてこの河道内から出土した。木器には、鍬・鋤・又鍬・小型臼・弓・刀形・台付碗・合子・高杯・杓子・織機・環状木製品（腕輪?）・建築部材・簀などがある。共伴する弥生土器はすべて畿内第Ⅱ様式なので、これらの木器も同時期のものと考えられる。

〔木器番号〕河道；01107, 01901, 01905, 02305, 03303, 06007, 08512, 09701, 09713, 09721, 10835, 12018, 12921, 14704, 16221

〔文献〕渡辺伸行「新方遺跡（東方地点）－第1次調査－」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987年
渡辺伸行「新方遺跡（東方地点）－第2次調査－」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987年
渡辺伸行「新方遺跡（東方地点）－第3次調査－」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1988年

14 戎町遺跡 (fig. 287) えびすちょう

神戸市須磨区戎町3丁目に所在。1987年6～9月に神戸市教育委員会が発掘調査を実施（第1次調査）。妙法寺川の左岸、同川が形成した扇状地末端から沖積地への変換点に立地する。弥生時代前期後半以前の水田、前期後半の土坑や旧河道、中期の竪穴住居や溝、弥生時代末期～古墳時代初頭の土坑など4時期にわたる遺構面を検出している。

収録した木器は、弥生時代前期後半の旧河道内から、完形品を含む多量の弥生土器（畿内第Ⅰ様式新段階に併行）とともに出土している。河道の埋土は上下2層に大別でき、下層の黄色砂から鍬と編み物、上層から鍬未成品・原木などが出土。下層上面では杭を円形に打ち込んだ施設（円形杭列遺構）を6基検出しており、うち1基には鍬未成品を立てかけていたことから、木器生産に関わる施設と考えられる。

〔木器番号〕旧河道下層；01707

〔文献〕山本雅和・千種浩・他『神戸市須磨区戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会1989年

15 北青木遺跡 (fig. 288) きたおおぎ

神戸市東灘区北青木1丁目に所在する。1984年6月～7月に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施。縄文海進後の海退時に形成された3条の砂帯のうちの最北部にある砂帯上に立地する。海岸線に近く、標高は約2mと低い。砂帯上では北東方向に走る弥生時代前期の溝と、その北側にある時期不明の柱穴群を確認したのみで、遺跡の中心はさらに北側にあると思われる。砂帯間は後背湿地となっており、水田に利用されていた。収録した木器は、砂帯の南を東西に伸びる旧河道（水路）から多量の弥生時代前期の土器や石器とともに出土した。

〔木器番号〕15006, 18601

〔文献〕小川良太・山下史朗・他『北青木遺跡』兵庫県文化財調査報告書第36冊, (財)

兵庫県文化協会 1986 年

山下史朗「北青木遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和 59 年度』兵庫県教育委員会 1987 年

16 栄根遺跡 (fig. 289) さかね

川西市栄根 2 丁目・栄町に所在する。1979 年 1～2 月の第 1 次調査以降、1987 年 12 月までに兵庫県教育委員会・川西市教育委員会・川西市遺跡調査会が 22 次におよぶ発掘調査を継続している。猪名川が形成した標高 26m 前後の沖積地に立地する弥生～古墳時代、平安～鎌倉時代にまたがる複合遺跡である。古墳時代以前には、東西両微高地の間を自然河川が南流していた。西部微高地には弥生時代前期の溝や中期の方形周溝墓があり、後期には竪穴住居からなる集落を形成し、古墳時代後期まで継続する。東部微高地でも弥生時代後期の溝や古墳時代中期の竪穴住居を検出している。奈良時代には両微高地間の低地は埋没し、河川も流路を変えて北西にある台地縁辺に沿って流れ、かつての東西微高地部は水田化する。平安時代を中心とする掘立柱建物群は、主として水田の北側に分布する。

収録した紡錘は、1986 年 5 月～1987 年 12 月に実施した第 19 次調査の出土品。東西微高地の間を南流する弥生時代後期の自然河川 4 の下層から出土したもので、ほかに曲柄又鍬・梯子などの木器もある。自然河川 4 は幅 9～15m で、東部微高地の縁辺に沿って流れていたが、古墳時代前期までに埋没し水田化する。

〔木器番号〕 09514

〔文 献〕岡野慶隆『川西市栄根遺跡－第 19 次発掘調査報告－』川西市遺跡調査会 1989 年

17 原田西遺跡 (fig. 290) はらだにし

伊丹市岩屋と大阪府豊中市にまたがって所在する。1975 年 11 月より 1983 年 9 月にかけて、兵庫県教育委員会が継続的に発掘調査を実施した。猪名川の左岸に形成された沖積地内の、南北に伸びる微高地上に立地する。広義的には次項で述べる田能遺跡もこの微高地の南端に立地することになる。標高は約 6m で、周囲には条里制地割が見られる。弥生時代中期の方形周溝墓 11 基と古墳時代前期・中世・近世の溝を検出した。木器は遺跡の北西部にある弥生時代中期の溝 (Y-1 溝) 内と、周溝墓群の西側を南北に流れる弥生時代から古墳時代にかけての自然流路 (Y-18 溝) 内から出土している。Y-18 溝は一部を杭で護岸している。

〔木器番号〕 Y-1 溝 ; 04404 Y-18 溝 ; 05705, 07809

〔文 献〕森内秀造「原田西遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第 14 回研究集会資料 1983 年

加古千恵子「原田西遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和 56 年度』兵庫県教育委員会 1984 年

森内秀造「原田西遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和 58 年度』兵庫県教育委員会 1986 年

17 田能遺跡 (fig. 291) たのう

尼崎市田能字中ノ坪に所在する。1965 年 10 月より 1966 年 9 月にかけて、尼崎市教育委員会と尼崎市田能遺跡発掘調査委員会が発掘調査を行なった。標高約 7m をはかる沖積平野内の微

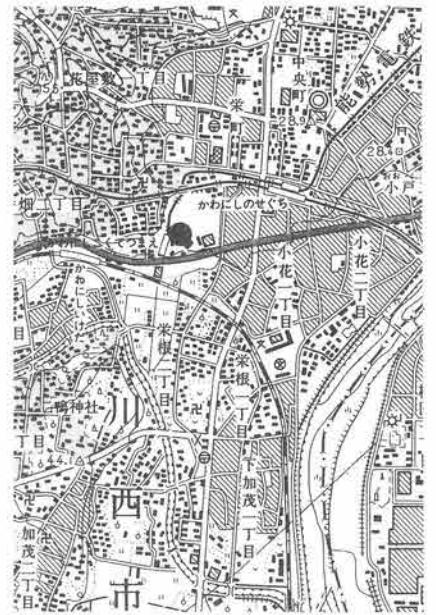


fig. 289 栄根遺跡木器出土地点
(1:25,000 伊丹)

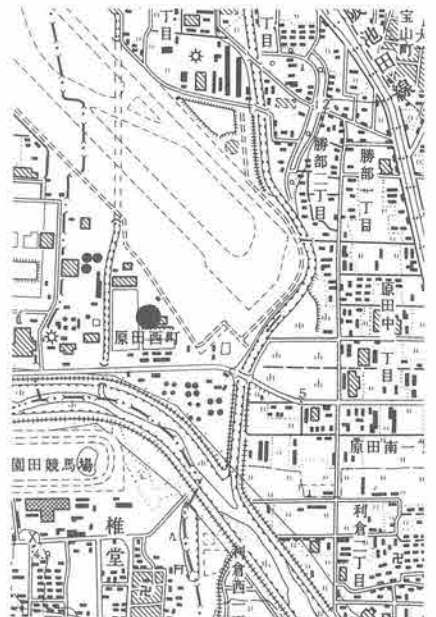


fig. 290 原田西遺跡木器出土地点
(1:25,000 伊丹)

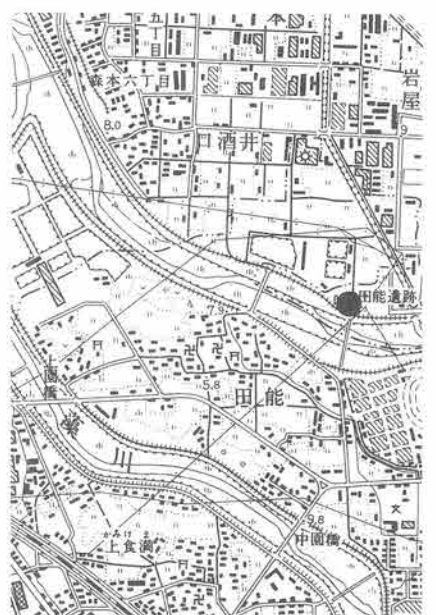


fig. 291 田能遺跡木器出土地点
(1:25,000 伊丹)

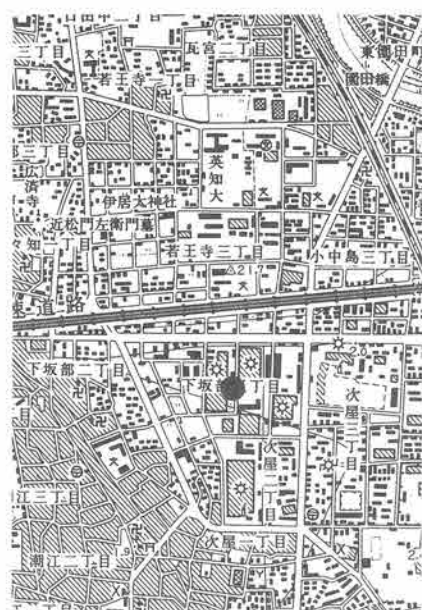


fig. 292 下坂部遺跡木器出土地点
(1:25,000 大阪西北部)

高地上にあり、猪名川の左岸に位置する。弥生時代前期から古墳時代前期にまたがる複合遺跡である。竪穴住居は弥生時代中期のものが3基のみであるが、弥生時代中期から後期の土器棺墓、同後期の木棺墓、弥生時代中期と古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代前期の木蓋土坑墓、多量の土器を包含する各時代の溝や土坑などを検出した。木棺墓などには遺存状態が非常に良い人骨もみられ、その一部では多数の管玉、銅釧などを副葬していた。また、弥生時代中期の土坑の一つからは、銅剣の鋳型の破片も出土した。木器の匙および片口未成品(?)は、弥生時代後期の溝(第6 Y調査区第2溝)から出土した。

〔木器番号〕 12311, 12712

〔文 献〕 須崎元一・村川行弘・他『田能遺跡概報』尼崎市文化財調査報告第5集, 尼崎市教育委員会・尼崎市田能遺跡発掘調査委員会 1967年

福井英治・岡田務・村川行弘・他『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第15集, 尼崎市教育委員会 1982年

19 下坂部遺跡 (fig. 292) しもさかべ

尼崎市下坂部字溝手に所在。1950年から1973年にかけて尼崎市教育委員会が継続的に発掘調査を行なった。猪名川(藻川)の形成した沖積平野内の微高地南端に立地する。標高は約4mをはかり、周囲に条里制地割がみられる。顕著な遺構は確認されていないが、弥生時代後期から古墳時代前半の土器とともに、滑石製の勾玉、重圈素文鏡などが出土している。木製の扉板は古墳時代前半の井戸枠に転用したものである。この井戸は祭祀的な性格をもつが、周辺の遺構は未確認である。

〔木器番号〕 19009

〔文 献〕 村川行弘「考古学からみた尼崎」『尼崎市史』第1巻, 尼崎市役所 1966年

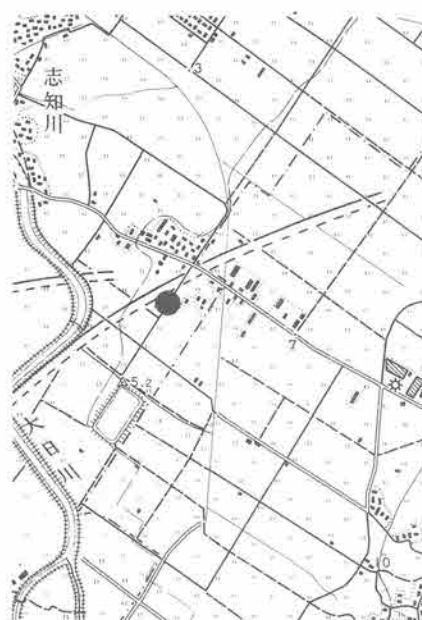


fig. 293 淡路・志知川沖田南遺跡木器出土地点 (1:25,000 広田)

20 志知川沖田南遺跡 (fig. 293) しちがわおきたみなみ

三原郡西淡町志知川に所在する。1978年7月より1982年9月まで継続的に兵庫県教育委員会が発掘調査を行なった。遺跡は三原川の形成した沖積平野にあるが、微地形でみるとその支流である大日川右岸の谷状地形の中に立地する。河口に近いので、標高は約10cm以下である。弥生時代終末から古墳時代前半にまたがる3面の水田跡と溜め池状遺構、旧河道などを確認した。北東に隣接する微高地には、この水田に対応する集落と思われる雨流遺跡がある。木器は北側の旧河道から出土しており、水田跡と同時期のものと思われる。

〔木器番号〕 04902, 09120

〔文 献〕 松下勝・別府洋二・水口富雄・他『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県文化財報告書第40冊, 兵庫県教育委員会 1987年

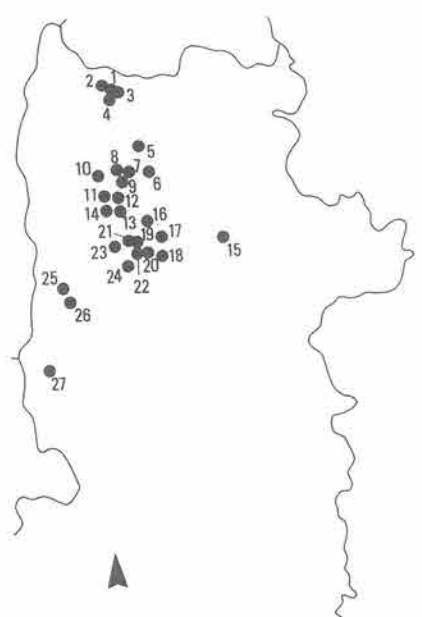


fig. 294 奈良県の木器出土遺跡

F 奈良県

1 平城宮下層遺跡 (fig. 295) へいじょうきゅうかそう

奈良市佐紀町を中心に所在。1959年以降、奈良国立文化財研究所が発掘調査と保存整備を継続している「特別史跡・平城宮跡」内にある宮造営以前の遺跡群の総称。弥生～古墳時代の

集落や自然流路、削平された古墳、7世紀の寺院や下ッ道側溝などがある。その多くは平城宮造営時に削平を受けたり、整地土下に埋没しており、主として奈良時代の遺構が稀薄な部分のみで完掘しているため、全貌は必ずしも明らかではない。

平城宮跡は奈良盆地の北端、京都府との境界をなす奈良山丘陵から東南に伸びる支丘の南麓に立地する。宮造営以前には、宮域北部で西・中央・東の3つの小支丘が南にのび、その間は浅い谷となり、南に平野がひろがっていた。中央小支丘の尾根上には5世紀の前方後円墳である市庭古墳（平城陵古墳）・神明野古墳、丘陵先端には7世紀後半の佐紀廃寺、宮域西南隅の微高地上には弥生V期の集落や墓地、南の平野部には古墳時代の集落が存在した。収録した木器は、谷から平野部を流れる旧流路や、集落にともなう人工水路から出土している。

〔文 献〕佐藤興治・町田章・他『平城宮発掘調査報告X』奈良国立文化財研究所学報第39冊、奈良国立文化財研究所1981年

a 宮域西南隅の下層溝SD1579（6ADH-J区）

1963年度に実施した平城宮西南隅の発掘調査（第14次調査）において、弥生V期の集落・墓地を検出した。遺構には竪穴住居10棟、溝数条、方形周溝墓10基、壺棺墓2基、土坑多数などがある。収録した木器は、西南から北東にのびる2条の斜行溝のうちの北溝SD1579から出土した。溝の幅は3.5m、深さ1.5mで、流路方向は旧秋篠川に直交し、居住区や墓域を画す境界溝のひとつと考えられる。弥生V期の土器とともに、鋤身・泥除・杓子形木器などが出土。

〔木器番号〕01805, 03807, 12202

〔文 献〕横山浩一・工楽善通「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1965』1965年

b 佐紀池の下層河川SD8520（6ACA-W区）

平城宮跡の西北部、佐紀西町と佐紀中町との間にある佐紀池は、明治17年に築堤し、狭い谷筋に湛水した灌漑用溜池であるが、1974年度の第92次調査において奈良時代の池汀を検出し、前身が平城宮内園池SG8500であることが判明した。1976年度の第101次調査では、現佐紀池の北岸を発掘調査し、奈良時代園池の堆積土を除去した地山面で、古墳時代の流路2条と堰2ヶ所を検出した。宮造営以前の旧地形では、西と中央の小支丘の谷間にあたる。収録した木器は、調査区中央を北から南へ流れる河川SD8520から出土。河幅は約5m、深さ1.0mで、途中で2つに分流する。分流地点には堰SX8524を設ける。埋土は3層に大別でき、各層から4世紀の土師器・木器・自然木・種子・昆虫遺体が出土している。

〔木器番号〕05003, 06406, 06908, 09102, 09113, 09714, 12219, 18519, 19210, 20001

〔文 献〕佐藤興治・町田章・他『平城宮発掘調査報告X』奈良国立文化財研究所学報第39冊、奈良国立文化財研究所1981年

c 東院地区南端の下層河川SD4992（6AAG-G, 6AAH-R, 6ALS-I区）

東院地区は、宮造営以前の旧地形では、東小支丘およびその西側の谷間を含む。1966・1967年度に実施した第39・43次調査では、この東小支丘の南端において、削平された一辺10mの方墳SX5700、掘立柱建物SB5755、土坑、河川SD4992などの下層遺構を検出した。木器が

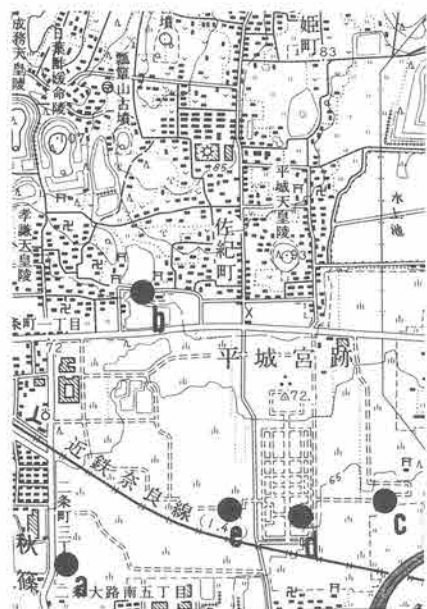


fig. 295 平城宮下層遺跡木器出土地点
(1:25,000 奈良)

第Ⅲ章 遺跡解説

出土したS D4992は、北西から南に向けて「く」の字形に屈曲して流れ、小子門の東を通過して宮域外へと伸びる。幅3～4m、深さ0.6mで、5世紀初頭の土師器とともに斧膝柄・一木鋤・鋤柄・横槌・刀形などの木器が出土している。

〔木器番号〕00407, 05312, 06504, 06602, 06702, 06707, 06910, 09123, 09521, 14912, 15113, 16202, 16218, 17105, 19901, 20110

〔文 献〕猪熊兼勝・森郁夫「昭和41年度平城宮発掘調査概報」『奈良国立文化財研究所年報1967』1967年

阿部義平「奈良国立文化財研究所要項」『奈良国立文化財研究所年報1968』1968年

d 第2次朝堂院地区東朝集殿の下層河川S D6030（6 A A W-B, 6 A A X-A区）

1968年度に実施した第48次調査では、第2次朝堂院の東朝集殿S B6000の下層において、北西から南東に向けて蛇行して流れる河川S D6030を検出した。宮造営以前の旧地形では、中央小支丘の南端裾にあたる。河幅は4～6m、深さ0.9～1.3mで、埋土は上下2層に大別できる。木器は両層から出土しているが、これに伴う土器群には明瞭な時期差がある。

〔木器番号〕S D6030下層；00404, 02104, 02202, 04507, 05303, 05315, 07901, 10610, 14201, 15304, 18910, 19106, 19107, 19602

S D6030間層；00406

S D6030上層；00309, 01207, 03610, 04907, 05809, 06404, 07415, 07701, 07905, 09215, 09808, 09810, 11511, 11512, 17106, 17202, 17311, 17812, 18023, 18408, 19710, 19720

出土層位不詳；01120, 01121, 12203, 13801, 15303, 15905, 17104

〔文 献〕佐藤興治・町田章・他『平城宮発掘調査報告X』奈良国立文化財研究所学報第39冊，奈良国立文化財研究所1981年

e 第1次朝堂院地区南方の下層河川S D11000と堰11005（6 A B H・J・W-A・B地区）

第1次朝堂院の南方には竪穴住居・掘立柱建物から成る古墳時代の集落が存在した。1982年度の第146次調査，1985年度の第171次調査では、この集落を東端を蛇行しながら北から南へ貫流する河川S D11000を検出し、多量の土師器、少量の須恵器とともに多数の木器が出土した。河幅は4～6m、深さ1.5mで、その埋没後、小規模な河川S D11001がやや東にずれて南流するが、両者の出土木器を弁別するに至っておらず、本書ではS D11000出土品として一括している。第146次調査区では、S D11000の底で横木を組んだ堰状遺構を検出しており、この周辺で出土した木器は、堰S X11005出土として別記した。

〔木器番号〕S D11000；00303, 00315, 00411, 00412, 00512, 01102, 01109, 01117, 01201, 01511, 03607, 03810, 04307, 04504, 04605, 04808, 04904, 04905, 05209, 06906, 06907, 06909, 07902, 08005, 08519, 08906, 09017, 09315,

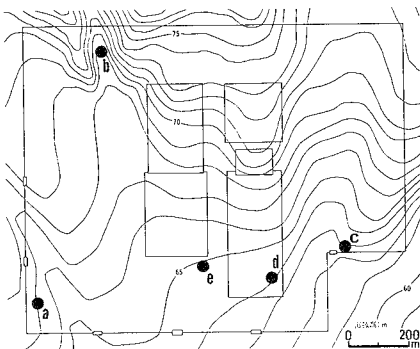


fig. 296 平城宮の旧地形と下層遺構の
関係

09316, 09404, 09712, 10840, 10841, 11310, 11316,
11401, 11408, 11524, 11529, 11706, 13305, 13501,
13601, 13603, 14406, 14918, 15803, 16113, 16203,
17115, 17802, 17807, 17810, 17811, 18016, 18017,
18204, 18211, 18310, 18313, 18505, 18610, 18617,
18618, 18712, 18809, 18906, 19104, 19203, 19316,
20006, 20113

堰 S X11005 ; 00409, 00414, 05107, 05208, 09317, 09522, 18719,
20003, 20015

〔文 献〕 杉山洋「第一次朝集殿推定地の調査 第146次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査
部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1983年

花谷浩「推定第一次朝堂院東朝集殿地区の調査」『昭和60年度平城宮跡発掘調査
部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1986年

2 西隆寺下層遺跡 (fig. 297) さいりゅうじかそう

奈良市西大寺東町に所在。西隆寺は8世紀後半に称徳女帝が建立した官宮の尼寺で、寺地は平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪の4町を占める。1971～1973年に西隆寺調査委員会、1982年に奈良大学文化財学科、1989～1990年に奈良国立文化財研究所が計10次にわたる発掘調査を実施し、金堂・塔・東面回廊・東門および西隆寺造営以前の各期の遺構を検出している。

西隆寺下層遺跡は寺造営以前の遺構の総称で、縄文晩期の溝、古墳時代の土器溜、8世紀前半～中頃の平城京条坊や宅地に関連する遺構がある。収録した刀の木製把頭は、西隆寺東門の西北方で検出した古墳時代の土器溜と考えられる包含層 S X037から出土した。須恵器・土師器・少量の製塩土器と糸巻腕木が共伴している。なお、糸巻腕木は『木器集成図録 近畿古代篇』に収録した。

〔木器番号〕 11305

〔文 献〕 黒崎直・他『西隆寺発掘調査報告書』西隆寺跡調査委員会 1976年

3 平城京下層遺跡 (fig. 298) へいじょうきょうかそう

平城京内における条坊制施行以前の遺構群をさす一般名称であるが、本図録では奈良市二条大路南一丁目に所在する奈良市庁舎建設工事に伴う発掘調査で検出した遺構をさす。正確には、平城京左京三条二坊十・十五坪下層遺跡である。1972年の予備調査成果を踏まえ、1973年8～10月、1974年2～6月に奈良国立文化財研究所が発掘調査を実施（6 A F I - H・G区 第83・86次調査）。平城京条坊・宅地に関する遺構と古墳時代の河川2条、中世河川の氾濫跡を検出した。収録した木器は、調査区の東から西南西に向かって流れる2条の河川のうちの南側の河川 S D881から出土した。幅3～7.5m、深さ1.2mで、埋土は3層に大別できる。大量の土師器、少量の須恵器とともに、農具・祭祀具・雑具の各種木器が出土した。

〔木器番号〕 01203, 03503, 03701, 05005, 05006, 05007, 05313, 06607,
06703, 06710, 07009, 08813, 09114, 09405, 09406, 09501,
11414, 11417, 13311, 13702, 14901, 15108, 16112, 16417,
16504, 16713, 17005, 17006, 17007, 17009, 17219, 17505,



fig. 297 西隆寺下層遺跡木器出土地点
(1:25,000 奈良)



fig. 298 平城京下層遺跡木器出土地点
(1:25,000 奈良)

17705, 18002, 18005, 18008, 18012, 18019, 18021, 18024,
18209, 18213, 18309, 18406, 18409, 19407

〔文 献〕町田章・他『平城京左京三条二坊』奈良国立文化財研究所学報第25冊, 奈良国立文化財研究所1975年



fig. 299 平城京朱雀大路下層遺跡木器
出土地点 (1:25,000 奈良)

4 平城京朱雀大路下層遺跡 (fig. 299) へいじょうきょうすざくおおじかそう

奈良盆地を南北に縦貫する下ッ道の北端, 平城京の羅城門から朱雀門に至る京の中心街路。1974年2～3月に奈良国立文化財研究所が奈良市柏木町・六条町に所在する五条・六条の条間路との交差点において発掘調査を実施。朱雀大路の東西両側溝およびこれに先行する下ッ道の東西両側溝と古墳時代の河川を検出した。収録した木器は, 調査区西端の右京六条一坊二坪(6AIA区)下層で検出した古墳時代の河川から出土。幅3～4m, 深さ約1.5mで, 北西から南東に向かって流れる。埋土は3層に大別でき, 下層(砂質土)から土師器と組合せ鋤身・曲柄鋤身・田下駄梓木・豎杵未成品などの木器, 中層(黒灰色粘土と砂の互層)から大量の土師器と少量の木器, 上層(灰色粘土)から大量の土師器と少量の須恵器が出土した。収録した木器は, すべて下層の出土品である。

〔木器番号〕05803, 07603, 08901, 18022

〔文 献〕黒崎直・他『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市1974年

5 和爾・森本遺跡 (fig. 300) わに・もりもと

天理市森本町・和爾・櫛町に所在する弥生～古墳時代の集落跡。奈良盆地の東辺, 大和高原の西を限る春日断層崖下の丘陵のうちの虚空蔵山丘陵の西端および丘陵裾部に立地する。工場建築に伴い, 1975年から橿原考古学研究所が発掘調査を行なっている。1975年の1次調査では井戸などを検出した居住区と, 古墳時代前期～中期にかけての遺物を多く含む川跡を検出した川跡地区(上流部)との2ヶ所を調査した。1978年の2次調査では削平された古墳の周溝を, 1979年の3次調査では1次調査で検出した川跡の下流部分を調査し, 川跡と岸辺に営まれた遺構群を検出している(川跡地区下流部, 川岸地区)。収録した木器は, 1次調査における居住区(1区)の溝SD03と井戸SE03, 3次調査における川岸地区(3区)の井戸SE03, 1・3次調査で検出した川跡から出土している。

〔文 献〕中井一夫・他『天理市 和爾・森本遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第45冊, 奈良県教育委員会1983年

a 居住区(1区)の溝SD03と井戸SE03

居住区(1区)は小さな谷状地形部と南にある櫛川の大きな谷とにはさまれた丘陵裾に立地する。SD03は谷状地形部に沿って流れる古墳時代後期の溝で, 幅1.3m, 深さ0.5mをはかる。6世紀の須恵器とともに, 転用材を利用した横槌が出土した。

この谷状地形部の南には, 時期を異にする4基の井戸がある。SE03は古墳時代後期中葉の井戸で, 二段掘りの掘形内に建築部材を転用した井戸枠を組む。上段掘形は2.0m×1.3mの長方形を呈し, 深さ0.3m。下段掘形は径約1.2mの円形を呈し, 深さ1.5m。井戸枠は, 東西側板には大型の長方形板材各2枚を縦に使い, 南北側板には小型の長方形板材を横に使って組みあげる。南側板は7段, 北側板は6段が遺存する。井戸内の埋土は黒色有機質土の単一層で, 須

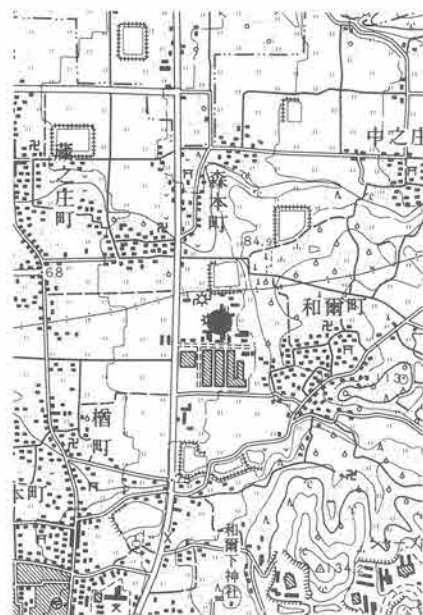


fig. 300 和爾・森本遺跡木器出土地点
(1:25,000 大和郡山)

恵器・土師器とともに、曲柄鍬身・横槌・斎串・刀形などの木器が出土した。

〔木器番号〕溝S D03; 19521 井戸S E03; 04709, 09208, 16401

〔文 献〕同上

b 川岸地区（3区）の井戸S E05

川岸地区は南東から北西に向かって流れる旧流路（川跡地区）の右岸に広がる。弥生時代中期の方形周溝墓2基、同後期の円形周溝墓1基・壺棺墓1基、古墳時代中期の円墳1基のほか、溝・土坑・井戸などを検出している。

木器が出土した井戸S E05は、径2.0m、深さ1.6mの掘形をもつ。掘形底で刳抜きの井戸枠を据えた痕跡を確認したが、井戸枠本体は残っていなかった。埋土の中位（黒色粘土）から、須恵器器台片・各種土師器とともに曲柄又鍬身・槽・腰掛脚などの木器が出土した。木器はいずれも破損していた。

〔木器番号〕18003

〔文 献〕同上

c 川跡地区

1・3次調査で南東から北西に流れる旧流路（川跡）を検出した。1次調査では上流部の片岸を検出したにとどまるが、3次調査でその規模が幅約42m、深さ2mと確認できた（下流部）。下流部では数時期に重複する川跡を検出し、弥生時代後期には流れのとまったもの（Ⅰ期）、古墳時代前期には流れのとまったもの（Ⅱ期）、古墳時代中期末に流れのとまったもの（Ⅲ期）の3時期の流路に識別できた。Ⅲ期の流路は中州を挟んで幅7mの北流路と幅20mの南流路とに分流している。Ⅲ期の堆積土は3層に大別できる。上層では弥生～古墳時代前期の土器が混じるが、古墳時代中期の土師器が主体をなし、初期須恵器を含む。中層は古墳時代前期～中期の土師器が主体をなし、須恵器は含まない。下層からは弥生時代後期から古墳時代中期にかけての土器が混在して出土している。木器は、上流部から扉板・妻覆いなどの建築部材、下流部のⅠ期流路上層から竪杵、Ⅱ期流路から布（経）巻具と部材、Ⅲ期北流路下層から斧膝柄・曲柄又鍬身・縦櫛・鞘・部材、Ⅲ期北流路中層から机脚と部材、Ⅲ期南流路および北流路との合流点付近から曲柄又鍬とその柄・槽などが出土している。

〔木器番号〕上流部; 19004 下流部Ⅰ期上層; 08807

下流部Ⅱ期; 18911 下流部Ⅲ期北流路下層; 00307, 12010

下流部Ⅲ期南流路; 05307 下流部Ⅲ期北流路中層; 18014, 18701

〔文 献〕同上

6 布留遺跡 (fig. 301) ふる

天理市布留・三島・豊井・豊田・柚之内町にわたって所在する。布留川右岸に形成された扇状地上、および左岸の河岸段丘上に立地する。1938年に最初の発掘が行われ、1971年以降、埋蔵文化財天理教調査団が継続的に調査している。縄文時代早期～晩期、弥生時代中期から近世に至るまでの複合遺跡であるが、主体をなすのは古墳時代中期～後期のものである。祭祀跡・玉工房・鉄工房関係の遺物も出土している。

木器は三島（里中）地区で出土した。調査は1978年10月～1981年4月の間に断続的に行なっ

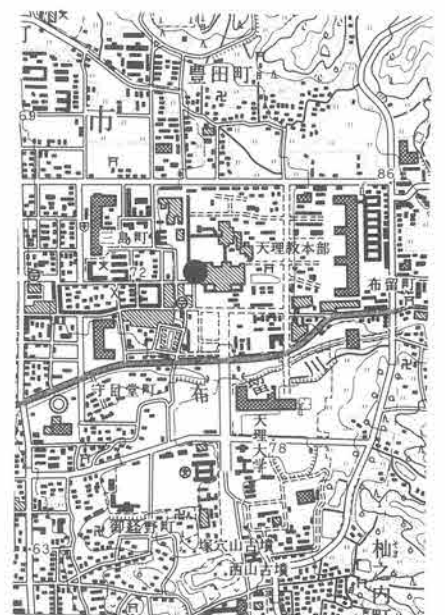


fig. 301 布留遺跡木器出土地点
(1:25,000 大和郡山)

た。木器が出土した遺構は布留川から分岐した流路中で、古墳時代中期～後期のものと、古墳時代後期～奈良時代のものの計2条がある。共伴した土器から、前者の年代は5世紀から6世紀前半までと推定できる。木器には刀剣の鞘・把頭や弓などの武器類のほかに機織具の部分、容器、農具などがある。武器類や機織具などの割合が多く、武器類のなかには実用ではないものも多く含まれている。古墳時代後期～奈良時代の流路で出土した木器のうち、奈良時代のものは『木器集成図録 近畿古代篇』に収録し、古墳時代後期と考えられる曲柄又鋏身・糸巻支え木・矢・琴・叩板、机天板は本書に収録した。

〔木器番号〕古墳時代中期～後期旧流路；01603, 04602, 05106, 06708, 08517, 08523, 09205, 09214, 09407, 09408, 09409, 09517, 11201, 11202, 11203, 11204, 11205, 11206, 11207, 11208, 11209, 11211, 11212, 11301, 11302, 11303, 11304, 11317, 11318, 11319, 11402, 11404, 11405, 11406, 11407, 11415, 11418, 11419, 11510, 12008, 13605, 13704, 15106, 16111, 16219, 16410, 16505, 16512, 17212, 17403, 17709, 18106, 19718, 19812, 19814, 19905, 19913, 20013, 20014

古墳時代後期～奈良時代旧流路；04807, 09605, 11513, 15611, 17103, 17506

〔文献〕布留遺跡天理教調査団（改め埋蔵文化財天理教調査団）『出土木器の樹種と木取りⅠ・Ⅱ』布留遺跡研究中間報告3 1981年
置田雅昭「古墳時代の木製把装具」『天理大学学報』第145輯，天理大学1985年
置田雅昭「古墳時代の木製刀剣鞘装具」『考古学雑誌』第71巻第1号，日本考古学会1985年

7 九ノ坪・シマダ遺跡 (fig. 302) きゅうのつぼ・しまだ

天理市前栽町の北約200m，標高55～57mの平坦な水田地帯に所在する。天理市教育委員会が1982年に発掘調査を実施した。道路予定地のため東西の広がり確認できたが，南北は幅14mを調査したにすぎない。検出した遺構は溝1条と土坑群である。溝の北岸部から玉製品，碧玉・グリーンタフ・滑石のチップや未成品などが出土し，玉作関係の遺跡であることが判明した。本図録には収録していないが，溝からは一木鋤・机天板などの木器も出土している。

収録した木器は土坑SK2・SK3から出土したもの。土坑SK2は径1m，深さ約1.2mで，自然木の細い枝をまわりに立てかけており，底中央には土師器壺を逆位に置いていた。木錘・横槌などの木器が共伴。木器・木片はすべて火を受けていた。土坑SK3は径約1.2m，深さ約1mで，滑石の屑石や多量の土器とともに木錘・火鑽臼などの木器が出土した。これらの溝・土坑の年代は5世紀後半から6世紀前半ごろに推定できる。

〔木器番号〕土坑SK2；09323 土坑SK3；09423, 17205
出土地点不詳；19405



fig. 302 九ノ坪・シマダ遺跡木器出土地点 (1:25,000 大和郡山)

〔文 献〕 泉 武『天理市前栽町九ノ坪・シマダ遺跡発掘調査概報』天理市教育委員会 1983 年

8 星塚 1・2 号墳 (fig. 303) ほしつか

天理市二階堂上之庄町ホシツカに所在する。2 号墳は古くから知られており、1952 年に奈良県教育委員会が円墳状に残る墳丘部を調査し、横穴式石室を確認した（小島俊次「奈良県天理市上之庄 星塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第 7 輯，奈良県教育委員会 1955 年）。1985 年に 2 号墳の東側において天理市教育委員会が発掘調査を実施し、2 号墳の周濠とそれに先行する 1 号墳の存在を確認した。2 号墳の周濠は二重で、その形態から 2 号墳は東西に主軸を置く前方後円墳である可能性が強くなった（前方部側は未調査）。1 号墳も東西に主軸を置く全長 38m の前方後円墳であるが、墳丘は完全に削平されて濠のみを残す。濠幅は 8～10m、深さ 1m 足らずである。

収録した木器は 2 号墳内濠および 1 号墳周濠から出土した。1 号墳は木器が豊富で製品のほか切屑などの加工片もかなり出土し、コウヤマキ・ヒノキの比率が高い。

1 号墳の前方部濠が 2 号墳の外濠掘削時に一部破壊されていたが、1・2 号墳から出土した須恵器、埴輪とも顕著な型式差が認められない。1 号墳の築造は 6 世紀前半であるが、時期をあまりへだてず 2 号墳が造営されたのであろう。

〔木器番号〕 2 号墳内濠；14002

1 号墳周濠；01119, 07506, 15801, 18205, 18206, 18706

〔文 献〕 泉 武・他『星塚・小路遺跡の調査』天理市埋蔵文化財調査報告第 4 集，天理市教育委員会 1990 年

9 平等坊・岩室遺跡 (fig. 304) びょうどうぼう・いわむろ

天理市の西部、平等坊町から岩室町にかけて所在する弥生時代集落跡。遺跡の東北隅にあたるヒライ池の改修工事に伴い、1981 年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。同地点では弥生時代の遺構に重複して推定長 45～55m の西面する前方後円墳が築かれており、調査地はこの後円部南裾に相当する。下層の遺構は弥生時代中期から後期にかけての溝、土坑が主体である。古墳は墳丘裾部を巡る円筒・形象埴輪から 6 世紀前半期の築造と考えられる。収録した木器はこの調査時の包含層から出土した。しかし、同層では弥生時代前期後半から古墳時代後期前半までの遺物が錯綜しており、この木器の時期確定はできず、古墳に伴うものかどうか不明である。

〔木器番号〕 19510

〔文 献〕 楠元哲夫・他『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第 2 集，天理市教育委員会 1985 年

10 東安堵遺跡 (fig. 305) ひがしあんどう

生駒郡安堵町南部の岡崎川右岸に所在する。付近は奈良盆地の主要河川が合流する場所で、1982 年 8 月 2 日の豪雨では調査中の遺構が完全に水没して一週間以上排水されなかった。発掘調査は住宅開発に伴い奈良県立橿原考古学研究所が実施した。検出した遺構には土坑・溝などがある。土坑は 288 ヶ所におよび、土器片が 1 片でも出土した土坑は 124 ヶ所にのぼる。明

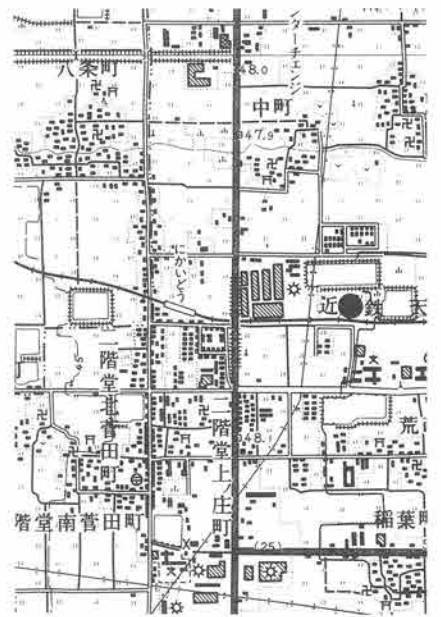


fig. 303 星塚 1・2 号墳木器出土地点
(1:25,000 大和郡山)

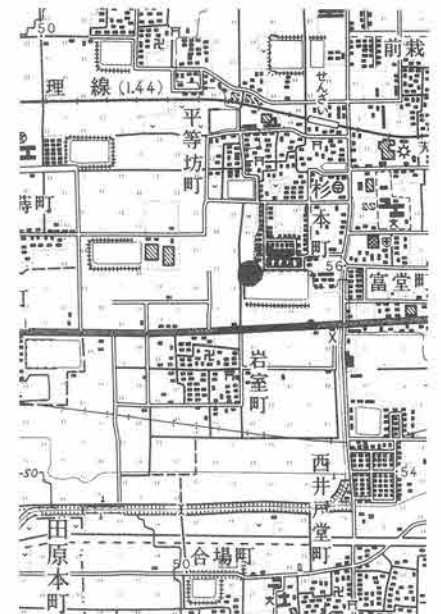


fig. 304 平等坊・岩室遺跡木器出土地点 (1:25,000 大和郡山)

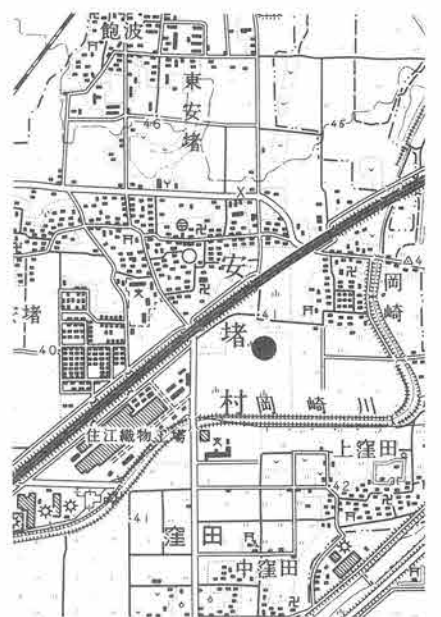


fig. 305 東安堵遺跡木器出土地点
(1:25,000 大和郡山)

らかに土坑内に土器を据え置いたと推測できるものも20ヶ所あり、弥生第Ⅴ様式後半～縄向3式の時期のものを含む。土坑群が立地する微高地からやや下った低地部からも完形品を含む多数の甕・壺が出土した。

収録した木器は土坑49、NE南落ち込み（Ⅰ・Ⅱ区間低地部）、古墳時代中期後半の溝SD03から出土した。土坑49は1.5×1.3m、深さ0.2mで、弥生Ⅴ期後半の甕と曲柄鍬身が出土。SD03は幅1.5～2m、深さ0.2mで、西北から東南に流れる。埋土は上下2層に大別でき、下層から須恵器・土師器とともに、田下駄などの木器が出土した。

〔木器番号〕土坑49；04506 NE南落ち込み；13222 溝SD03；07413

〔文 献〕泉 武『東安堵遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第46冊，奈良県教育委員会1983年



fig. 306 石見遺跡木器出土地点
(1:25,000 初瀬)

11 石見遺跡 (fig. 306) いわみ

磯城郡三宅町玉子に所在する。寺川の西岸にあたる標高47mの低地に立地している。寺川の堤防復旧工事の際多くの埴輪が出土したことを契機として1931年に1次調査が実施され、宅地造成に伴い1966年に橿原考古学研究所が2次調査を行なった。遺構の性格に関しては諸説があるが、径約30mのほぼ円形の高まりを巡る幅6mの濠とその屈曲部を検出しており、短い前方部を伴う埴輪長35m以上の前方後円墳が削平された跡の可能性が大きい。濠から鳥形・笠形・刀形・杭・棒状の各種木器と、人物・馬・鹿・盾形埴輪および円筒埴輪などが出土している。2次調査の所見では、埴輪は濠内側の斜面沿いに倒れた状態であったのに対し、木製品は濠内を中心に出土したという。笠形木器は20個体以上出土しており、大きさは36cm前後のものと30cm前後のものがある。鳥形木器は4個体あり、いずれも長さ1mをこえる大型品で、胴部の中央に長方形の貫通孔がある。伴出した須恵器・円筒埴輪から、6世紀前半から中葉にかけての時期が考えられる。収録した笠形木器は1次調査の出土品である。

〔木器番号〕16905, 16906

〔文 献〕末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13冊，奈良県教育委員会1935年

千賀久「石見遺跡資料」『大和考古資料目録』第15集，奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1988年

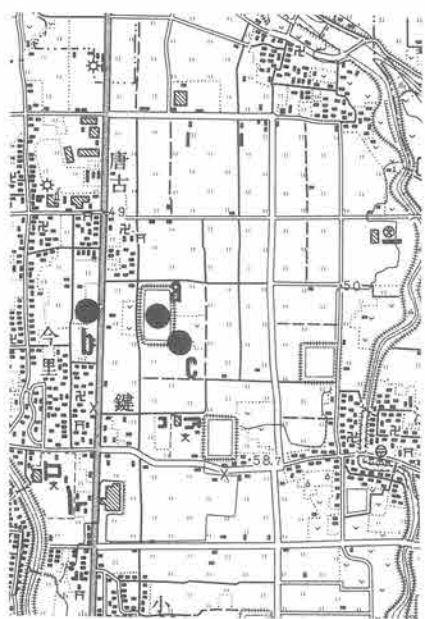


fig. 307 唐古・鍵遺跡木器出土地点
(1:25,000 桜井)

12 唐古・鍵遺跡 (fig. 307) からこ・かぎ

磯城郡田原本町唐古・鍵に所在する弥生時代の集落跡。大和盆地のほぼ中央、標高50m前後の水田地帯に位置する。1936～1937年に唐古池内で奈良県・京都大学が発掘調査を実施（唐古遺跡第1次調査）。畿内弥生土器の編年体系を確立し、弥生文化を理解する上での基盤を提供した。1977年には奈良県立橿原考古学研究所が第3次調査を実施し、集落の南限を確認するとともに、遺構が鍵地区にも広く及ぶことから「唐古・鍵遺跡」と遺跡名称を変更。以後、奈良県立橿原考古学研究所および田原本町教育委員会が発掘調査を継続している。

収録した木器は、唐古遺跡第1次調査において各種遺構から出土したもの、および田原本町教育委員会が実施した唐古・鍵遺跡第13・19・26次調査で出土したものである。

a 唐古遺跡 第1次調査

約15000㎡におよぶ唐古池内の調査では、「北方砂層」「中央砂層」「南方砂層」と呼んだおおよそ3条の河道と、「堅穴」と呼んだ107基以上の土坑・井戸・貯木施設などが検出されている。収録した木器のうち、弥生Ⅰ期のものはA号・G号・1号・13号・40号・49号・56号・57号・60号・65号・78号・80号・84号・87号・88号・97号・99号・101号地点「堅穴」と「中央砂層」、弥生Ⅳ期のものは27号・82号地点「堅穴」と「北方砂層」などから出土している。

〔木器番号〕A号地点堅穴；09118, 12002, 12404, 13104, 13114

G号地点堅穴；08704

1号地点堅穴；13113

13号地点堅穴；07201

40号地点堅穴；02603

49号地点堅穴；12501

56号地点堅穴；00903

57号地点堅穴；12917

60号地点堅穴；12307, 12811

65号地点堅穴；13102, 13202, 15403

80号地点堅穴；08606

78号地点堅穴；02803, 02808, 12509

84号地点堅穴；13002

87号地点堅穴；12508

88号地点堅穴；01704, 13006

97号地点堅穴；01301, 01706, 08604

99号地点堅穴；00902, 09719, 12810, 16105

101号地点堅穴；08602

中央砂層；01401, 10904, 10905, 11113

27号地点堅穴；03306

82号地点堅穴；12505, 13213

北方砂層；02605

出土地点不詳；00509, 00510, 01304, 01305, 02310, 08610,

09703, 10505, 12019, 12301, 12407, 12803,

12818, 12908, 12913, 12914, 12916, 13215,

14001, 15502, 15603, 16103, 16106, 18703,

18919, 19511, 19518, 19705, 19707

〔文献〕末永雅雄・小林行雄・他『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊，京都帝国大学1943年

b 唐古・鍵遺跡 第13・19次調査

田原本町教育委員会が1982年（第13次調査）と、1984年（第19次調査）に実施。両調査区とも唐古・鍵遺跡の西部に位置し、第19次調査区は第13次調査区の南側に隣接する。この二つの調査区では弥生集落の内部から環濠帯にかけて調査し、第13次調査区では弥生中期の環濠5条を検出している。収録した木器は第13次調査区で検出した環濠SD-02とSD-06、井戸SK-07、第19次調査区で検出した井戸SK-102から出土した。環濠SD-02は幅6.3m、深さ1.2mをはかる。溝の下層には植物層が堆積し、組合せ鋤と柄、鞘入り石剣、匙未成品、火鑽臼、緯打具、箕、丹塗板などが出土。第Ⅳ様式。環濠SD-06は幅10.5m、深さ1.6mをはかる。溝の最下層・下層には黒色粘土などが埋没し、これらの土層を覆って砂層・砂質土の洪水堆積（中層）がみられる。泥除は中層、一木鋤は下層から出土した。中層は第Ⅳ様式、下層は第Ⅲ様式。SK-07はSD-06の東側で検出した井戸。最大径2.1m、深さ不明。中層よ

第三章 遺跡解説

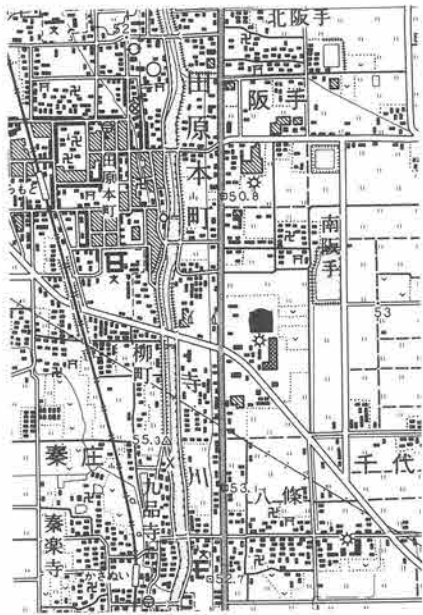


fig. 308 阪手遺跡木器出土地点
(1:25,000 桜井)

り穂摘具が単独出土。第Ⅳ様式。SK-102はSD-204（第13次調査区のSD-06に対応）の東側において検出した井戸。東西3.3m、南北2.3m、深さ1m。井戸の堆積は4層に大別でき、中層の黒色粘土層などから泥除の未成品3点が出土。この3点は一連の製作工程のもので、層位ごとに進行過程がわかる。第Ⅳ様式あるいは第Ⅴ様式。

〔木器番号〕SD-02; 05504, 07111, 09718, 11312, 12312, 17211

SD-06; 03814, 06505 SK-07; 07805

SK-102; 02909, 04102, 04103, 04105

〔文 献〕藤田三郎『昭和57年度 唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要1, 田原本町教育委員会1983年

藤田三郎『昭和58年度 唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要2』田原本町教育委員会1984年

c 唐古・鍵遺跡 第26次調査

田原本町教育委員会が1987年に調査。調査地は第1次調査の唐古池の東側にあたる。集落内部に該当し、大溝・土坑・柱穴などを検出。SK-2116は長軸2.6m、短軸2.2m、深さ1.3mを測る楕円形の土坑。土坑の底よりやや上で横杓子の未成品が出土。木器貯蔵用の土坑と考えられる。第Ⅲ様式。

〔木器番号〕12406

〔文 献〕藤田三郎『昭和61年度 唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要7, 田原本町教育委員会1987年

13 阪手遺跡 (fig. 308) さかて

磯城郡田原本町阪手に所在。奈良盆地の中央、標高約51mの水田地帯に位置する。1982年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施した。水田上面から約40～60cmで弥生時代の地山を検出。遺構としては井堰跡を検出したのみで、水田跡は確認できなかった。井堰は幅10mにわたり、200本の杭でしがらみを組んでいた。井堰の周囲で弥生後期の土器片と石庖丁が出土している。しがらみの下部から穂摘具・杵などの木器が出土し、そこから数mへだてた溝のよどみから自然木とともに鋤身が出土した。なお地表下約5m（標高47.2～47.3m）で、始良火山灰、その上層でさらに2層の火山灰（阪手火山灰）を検出している。

〔木器番号〕02006, 07823

〔文 献〕東潮・他「磯城郡田原本町阪手遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県教育委員会1983年

14 十六面・薬王寺遺跡 (fig. 309) じゅうろくせん・やっこうじ

磯城郡田原本町十六面・薬王寺に所在。国道24号バイパス路線建設工事に伴い、1981年4月から1982年5月にかけて奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。奈良盆地のほぼ中央に位置し、弥生時代後期～中世にわたる大規模な複合遺跡である。とくに古墳時代中期の遺構が顕著で、主として土坑から多量の木器・古式須恵器・土師器が出土している。収録した木器は5世紀後半に比定される資料で、南Ⅰ区の溝SD-02, 南Ⅱ区の土坑SK-02・SK-07・SK-13から出土した。



fig. 309 十六面・薬王寺遺跡木器出土地点
(1:25,000 桜井)

南Ⅰ区の溝SD-02は古墳時代中期集落跡の北限の大溝。幅約65m。深さ0.15～0.45m。暗灰色粘土が堆積する。南Ⅱ区のSK-02は長さ約4.9m、幅約1.2m、深さ約9.8mをはかる溝状の土坑。古式須恵器を含む多量の土器とともに、曲柄鋤身などの木器も出土している。SK-07は径約1.4m、深さ約0.85mの円形土坑。壁部はほぼ垂直に落ちる。下半部に植物遺体を多く含む灰層が厚く堆積しており、この層から多くの木器が出土している。SK-13は全体はわからないが、大形の不整形土坑である。検出範囲での規模は、3.5m×4.0m、深さ0.6mで、底の一部を径約0.8m、深さ0.6mにわたり井戸状に掘り込んでいる。多量の土器、木器が出土した。

〔木器番号〕南Ⅰ区溝SD-02；09111, 09112, 09415, 09513, 17809

南Ⅱ区土坑SK-02；04608 南Ⅱ区土坑SK-07；04610

南Ⅱ区土坑SK-13；09414, 19001

〔文献〕服部伊久男・松本洋明・他「田原本町十六面・薬王寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』奈良県教育委員会1983年



fig. 310. 谷遺跡木器出土地点
(1:25,000 初瀬)

15 谷遺跡 (fig. 310) たに

宇陀郡榛原町の上井足と下井足にかけて所在する。比高20～50mの丘陵に囲まれた芳野川支流の谷間に立地する集落遺跡で、1983年から1984年にかけて奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。木器はCトレンチで検出した谷筋自然流路内において、弥生時代後期後半以降、とくに古墳時代後期を主体とする土器類とともに多量に出土。建築部材・農具・容器・紡織具・腰掛・楽器・武器・馬具など多種にわたる。いずれも使用済みの廃品や破損品で、建築部材などの大型品の出土状況から、Cトレンチで検出した谷川が、木器を再利用するための貯蔵場であったと思われる。

〔木器番号〕09509, 09511, 11803, 14303, 15107, 16215, 16315, 16316, 17107, 17605, 17606

〔文献〕松本洋明「谷遺跡」『大和を掘る－1984年度発掘調査速報展－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1985年

松本洋明・他「宇陀地方の遺跡調査（大和高原南部地区パイロット事業地内の発掘調査概要）－昭和59年度－」『奈良県遺跡調査概報1984年度』奈良県教育委員会1985年

16 纏向遺跡 (fig. 311) まきむく

桜井市太田・辻・東田・草川・巻野内・大豆越に所在。径1km以上の範囲にわたる弥生時代末期から古墳時代前期を中心とするこの時期の日本有数の大集落で、畿内政権の基盤的な集落と考えられている。大和高原から奈良盆地に流れ出る巻向川が形成した扇状地上にあり、標高70m前後に立地する。1971年以降、橿原考古学研究所・桜井市教育委員会が発掘調査を継続している。検出遺構はこの時期の墳墓、古墳の周濠、建物、大溝、土坑、ピットなどのほか古墳時代後期の古墳など多数にのぼる。木器はこれらの墳墓、古墳の周濠、大溝、土坑から各種の遺物とともに出土したもので、その内容は農具、容器、祭祀具を始めとして多種にわたる。

とくに纏向1式期の石塚古墳周濠の孤文円板・鶏形・天秤棒・鋤・建築部材や纏向3式期の辻地区土坑4の大型木製高杯・鳥形容器及び舟形などが顕著なものである。



fig. 311 纏向遺跡木器出土地点
(1:25,000 桜井)

第Ⅲ章 遺跡解説

a 東田（ひがしだ）地区大溝

纏向遺跡を貫流する2条の大溝（北溝と南溝）があり、同溝は東田地区で合流する。溝の幅は5～6m、深さ1.2mで、矢板・杭などで護岸する。合流地点には井堰が設けられ、その上流約30mの南溝には「集水マス」が構築されている。纏向1式期に掘削され、同3式期まで機能した人工水路と考えられる。

〔木器番号〕北溝；03803, 07010, 09801 南溝；18518, 19715

〔文献〕石野博信・関川尚功・他『纏向』桜井市教育委員会 1976年

b 石塚（いしづか）古墳周濠

太田（おおた）246-1番地ほかに所在する。1971～1975年に橿原考古学研究所（1～3次調査）、1989年に桜井市教育委員会（4次調査）が発掘調査を実施。

墳丘は平面バチ形の前方後円状をなし、前方部を東南に向け、全長約93m、後円部最大幅約64m、前方部最大幅約36mをはかる。周囲には前方部前面付近がやや突出した楕円形の周濠がめぐる。周濠の総長は約120mと推定される。周濠内から纏向1式を主体とする土器とともに多数の木器が出土している。収録した木器は1～3次調査のものに限る。

〔木器番号〕02005, 06306, 06604, 09802, 16513, 17004

〔文献〕石野博信・関川尚功・他『纏向』桜井市教育委員会 1976年

寺沢薫・萩原儀征・他『纏向石塚古墳－範囲確認調査（第4次）概報－』桜井市教育委員会 1989年

c 辻（つじ）地区 土坑4

旧巻向川流域を中心に多数分布する祭祀に関連した土坑のひとつ。径約3mの不整円形をなし、深さ約1.5m。土坑内の堆積土は大きく3層にわかれ、上層は纏向4式の土器を含み、中・下層は纏向3式土器の標式となっている。木器は中層の刳殻を主体とする植物層内から主に出土した。

〔木器番号〕12106, 13223, 15008, 16514, 16802, 17604, 19817, 20005

〔文献〕石野博信・関川尚功・他『纏向』桜井市教育委員会 1976年

d 辻地区 土坑5

径2.5×2.3mの円形をなし、深さ約1.6m。土坑内の堆積土は、上から黒褐色土・黒色粘土・黒色砂層で、上部に纏向3式の土器片を多く含む。木器は黒色砂層から若干量が出土している。

〔木器番号〕19202

〔文献〕石野博信・関川尚功・他『纏向』桜井市教育委員会 1976年

e 巻野内・家ツラ地区 溝2

1987年10月、桜井市教育委員会が実施した巻野内・家ツラ地区の発掘調査で、集水施設と考えられる遺構群を検出した。木樋と集水水槽からなる集水施設で、付近に掘立柱建物2棟が建っていた。南側の溝の中から、弧文板が一枚出土している。溝内出土の土器から、布留式土器期（4世紀初）に埋められ、庄内式土器期（3世紀後半）に機能したと考えられる。桶状容器や火鑽臼・農具類が共伴している。

〔木器番号〕 17002

〔文 献〕 桜井市教育委員会『桜井市巻野内 纏向遺跡発掘調査概報』桜井市埋蔵文化財発掘調査概報 1987-7, 1987 年

萩原儀征「纏向―巻ノ内家ツラ地区―」『大和を掘る―1987 年度発掘調査速報展―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1988 年

17 城島遺跡（下田地区）(fig. 312) しきしま（しもだ）

桜井市大字外山（とび）から栗殿（おうどの）・慈恩寺にかけて所在する集落・生産遺跡。初瀬川と栗原川にはさまれた標高 85m 前後の沖積平野上に立地し、8 万㎡に及ぶ広い範囲で弥生時代～中世にいたる遺構群を検出している。とくに、古墳時代中～後期の掘立柱建物や竪穴住居群、古墳時代後期～奈良時代の水田などが顕著な遺構である。市水道局前に欽明天皇の磯城島金刺宮推定地の石碑が立っているが根拠はない。

1984 年 8 月、桜井市教育委員会が下田地区の発掘調査を行なったところ、約 10m 四方の範囲におよぶ浅い窪地状遺構がみつき、中から鍬・鋤・天秤棒・田舟・槽などの木器が 100 点近く出土した。木器を含む青灰色粘土層内からは、ほかに自然木が多く出土しており、自然埋没の可能性も考えられる。共伴した土器は布留式土器期（4 世紀前半）で、南東約 300m の栗原川南岸にある桜井茶臼山古墳に近い時期と考えられる。

〔木器番号〕 02103, 04308, 04310, 04312, 04501, 04603, 04606, 05102, 05103, 06305, 06605, 06606, 06608, 06901, 06902, 06903, 06904, 06905, 10302

〔文 献〕 清水真一「外山 下田遺跡（桜井市外山）」『大和を掘る―1984 年度発掘調査速報展―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1985 年

桜井市教育委員会『桜井市外山下田遺跡発掘調査概報』桜井市文化財発掘調査概要 1984-1, 1984 年

18 上之宮遺跡 (fig. 313) うえのみや

桜井市大字上之宮に所在する集落遺跡。寺川の左岸、河岸段丘上に立地し、標高 110m 前後にある。約 1 万㎡におよぶ範囲で、古墳時代～飛鳥時代にかけての遺構群を検出している。とくに四面庇をもつ掘立柱建物を中心として、柵で囲んだ 6 世期末～7 世紀初頭の居館遺構を発見し、「上之宮」の地名とともに、その性格が重要視されている。

1987 年～1990 年にかけて、5 次におよぶ発掘調査を桜井市教育委員会が実施している。1987 年 4 月、発掘調査範囲北端の整地層中から、1 個の横櫛が出土した。古墳時代後期までの縦櫛と、飛鳥時代以後の横櫛との中間形態を示しており、櫛の形態変化の上で重要な位置を占める。このほかに桃核や馬歯・滑石小玉などが出土しており、整地時の地鎮もしくは整地の際に運ばれた土中に含まれた遺物と考えることができるだろう。

〔木器番号〕 12012

〔文 献〕 桜井市教育委員会『桜井市 上之宮遺跡宮ノ前地区発掘調査概報』桜井市埋蔵文化財概報 1987-1, 1987 年

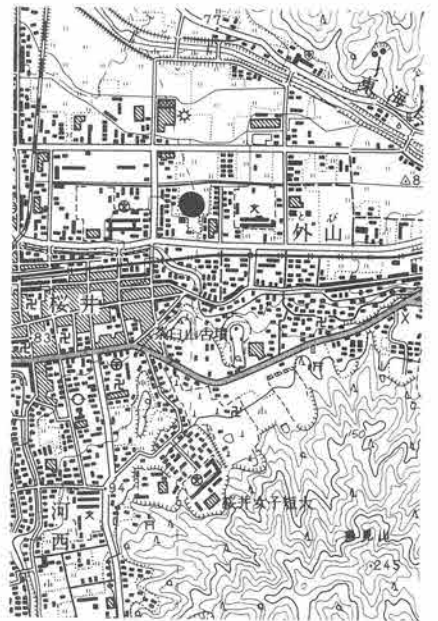


fig. 312 城島遺跡（下田地区）木器出土地点 (1:25,000 桜井)

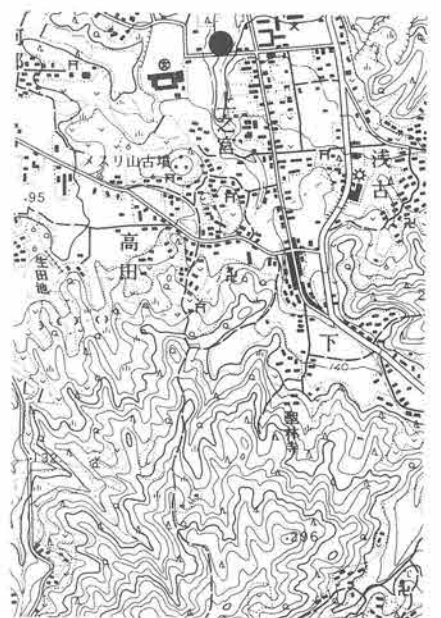


fig. 313 上之宮遺跡木器出土地点 (1:25,000 畝傍山)

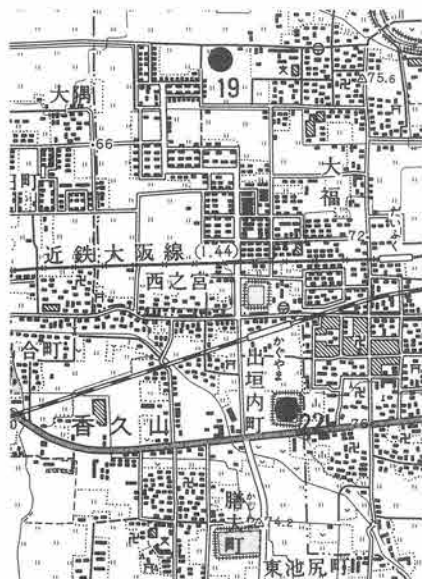


fig. 314 大福・黒田池遺跡木器出土地点 (1:25,000 桜井)

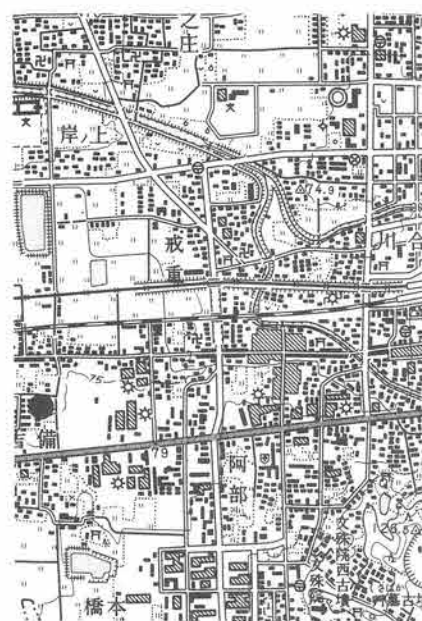


fig. 315 吉備遺跡（岡崎地区）木器出土地点 (1:25,000 桜井)



fig. 316 坪井遺跡木器出土地点 (1:25,000 桜井)

19 大福遺跡 (fig. 314) だいふく

桜井市大福に所在する縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡。奈良盆地の東南隅、耳成山から西1,300mの、寺川と米川との複合扇状地の上に立地する。宅地造成の事前調査として、1973年に橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。

弥生時代の遺構としては溝・土坑・土器棺墓を検出した。溝は2条検出しており、いずれも集落の南を画する溝と想定される。木器が出土した溝Ⅰは幅3.8m、深さ1mをはかり、東西7mにわたり調査した。溝の西半分には下層で茶褐色のシマ状堆積があり、その上に堆積した50cmの厚さの有機質土層から炭化した植物遺体とともに木器が出土している。伴出土器は若干第Ⅰ様式をまじえるものの、大半は弥生中期とくに第Ⅲ様式の弥生土器が主体を占める。

〔木器番号〕00502, 02307, 07203, 14606, 14607

〔文 献〕亀田博・他『大福遺跡－桜井市大福所在遺跡の調査報告－』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第36冊、奈良県教育委員会1978年

20 吉備遺跡（岡崎地区）(fig. 315) きび（おかざき）

桜井市大字吉備に所在する集落遺跡。寺川と米川とにはさまれた標高70m前後の沖積平野上に立地し、2万㎡におよぶ範囲で縄文時代晩期～飛鳥時代にかけての遺構群を検出している。とくに、弥生時代後期と飛鳥時代の溝や掘立柱建物群が顕著な遺構である。

1985年8月、桜井市教育委員会が岡崎地区の発掘調査を行ない、弥生時代後期の蛇行した旧河道を検出した。河道内から多量の土器片のほか、木器やひょうたん・トチの実などの植物遺体が出土した。近くの住居群で使用した生活用品の棄て場の可能性が高い。木器には斧柄・鋏・鋤・穂摘具・横槌のほか、赤色顔料を塗布した祭祀用具や小孔のあいた木片（木盾か？）などがある。

1985年9月、約1km北西の大福遺跡内で銅鐸が発見されたことにより、同時代とみられる吉備遺跡の存在が重視されるようになった。

〔木器番号〕00213, 01804, 07812, 07815, 07827, 09106, 19403, 20117

〔文 献〕清水真一『桜井市 吉備遺跡岡崎地区発掘調査概報』桜井市教育委員会1986年

21 坪井遺跡 (fig. 316) つばい

橿原市常盤町大字坪井を中心に所在。耳成山の北東を流れる寺川とその支流の米川とにはさまれた標高約65mの水田地帯に立地する。周辺には、寺川水系に沿った約2kmの範囲に、大隅・大福・大福池・東新堂遺跡など縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡が分布し、これらは坪井遺跡と併存した可能性が高い。

1932年、下村正信が遺跡の存在を明らかにし（『大和考古学』第2号）、水路工事で出土した土器をもとに、1959年、網干善教が弥生時代を通じての遺跡であると位置づけた（『古代文化』3-10）。1981年、学校建設工事に伴い奈良県立橿原考古学研究所が第1次発掘調査を実施。1983年の第3次調査以降は、橿原市教育委員会が主体となって調査を継続している。

収録した木器は1983年2月～5月に橿原市教育委員会が実施した第3次調査で出土したもの。この調査では、弥生時代前期の土器棺墓・木棺墓群・弥生時代中期の溝、弥生時代後期～古墳時代前期の溝、古墳時代の木槌など、弥生時代前期～奈良時代の遺構を検出している。剣

把が出土したのは弥生時代中期の溝SD-1008で、集落を区画する濠の一部の可能性はある。短甲が出土したのは弥生時代後期～古墳時代前期の溝SD-14・18で、取水のための木樋が遺存していた。短甲は浅い流路状溝が蛇行した部分から出土した。

〔木器番号〕 溝SD-1008; 11311 溝SD-14・18; 11528

〔文 献〕 橿原市千塚資料館『貫頭衣を着た人々の暮らし』1983年

22 黒田池遺跡 (fig. 314) くろだいけ

橿原市出垣内町字黒田に所在。香久山の北約1.5km、寺川と米川とにはさまれた沖積平野に立地する。1954年、橿原考古学研究所と天理参考館とが共同で発掘調査を実施。土師器・須恵器などとともに、撚網杵や盤・剣形などの木器が出土した。

〔木器番号〕 10601, 16204

〔文 献〕 小島俊次「黒田池遺跡発掘調査概要」『大和文化研究』第2巻第2号、大和文化研究会1954年

小島俊次『奈良県の考古学』郷土考古学叢書1、吉川弘文館1965年

23 曾我遺跡 (fig. 317) そが

橿原市曾我町に所在する弥生時代中期から古墳時代後期にわたる集落・玉類の生産遺跡で、南北約400mの範囲におよんでいる。とくに、国道24号線橿原バイパス建設工事に伴い1982～1983年に奈良県立橿原考古学研究所が実施した発掘調査の結果、古墳時代中期後半から後期前半にかけて、各種の石製模造品・玉類の生産を行っていたことが判明し、日本でも最大規模の玉生産遺跡であることが明らかになった。

舞錐の弓が出土したのは、C地区の土坑SK-01。径約5m、深さ約1.7mで、土師器・須恵器のほか滑石・碧玉の玉類の未成品、剥片、砥石、自然木などが出土した。6世紀後半に埋没した遺構である。

〔木器番号〕 01101

〔文 献〕 関川尚功・他「橿原市曾我遺跡発掘調査概報2」『奈良県遺跡調査概報1983年度』奈良県教育委員会1984年

24 四分遺跡 (fig. 318) しぶ

橿原市四分町に所在。飛鳥川右岸の自然堤防上に立地する弥生時代の大集落遺跡。東西250m、南北400m以上の範囲におよぶこの集落遺跡は、畿内第I様式の中段階に始まり、第V様式期の終わりまで継続するが、中期以降に遺構の密度・遺物の出土量が急増し、とくに後期後半期の遺物の出土量は膨大である。ただし、弥生時代後期を頂点として、古墳時代になると集落規模は極端に縮小する。その後、古墳時代を通じて集落は存続するが、弥生時代に比べてはるかに小規模である。

1970年以降、藤原宮跡発掘調査の一環として奈良国立文化財研究所が調査を継続しており、これまでに竪穴住居・柱穴・井戸・溝・土坑・水田などを検出している。出土遺物には多くの土器や石器のほかに、木器や銅鏃もあり、銅鐸形土製品2点も発見されている。

〔文 献〕 宮沢智士・小笠原好彦・菅原正明・他『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報31冊、奈良国立文化財研究所1978年



fig. 317 曾我遺跡木器出土地点
(1:25,000 桜井)



fig. 318 四分遺跡木器出土地点
(1:25,000 畝傍山)

第Ⅲ章 遺跡解説

木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告
Ⅲ－藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査－』奈良国立文化財研究所学報第37冊，
奈良国立文化財研究所1981年

a 井戸SE610（6AJL-E区）

直径1.6m，深さ1.2mの素掘りの井戸。内部の土層は4層に区分できるが，最下層の粗砂層が井戸内の堆積層であろう。井戸は一部埋まったあと，土器等の捨て場として使われたらしく，上部3層からは第Ⅲ様式新段階の土器が多量に出土した。木器もそれらの土器と同様な状況で埋まっていた。

〔木器番号〕07909

〔文献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

b 井戸SE758（6AJL-E区）

東西2.4m，南北2mの不整円形の平面をもつ，深さ1.4mの素掘りの井戸。井戸内部の土層は3層に区分でき，上層からは第Ⅴ様式の土器が少量出土した。中・下層はともに井戸の埋土と考えられ，第Ⅲ様式古段階の土器がまとまって出土した。下層から砥石，中・下層にまたがって竪杵，上層からは石庖丁・石鏃が出土した。

〔木器番号〕08701

〔文献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

c 井戸SE1481（6AJL-E区）

直径4m，深さ1.7mの素掘りの大型井戸。井戸内の堆積層は上下2層に区別できるが，両層から多量の第Ⅲ様式土器が出土した。井戸の一部は後期の井戸によって破壊されている。

〔木器番号〕09010

〔文献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

d 溝SD666（6AJL-E区）

幅4.4m，深さ0.9mの南北方向の大溝。溝の断面形は底面幅（3m）の広い逆台形を示し，溝内の堆積層は4層に大別できるが，多量の流水を示す砂の堆積はみられない。最下層からは第Ⅲ様式土器が出土するが，中・下層には第Ⅴ様式前半期の土器が，上層には第Ⅴ様式後半期の土器が多量に含まれていた。また，上層からは銅鏃2点が出土している。

〔木器番号〕中層出土；00217, 02102 上層出土；17208

〔文献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

e 井戸SE760（6AJL-E区）

南北3m，東西2.8m，深さ2.2mの円形の井戸。井戸内の堆積層は4層に区別され，中層からは完形品を含む多量の第Ⅴ様式土器が出土し，下層からは編物，木器，種子などの有機質遺物が出土した。なお井戸最下層には，約20余点の完形壺が累積した状況で埋まっていた。

〔木器番号〕09009, 09410, 09515, 15602, 17207, 19703, 20010

〔文献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

f 井戸SE1665 (6AJL-E区)

直径約4m、深さ2mで円形の平面を持つ大型の素掘り井戸。底部の径は約2.5m、内部には11の堆積層が認められた。このうち第V様式土器は主として中間層から出土し、鍬・木錘などの木器は下層から出土した。

〔木器番号〕09309

〔文献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」(前掲)

g 井戸SE555 (6AJL-E区)

長辺1.6m、短辺1.2mの不整長円形の素掘り井戸。深さ1.4mの底面には拳大の石を密に敷いていた。井戸内の堆積土は4層に大別され、上層には土器片、下層には木製品や種子が含まれ、最下層からは須恵器片や完形に近い土師器甕が出土した。5世紀末に掘られた井戸であろう。

〔木器番号〕17313

〔文献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」(前掲)

h 河SD1331 (6AJG-Q区)

四分遺跡の北端付近を西流する幅約3m、深さ0.5m以上の自然河川。堆積土中からは多くの第V様式土器が、少量の第IV様式土器とともに出土した。木器としては農具や工具などが出土している。

〔木器番号〕03702, 05703

〔文献〕宮沢智士・小笠原好彦・菅原正明・他『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』(前掲)

25 埴口丘陵古墳 (fig. 319) はにぐちきゅうりょうこふん

北葛城郡新庄町北花内に所在。前方部を南西に向けた全長約85mの前方後円墳で、現状では周囲に幅約10mの濠がめぐる。飯豊陵古墳とも言う。1979年2～3月の樋管改修工事に伴い、宮内庁書陵部が後円部周濠東外堤において発掘調査を実施。現在の東外堤が明治以後に造成されたもので、当初の周濠はさらに数m広いことが判明した。当初の周濠内堆積土(第Ⅵ層)から、円筒埴輪片などとともに笠形木器が出土した。

〔木器番号〕16902

〔文献〕土生田純之「埴口丘陵外堤の樋管改修箇所の調査」『書陵部紀要』第31号、宮内庁書陵部1980年

26 鴨都波遺跡 (fig. 320) かもつば

御所市掖上(わきがみ)に所在する弥生時代の集落遺跡。奈良盆地の西南隅、金剛山地の東麓にのびる一支丘の東端にあって、葛城山から東流する柳田川と金剛山地に沿って北流する葛城川との合流点近くに立地する。現在の鴨都波神社境内を中心とし、標高は100m内外をはかる。国道24号線改良工事を契機として、奈良県教育委員会や御所市が中心となって1960～61年に発掘調査を実施。高床建築と思われる柱根列や土坑・溝状遺構などを検出した。溝状遺構は幅2.3m、深さ0.5mで、畿内第Ⅲ様式～第Ⅴ様式の土器や石器・植物遺存体などとともに、各種木器が出土した。

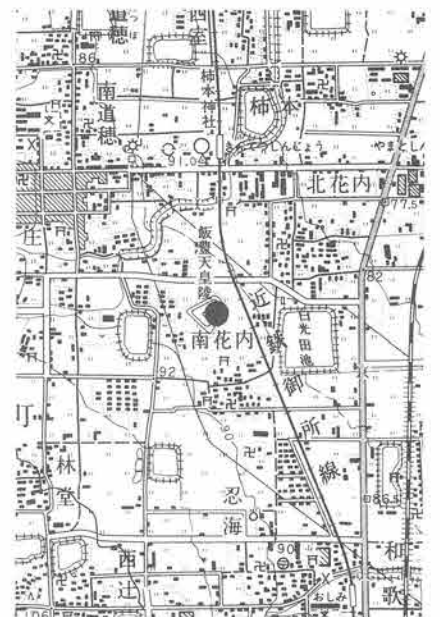


fig. 319 埴口丘陵古墳木器出土地点
(1:25,000 御所)

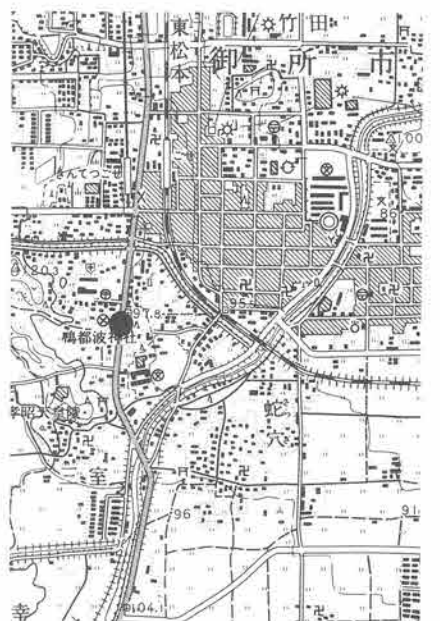


fig. 320 鴨都波遺跡木器出土地点
(1:25,000 御所)

〔木器番号〕 12107

〔文 献〕 網干善教「鴨都波遺跡」『御所市史』御所市役所 1965 年

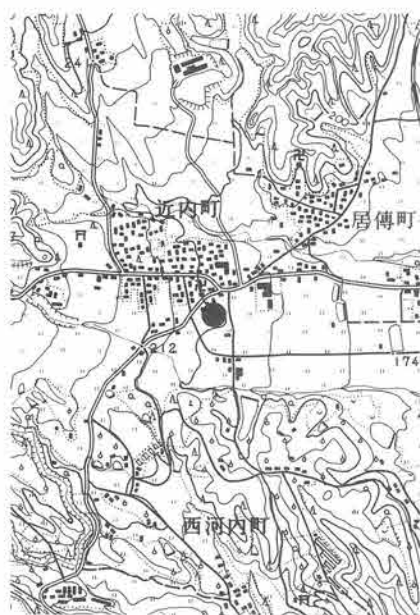


fig. 321 つじの山古墳木器出土地点
(1:25,000 五條)

27 つじの山古墳 (fig. 321)

五條市近内町に所在する。鐘子塚古墳を中心とする近内古墳群に属し、標高約 200m の扇状地状の地形に立地する一辺約 52m の方墳である。四周には幅 10m をこえる周濠の痕跡を明瞭にとどめる。

墳丘南側の周濠痕跡において家屋建築計画がなされたため、1974 年に橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。検出した周濠の規模は上部幅 9m、底部幅 7m、深さ 1m をはかり、墳丘裾部と外堤斜面に葺石を施している。濠内からは円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形木器が出土した。埴輪は墳丘側と外堤側から出土しており、盾形木器は墳丘側にやや寄った濠内から出土している。他に加工木の類は伴出していない。6 世紀には濠が埋没していることから、古墳築造年代は 5 世紀代かと考えられる。

〔木器番号〕 17011

〔文 献〕 久野邦雄・村井将幸・他「つじの古墳」『奈良県古墳発掘調査集報 I』奈良県文化財調査報告書第 28 集、奈良県立橿原考古学研究所 1976 年

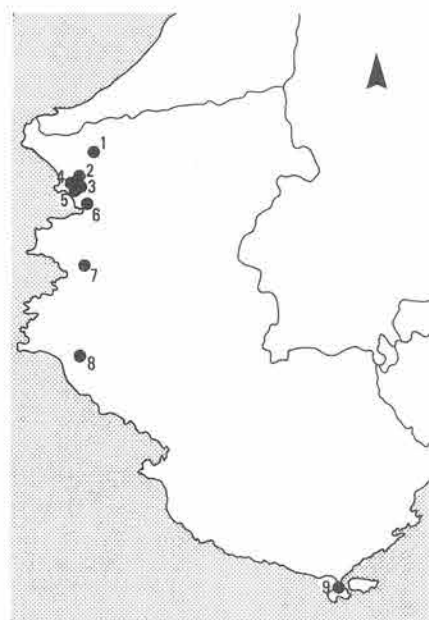


fig. 322 和歌山県の木器出土遺跡

G 和歌山県

1 田屋遺跡 (fig. 323) たや

和歌山市田屋に所在。和歌山県教育委員会が 1982 年 1 月から 1986 年 3 月まで 5 次にわたって発掘調査を実施した。紀ノ川下流右岸の沖積地に立地する。弥生時代後期と古墳時代中・後期の竪穴住居群や自然河道を検出している。

木器は竪穴住居群の傍の自然河道から出土。琴柱・矢・糸巻の支え木・木錘・穂摘具・又鍬身・鍬反柄などが 5 世紀中葉から 6 世紀の土器と共伴した。

〔木器番号〕 02410, 05205, 07814, 09425, 09604, 11509, 15613, 17108, 18621, 18713, 19912, 20119



fig. 323 田屋遺跡木器出土地点
(1:25,000 淡輪)

2 音浦遺跡 (fig. 324) おとうら

和歌山市鳴神に所在。1971 年と 1978 年との 2 回の調査を和歌山県教育委員会が行なった。5 世紀の古墳群がある花山北西麓の微高地に立地する。竪穴住居・掘立柱建物・溝など、古墳時代を中心とした遺構を検出。出土した土器の中に韓式系土器が多く見られる。1978 年の調査で検出した幅約 6m、深さ 2m 内外の溝から曲柄又鍬身が出土した。弥生時代末から古墳時代初頭のものである。

〔木器番号〕 04414

3 鳴神Ⅱ遺跡 (fig. 325) なるかみ

和歌山市鳴神に所在。1969 年と 1970 年との 2 回の調査を和歌山県教育委員会が行なった。岩橋山塊西麓の沖積地に立地。検出したおもな遺構は井戸と溝である。井戸は奈良時代に属す。

溝は弥生時代末から古墳時代初頭にかけて開削されたもので、古墳時代中期に整備されて平安時代まで用水路としての機能を保っていた。幅7～8m、深さ約3mあり、現在紀ノ川南岸の広大な水田を灌漑している「宮井用水」の前身と考えられる。この溝に3条の小溝が合流する地点は溝幅がかなり広がっていて、堰と考えられる杭列が認められた。棟押・扉板・腰掛座板・竖杵などの木器はこの合流点から出土した。

〔木器番号〕 00405, 06601, 08905, 09110, 11210, 17701, 19008, 19201

〔文 献〕 藤丸詔八郎「鳴神Ⅱ遺跡」『近畿自動車道和歌山線関係第1次発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1970年

吉本亮俊・北山惇「鳴神Ⅱ遺跡出土の木製品」『昭和45年度阪和高速道路（近畿自動車道和歌山線）遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1971年

4 鳴神Ⅴ遺跡 (fig. 325) なるかみ

和歌山市鳴神に所在。1977年に和歌山県教育委員会が発掘調査を行なった。国造紀氏の本拠地と考えられている日前宮の東の微高地に立地する。弥生時代中期から近世にかけての遺構を検出。古墳時代後期の箱式石棺墓や土坑墓、中世の土坑墓などがおもな遺構である。遺物に緑釉陶器や円面硯などもある。収録した木器は4世紀の溝SD094とSD097から出土。SD094からは曲柄鋤身や自然木・種子などが、SD097からは横槌形や容器が出土している。

〔木器番号〕 溝SD094; 04711 溝SD097; 16413

〔文 献〕 吉田宣夫・山本高照・他『鳴神地区遺跡発掘調査報告書—一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査—』和歌山県教育委員会 1984年

5 井辺遺跡 (fig. 325) いんべ

和歌山市井辺・神前に所在。和歌山市教育委員会と関西大学文学部考古学研究室が1964年5月から6月にかけて2回にわたって発掘調査を行なった。井辺前山古墳群がある福飯ヶ峯北麓の標高約5mの沖積地に立地する。調査の結果、約4mの間隔を置いて並行する2条の土器列と井戸を検出した。土器列の土器は弥生時代後期後半に属す。井戸は、径2mの掘形内に刳抜き井筒を据えたもので、井筒には蔓3条をたがとして巻きつけていた。井戸内から古墳時代初頭の土器とともに釣瓶・竹製網代や桃核などが出土した。

〔木器番号〕 15202, 15305

〔文 献〕 森浩一・久野邦雄・他『井辺弥生式遺跡発掘調査報告書』社会教育資料(24), 和歌山市教育委員会 1965年

6 岡村遺跡 (fig. 326) おかむら

海南市岡田に所在。海南市教育委員会が1977年から1980年まで4回にわたって確認調査を実施。また、1987年7月から8月にかけて工事に伴う事前調査を行なった。亀の川ぞいの微高地に立地する縄文時代後期から中世にかけての集落遺跡。とくに弥生時代においては、亀の川流域における拠点集落であった。

木器は1979年の調査で検出した溝SD1と1987年の調査で検出した溝から出土している。SD1は推定幅約5m、深さ1mをはかり、弥生Ⅳ期の土器とともに自在鉤や一木鋤などが出土。1987年調査の溝からは弥生Ⅰ期からⅡ期にかけての土器とともに高杯が出土している。



fig. 324 音浦遺跡木器出土地点
(1:25,000 和歌山)



fig. 325 鳴神Ⅱ・鳴神Ⅴ・井辺遺跡
木器出土地点 (1:25,000 和歌山)

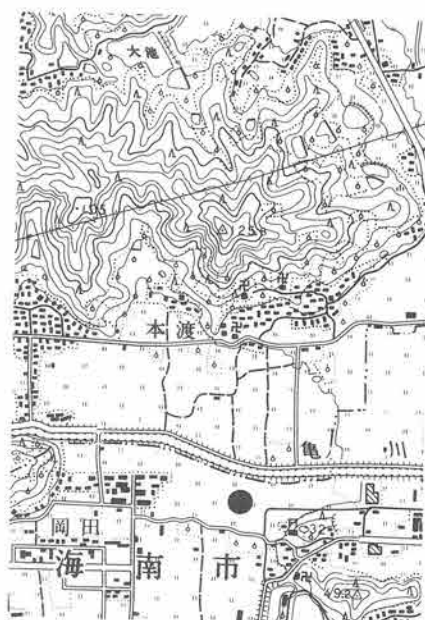


fig. 326 岡村遺跡木器出土地点
(1:25,000 和歌山)

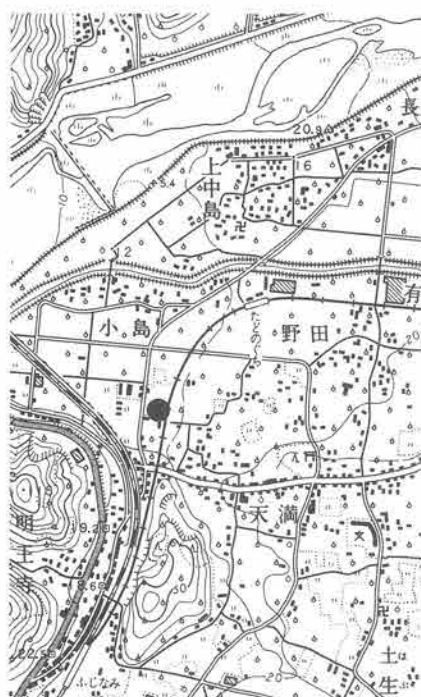


fig. 327 野田地区遺跡木器出土地点
(1:25,000 湯浅)

〔木器番号〕1979年調査 溝SD1 ; 06205, 06207, 06208, 07011, 17310

1987年調査 溝 ; 13103

〔文献〕萩本勝『岡村遺跡確認調査概報』海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会
1980年

7 野田地区遺跡 (fig. 327) のだちく

有田郡吉備町野田に所在。1980年5月から1981年3月まで和歌山県教育委員会が発掘調査を行なった。有田川下流左岸の沖積平野と河岸段丘上に立地する。段丘と沖積地との境目で、弥生時代末から室町時代にかけての10条の溝を検出。このうち9条の溝から木器が出土。SD10からは、弥生時代末から4世紀にかけての土器とともに横槌・木錘・梯子などが出土。4世紀の溝であるSD09からは部材が、9世紀の溝SD07からは机天板が出土している。

〔木器番号〕溝SD10 ; 09212, 09320, 19003

溝SD07 ; 17503

溝SD09 ; 18716

〔文献〕藤井保夫・渋谷高秀・他『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書（海南湯浅道路建設に伴う関連遺跡発掘調査）』和歌山県教育委員会 1985年



fig. 328 東郷遺跡木器出土地点
(1:25,000 御坊)

8 東郷遺跡 (fig. 328) とうごう

御坊市藤田町藤井に所在。1986年9月から1987年3月まで御坊市遺跡調査会が発掘調査を行なった。日高川下流右岸の微高地上に立地する。弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居14棟や溝などを検出。

木器は溝SD4から出土した。この溝は幅6m、深さ1.8mあり、櫓・斧直柄・曲柄鍬身・曲柄又鍬身などが、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器と共伴した。

〔木器番号〕00706, 04704, 04714, 10101

〔文献〕御坊市遺跡調査会『東郷遺跡発掘調査概報』1987年

9 笠嶋遺跡 (fig. 329) かさじま

西牟婁郡串本町串本に所在。同志社大学文学部考古学研究室を中心とする笠嶋低湿地遺跡発掘調査会が、1960年2月から3月にかけて発掘調査を実施した。潮岬台地北麓の砂州上に立地。本州と潮岬台地を繋ぐこの砂州は遺跡周辺で幅が最も狭い。

遺構は検出されなかったが、表土層下の泥炭層中から弥生時代後期の土器とともに船材・舟形・浮子・四脚盤・剣形などの木器が出土した。

〔木器番号〕05304, 09122, 09310, 09905, 10307, 10508, 10509, 10514, 10516, 10811, 13313, 13404, 13604, 14101, 16015, 16709, 19310

〔文献〕安井良三・伊藤久嗣・他『南紀串本 笠嶋遺跡』笠嶋遺跡発掘調査報告書刊行会
1969年



fig. 329 笠嶋遺跡木器出土地点
(1:25,000 串本)